

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議
第5回会議 次第

日時 令和4年6月21日(火)
15:00～17:00
方法 Zoomによるオンライン会議

1 開 会

2 議 事

子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について【資料1～4】

3 そ の 他

4 閉 会

岡山県生涯学習審議会委員及び岡山県社会教育委員

【任期:令和2年7月6日～令和4年7月5日】

番号	氏名	役職名	選出分野
1	井 辻 美 緒	(一社) やかげ小中高子ども連合代表理事	社会教育関係者
2	井 上 和 也	岡山県社会教育委員連絡協議会理事	社会教育関係者
3	大 久 保 陽 平	倉敷木材(株)代表取締役社長	学識経験者
4	小 田 幸 伸	高梁市教育委員会教育長	学識経験者
5	小 原 小 百 合	玉野市立荘内小学校長	学校教育関係者
6	神 田 敏 和	岡山県PTA連合会会長	社会教育関係者
7	新 信 宮 誠	岡山県立井原高等学校長	学校教育関係者
8	中 山 芳 一	岡山大学教育推進機構准教授	学識経験者
9	延 江 典 子	岡山県青年団協議会監事	社会教育関係者
10	波 多 洋 治	岡山県議会議員	学識経験者
11	平 井 美 佳	(株)山陽新聞社論説委員	学識経験者
12	藤 井 弥 生	NPO法人輝くママ支援ネットワークぱらママ代表理事	家庭教育関係者
13	村 上 岳	岡山県都市図書館協会副会長 (瀬戸内市民図書館長)	社会教育関係者
14	明 楽 香 織	NPO法人ランタン	社会教育関係者
15	村 木 生 久 (退 任)	岡山県公民館連合会会長	社会教育関係者

(50音順)

岡山県生涯学習審議会委員及び岡山県社会教育委員 第5回会議 出席者名簿

番号	氏 名	役 職 名
1	井 辻 美 緒	(一社) やかげ小中高子ども連合代表理事
2	大 久 保 陽 平	倉敷木材(株)代表取締役社長
3	小 田 幸 伸	高梁市教育委員会教育長
4	小 原 小 百 合	玉野市立荘内小学校長
5	信 宮 誠	岡山県立井原高等学校長
6	中 山 芳 一	岡山大学教育推進機構准教授
7	延 江 典 子	岡山県青年団協議会監事
8	波 多 洋 治	岡山県議会議員
9	平 井 美 佳	(株)山陽新聞社論説委員
10	藤 井 弥 生	NPO法人輝くママ支援ネットワークぱらママ代表理事
11	村 上 岳	岡山県都市図書館協会副会長
12	明 楽 香 織	NPO法人ランタン

欠席3名 (50音順)

事務局出席者

1	梅 崎 聖	教育次長
2	滝 澤 幸 隆	生涯学習課長
3	竹 林 京 子	生涯学習課副課長
4	國 分 優 子	生涯学習課企画推進班長
5	佐 野 俊 貴	生涯学習課社会教育班長
6	畦 田 真 介	生涯学習課社会教育主事 (主幹)
7	石 川 雄 大	生涯学習課指導主事 (主任)

子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について（答申）

令和 4 年 ○月

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議

目 次

はじめに

第1 「夢」のとらえ方	・・・	1
第2 現状と課題	・・・	1
1 子どもの夢や主体性について	・・・	1
2 豊かな体験活動について	・・・	2
3 学校と地域の連携・協働について	・・・	4
第3 仮説の設定	・・・	7
第4 モデル校等による検証	・・・	8
1 教育課程内	・・・	8
2 教育課程外	・・・	30
第5 子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について	・・・	35
1 3つの視点から見た方策	・・・	35
2 まとめ	・・・	37
3 具体的な方策の提案	・・・	38

おわりに

はじめに

令和 2 年 9 月 1 日、岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議（以下「本審議会」という。）は、岡山県教育委員会より「子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について（以下「諮問事項」という。）」諮問された。

具体的には、子どもたちが学びを更に進めようとする意欲を持つためには、学びの原動力である夢や目標を育むことが大切であること、夢を持ち育みながら、その実現のための道筋や方法について考え、更には夢や目標に向かって挑戦する教育である「夢育」について、学校教育のみならず、就学前から、社会教育、家庭教育など様々な学びの機会を通じて推進していきたいことが諮問の理由であり、諮問事項について、次の 3 つの視点を踏まえ、調査審議することが求められた。

- ① 学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。
- ② その際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。
- ③ 子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。

本審議会は、学識経験者、社会教育関係者、学校教育関係者、家庭教育関係者、企業関係者で構成され、令和 2 年 9 月 1 日の第 1 回会議以降、専門部会も含め〇回にわたり調査審議を行い、このたび、諮問事項について、次のとおり答申する。

令和 4 年〇月

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議

第1 「夢」のとらえ方

「夢」のとらえ方は、目の前の目標や職業、生き方等、人によって様々である。本審議会においては、「夢」や「夢育」は、かなり先の未来にある理想像や自分のなりたい職業だけでなく、子どもが、意欲的・主体的に「やりたい!」「やってみたい!」という思いを持てたものも含めて夢としてとらえ、今の自分から夢までの道のりが、近くても遠くても、子ども自身が楽しみながら「一歩先」へ進めるサポートを「夢育」と捉えることとした。

なお、子どもが「夢」を常に持っていることは難しい場合もあり、しんどさを感じたり、夢や目標を持てず苦しい時期を過ごしたりするときには、立ち止まってもよいことに留意する必要がある。

第2 現状と課題

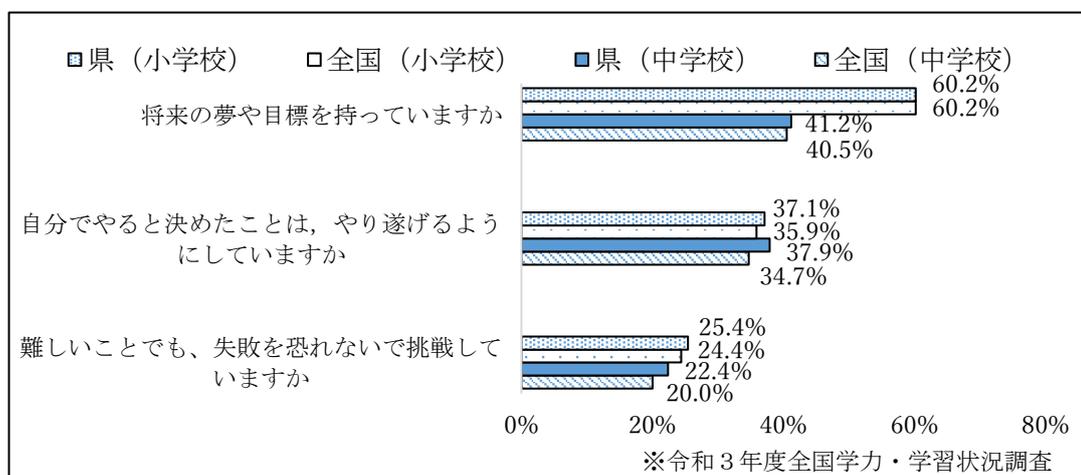
諮問事項に係る3つの視点について、全国学力・学習状況の調査結果等を踏まえ、その現状と課題を整理した。

視点①

1 子どもの意欲や主体性について

令和3年度全国学力・学習状況調査によると、本県で「将来の夢や目標がある」と回答した児童生徒の割合は、小学生で約60%、中学生で約41%に留まっている。また、自分で決めたことは、やり遂げることや失敗を恐れず挑戦する意欲や主体性は低い傾向にある（図1参照）。

図1 夢や主体性に関する項目に「当てはまる」と回答した児童・生徒の割合



2 豊かな体験活動について

子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、大人から与えられたものではなく、子どもの「やりたい!」「やってみたい!」という内的動機付けにより行われ、かつ、本物に触れたり、「見る」「触る」「味わう」といった直接的な体験、自分たちで計画して実行する活動（以下「豊かな体験活動」という。）が必要であり、こうした経験を通じて、子どもは自らの「夢」を育むことができる。

しかし、豊かな体験活動に結び付く可能性のある活動（図2参照）は、既に各団体や地域でそれぞれ個別に実施されているため、活動の実態や活動により育てたい力等の把握が難しい。また、地域により活動状況が異なる上、就学前の子どもや高校生を対象とした活動は、小学生から中学生を対象とした活動と比べると少なく（図3参照）、年代により偏りがある。

そもそも、体験活動の機会は、家庭や本人が希望して得るものであるが、体験活動へ参加していない児童の割合は、4割を超え（図4参照）、同じ地域・年代であっても、その機会に差（以下「体験格差」という。）が生じている（図5参照）。

図2 夢育に関係した活動の種類別割合

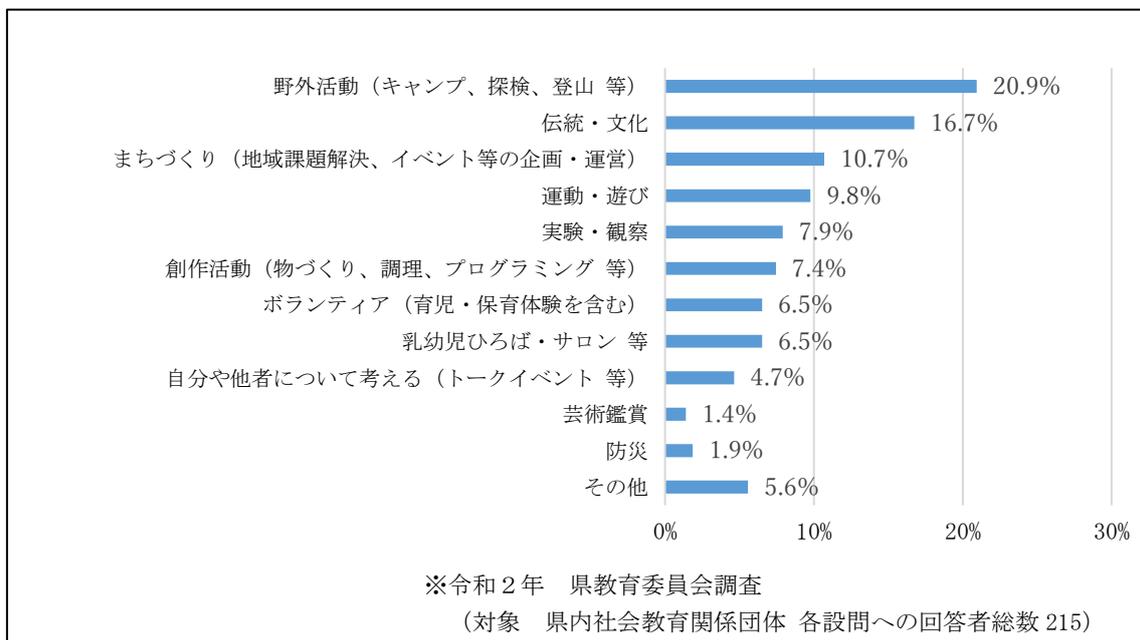


図 3 年代別夢育に関係した活動状況一覧（団体種別）

		0～2歳	3～就学前	小学校 1～3年生	小学校 4～6年生	中学校 生	高校生
民間	NPO等	18	15	29	28	19	13
	関係団体		1	18	17	13	1
	企業	1	4	6	9	7	2
	合計	19	20	53	54	39	16
行政	社会教育施設	2	8	20	25	13	4
	公民館		1	8	10	16	9
	地域学校			18	19	1	
	その他市町村			2	3	4	2
	合計	2	9	48	57	34	13
全体		21	29	101	111	73	29

※令和2年 県教育委員会調査（対象 県内社会教育関係団体）

図 4 公的機関等が行う行事への参加

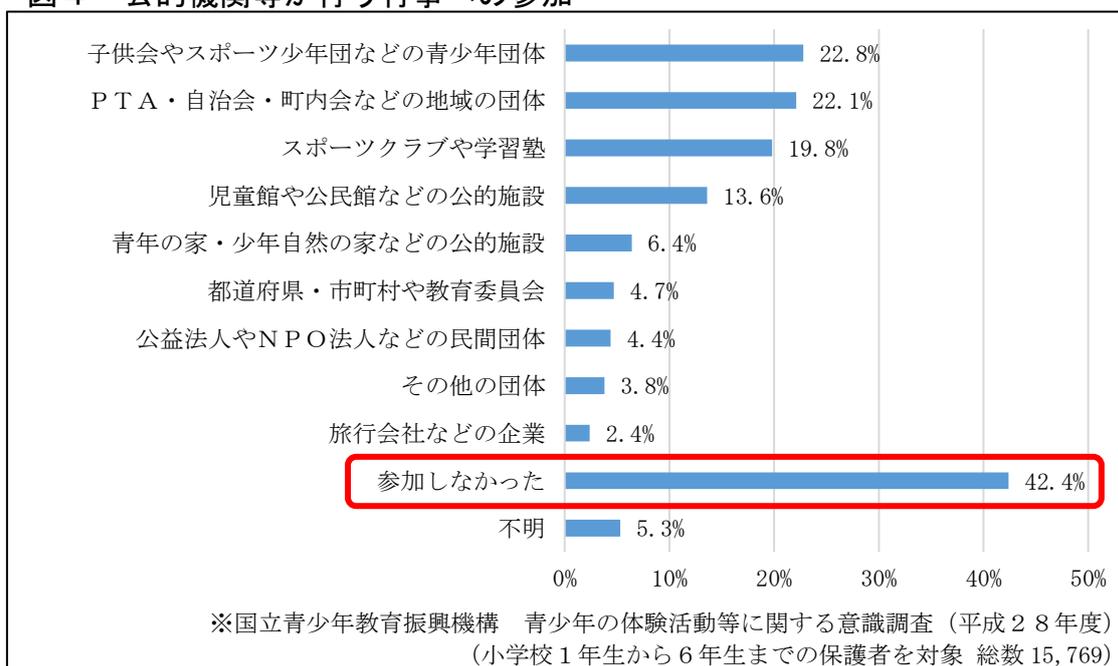
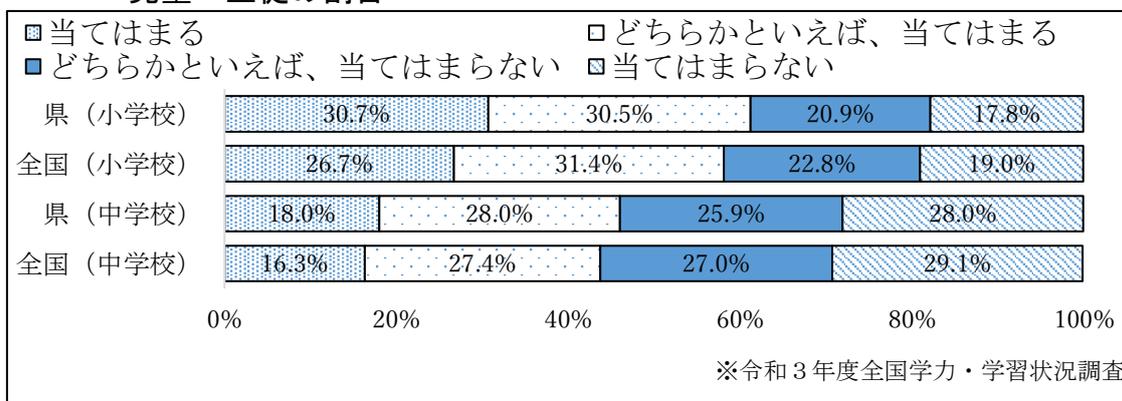


図5 「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の質問に回答した児童・生徒の割合



視点② 視点③

3 学校と地域の連携・協働について

小学校で6割程度、中学校で4割程度の学校が、学校と地域が連携・協働する何らかの取組を行っており、コミュニティ・スクールや地域学校協働本部の設置数は増加傾向であるが、その仕組みを活かして学校と地域が協働する割合は、小学校では5割未満、中学校では3割程度である（図6参照）。

学校と地域が連携・協働した取組は、現状では「登下校の安全指導」、「校内環境整備」、「授業補助」などの学校支援・学習支援が中心である。また、職場体験等により企業と連携する取組は、中学校で5割程度あるものの、「文化・芸術」「自然体験」等の豊かな体験活動に結び付く可能性のある取組の実施率は、小・中学校ともに低い状況である（図7参照）。

学校現場では、学校と地域が連携・協働する上で、「教職員の余裕がない」、「コーディネーターの後継者がいない」、「学校のニーズに合ったボランティアがない」等が課題と感じられており（図8参照）、多忙な教職員に代わり、学校のニーズに合った団体等とのマッチングや豊かな体験活動をサポートする人材の確保が課題である。

また、学校側は、学校と地域が連携・協働することについて効果を感じているが、地域側への効果は学校側に比べると分かりにくい状況である（図9参照）。

なお、令和5年度以降、中学校において休日の部活動の地域移行¹が段階的に実施される予定であり、学校と地域の連携・協働がより一層求められている。

¹令和2年9月1日文科科学省「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」

図 6 地域とのつながりに関する項目に「当てはまる」と回答した学校の割合

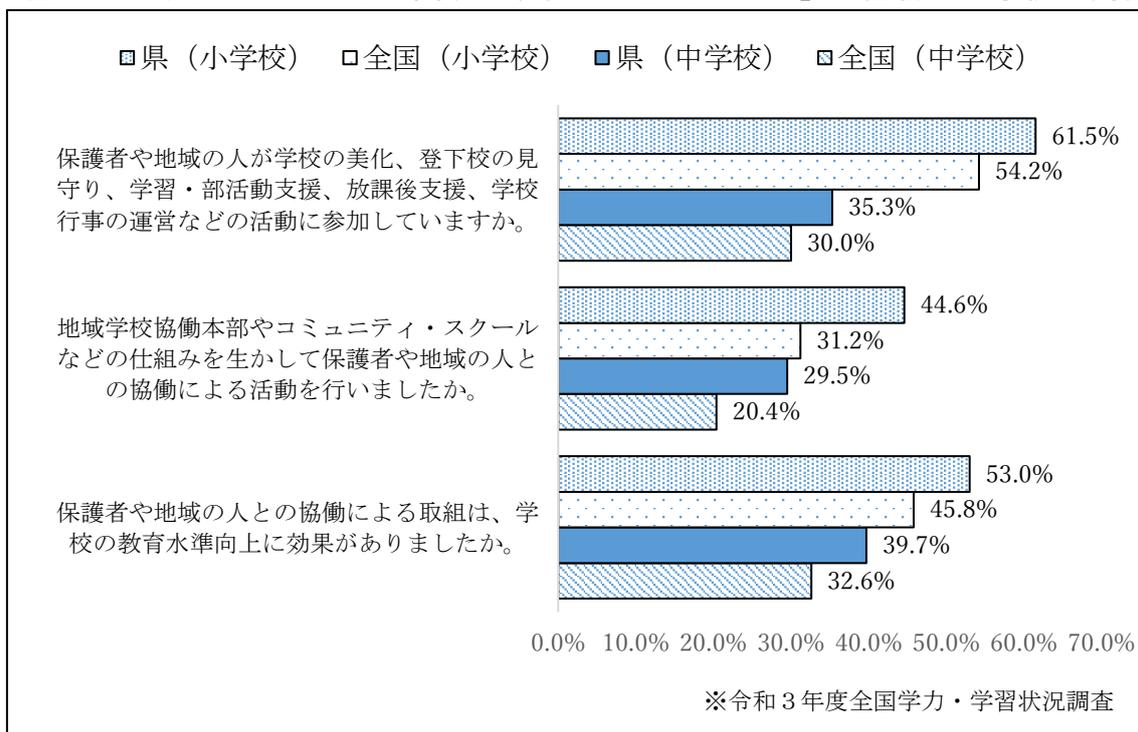


図 7 地域と連携・協働した取組の実施率

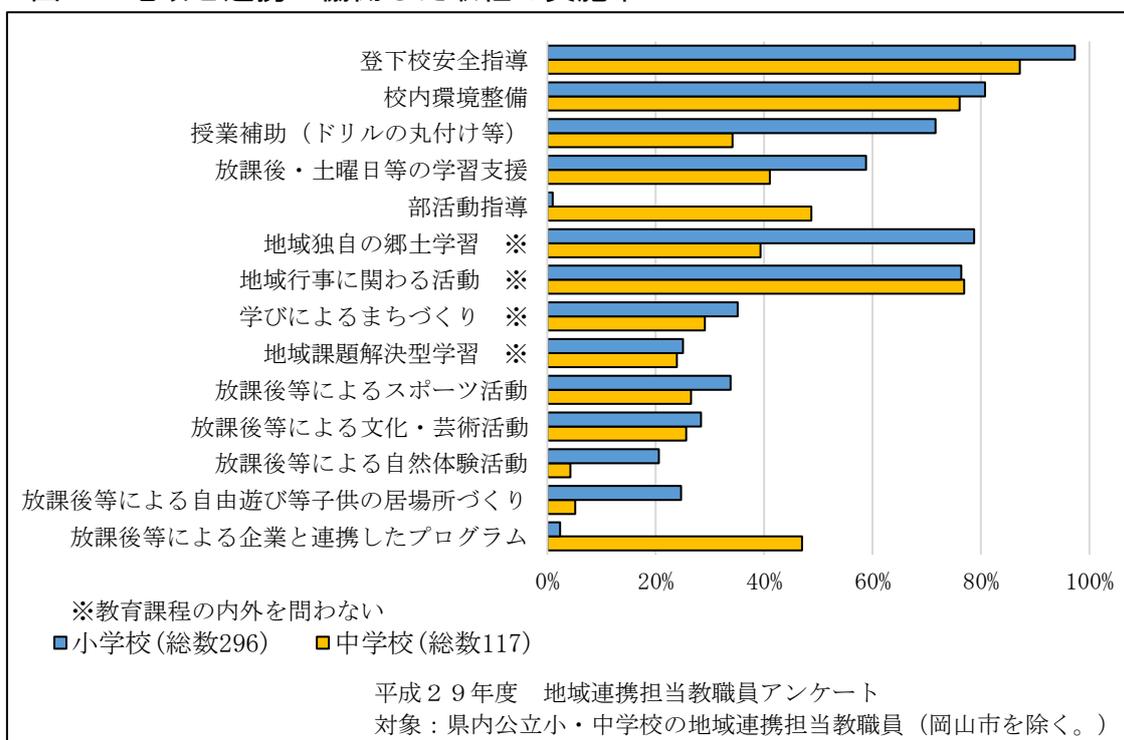


図 8 地域と連携・協働する取組の中で課題と感ずること

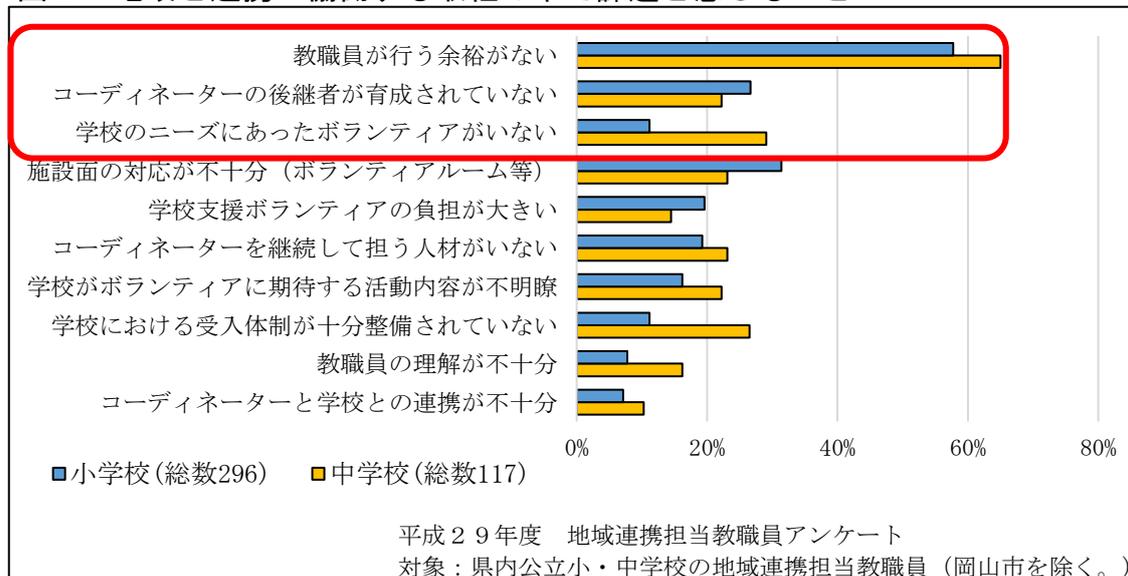
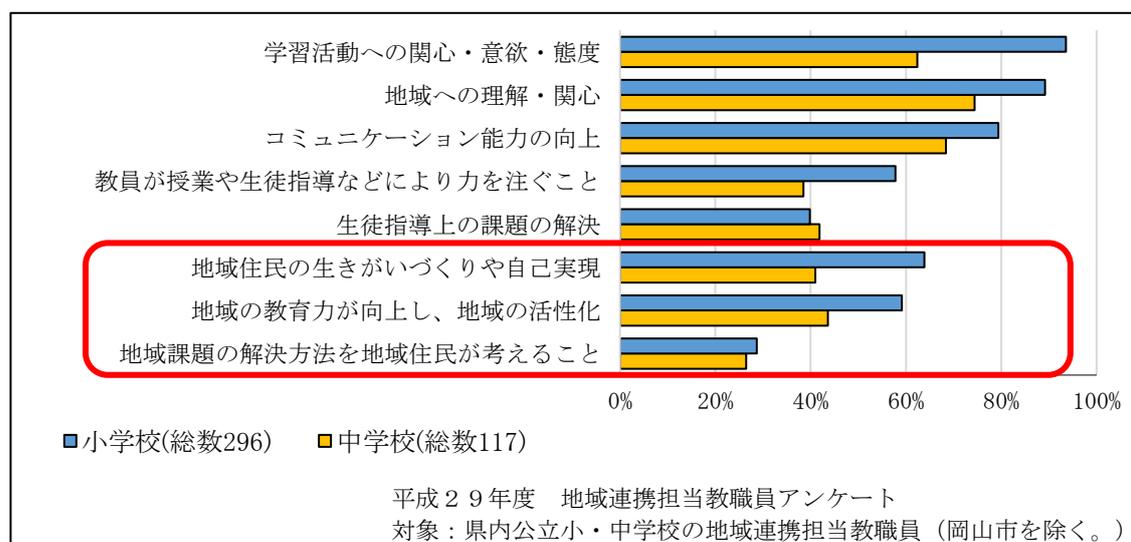


図 9 地域と連携・協働することで効果があったと感ずること



第3 仮説の設定

本審議会では、第2現状と課題を踏まえ、次のような仮説を設定し、検証することとした。

諮問事項の視点①②に対して

仮説 1

学校と地域の連携による豊かな体験活動を推進するとともに、体験格差を是正していくことによって、子どもたちの意欲や主体性等を育むことができるのではないか。

諮問事項の視点③に対して

仮説 2

子どもたちの育ちに地域の大人が主体的に関わることで、子どもだけでなく大人も共に成長することができるのではないか。

第4 モデル校等による事例検証

体験格差を是正し、全ての子どもが豊かな体験活動を行う機会を確保していくには、学校の間を活用し、教育課程内で子どもたちが豊かな体験活動に触れる機会を設けることや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の間を活用し、豊かな体験活動に触れる機会を設けることが望ましいため、第3の仮説について、県内の小・中学校等の取組をもとに検証した。

学校の間を活用した学校と地域の連携・協働による取組事例

1 教育課程内	(1) 笠岡市立笠岡東中学校 (検証モデル校) (2) 浅口市立寄島小学校 (3) 真庭市立八束小学校
2 教育課程外	玉野市地域子ども楽級 ^{がっきゅう}

1 教育課程内

(1) 笠岡市立笠岡東中学校(検証モデル校)

ア 概要

笠岡市のまちづくりや地域活性化等の課題について、そこに携わる地域の人々の思いや願いを踏まえて、課題や興味の内容が同じ生徒同士が小グループを結成し、全17の学習テーマを設定した。生徒は多様な地域の人々と関わり合いながら、フィールドワーク等の体験活動を通して、将来にわたる笠岡市の地域活性化の具体的な方策等を考え、提案するとともに、実際に課題解決に向けた取組を行った。

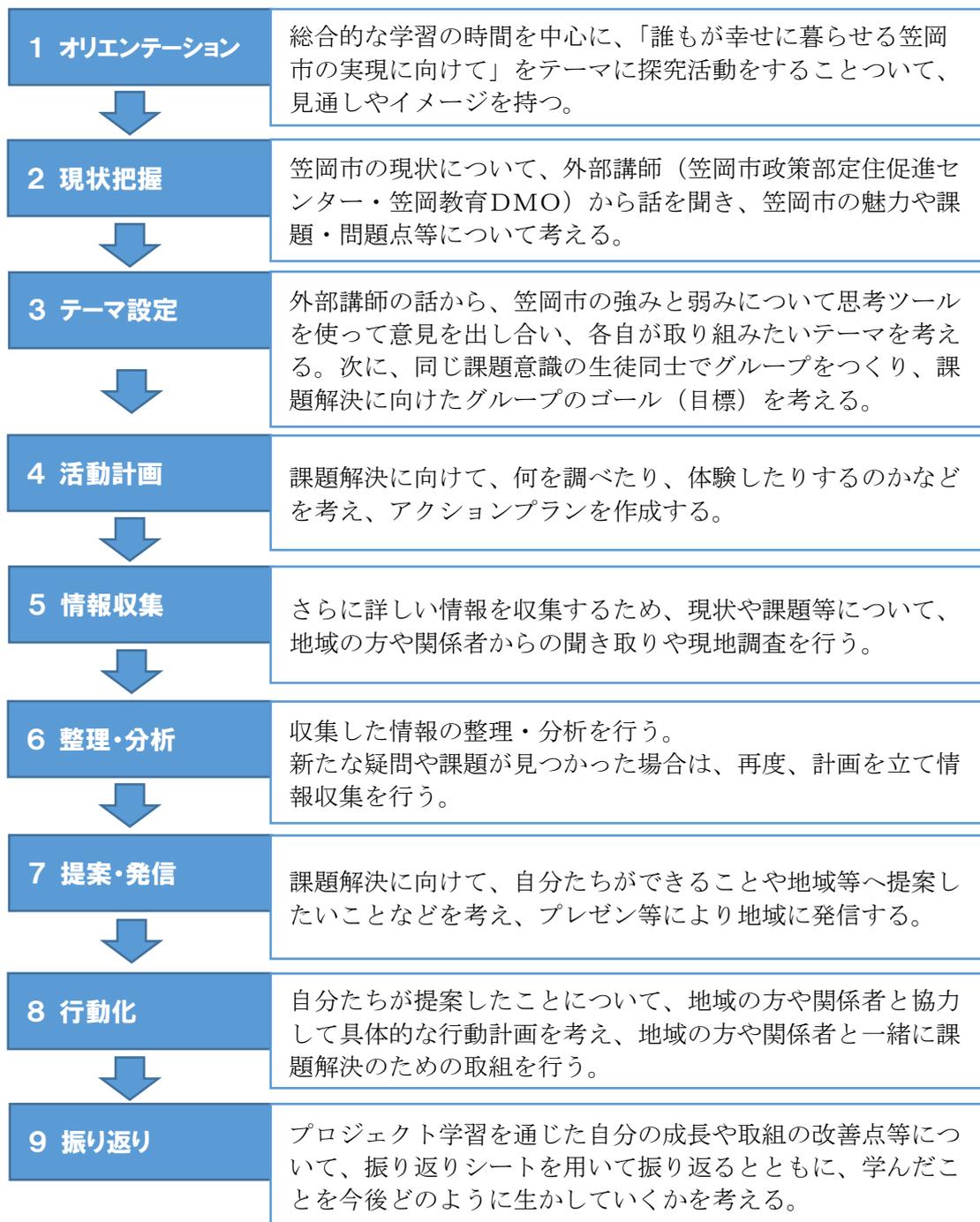
イ 目的

生徒が地域の人々と関わり合いながら、「誰もが幸せに暮らせる笠岡市の実現」に向けた取組を行い、地域の一員としての自分の生き方を考えるとともに、プロジェクト学習²を通じて、「自分を高める力」などの非認知能力³を高める。

² 生徒が設定した学習テーマに対し、調査や体験を通じて課題解決の方法を考えたり、実際に課題解決に向けた取組を行ったりする学習手法

³ 「自分と向き合う力」「自分を高める力」「他者とつながる力」「地域とつながる力」等、測定できない個人の特性による能力

ウ プロジェクト学習の流れ



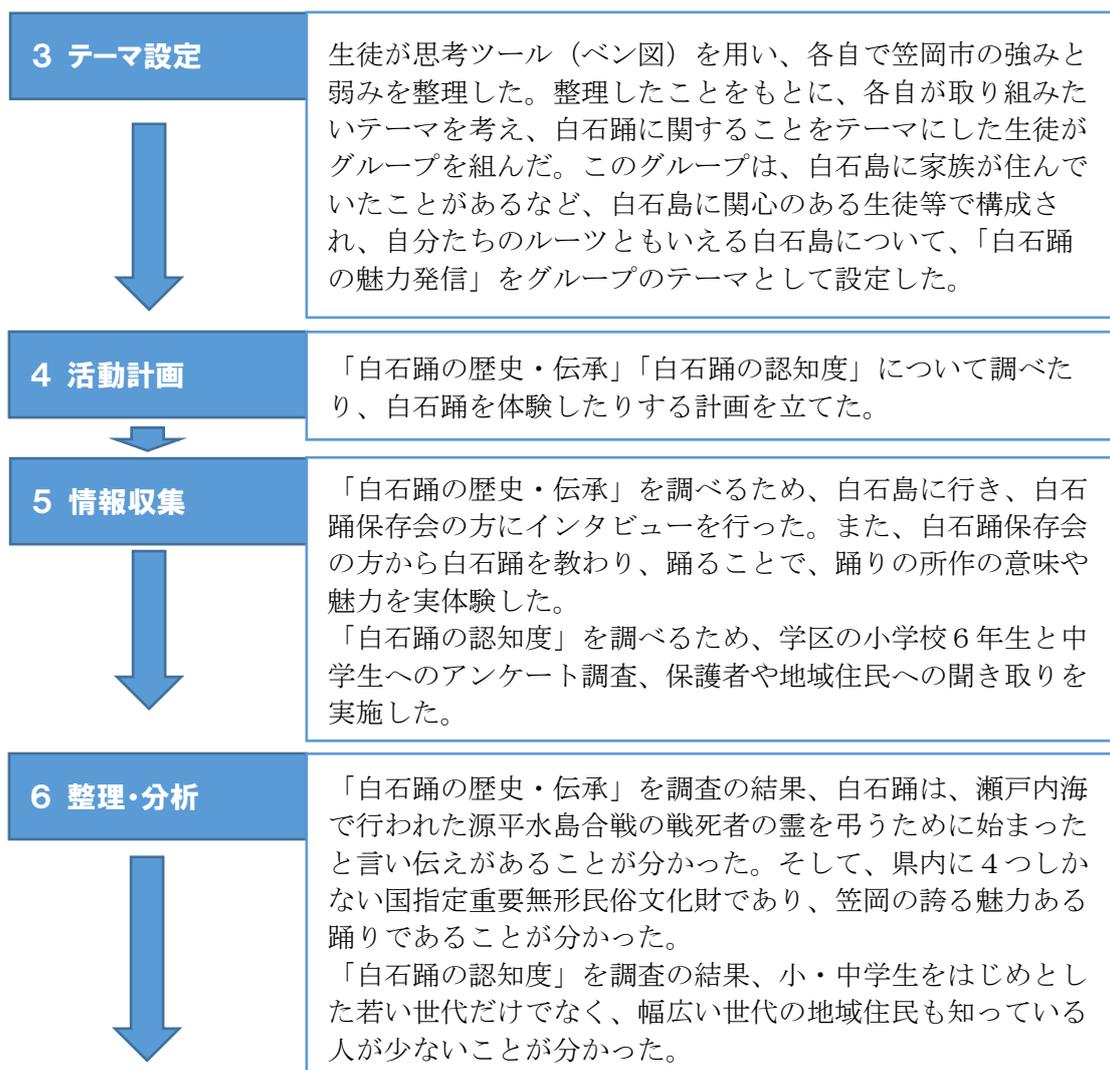
プロジェクト学習の17テーマ

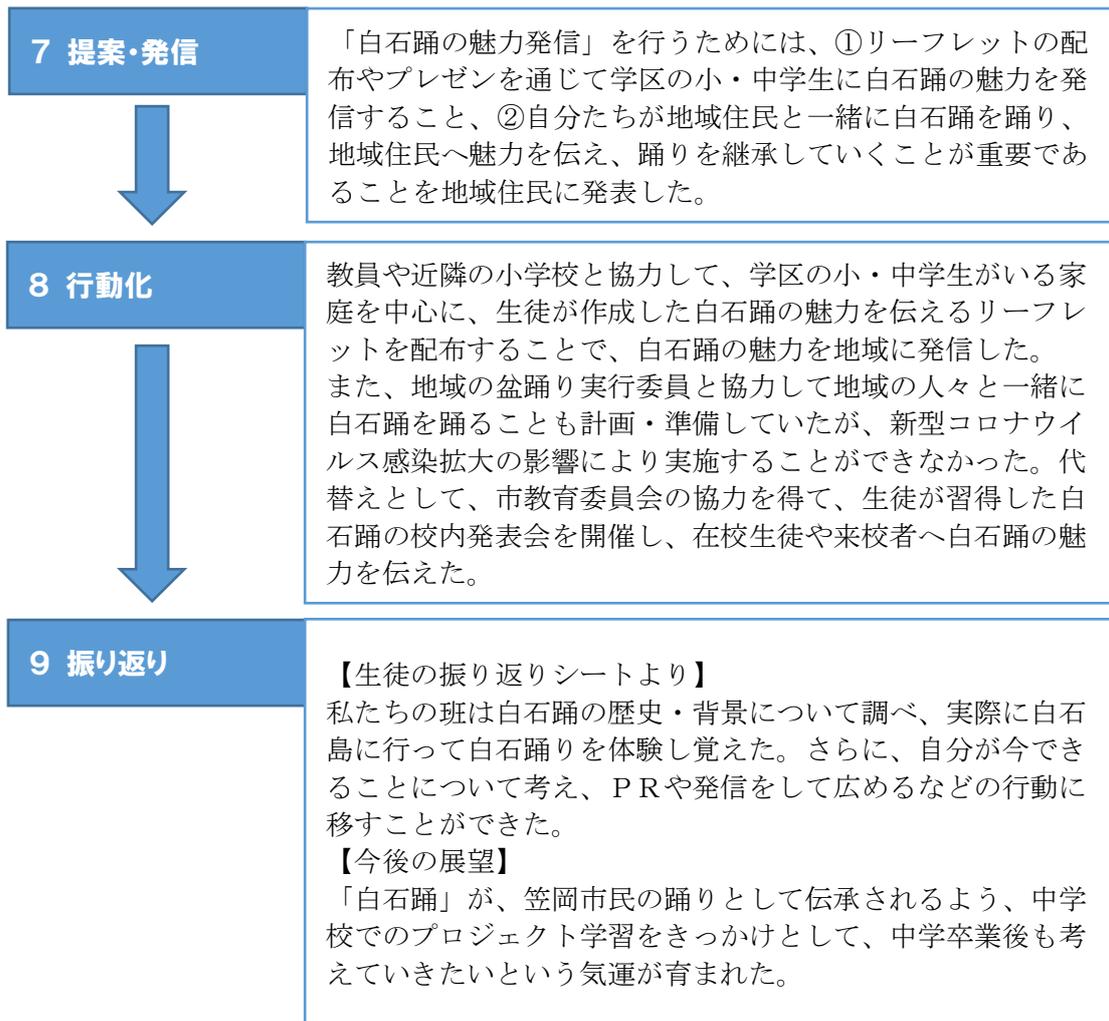
<ul style="list-style-type: none"> ・ 白石踊の魅力発信 ・ 真鍋島の魅力 ・ 北木島の魅力 ・ 飛島の魅力 ・ 大飛島の現状と課題 ・ 笠岡の歴史 ・ 笠岡の自然を守ろう ・ 生き物の生態 ・ 笠岡の食の魅力 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 笠岡の飲食店を盛り上げよう ・ 笠岡観光プロジェクト ・ 空き家を使って商業施設をつくる計画を立てる ・ 笠岡市の公共施設 ・ 笠岡市の公共事業 ・ 若い世代の人口を増やすために ・ 笠岡市の人口を増やす ・ 岡山県の詐欺について
---	--

更に学習の詳細を知るため、上記の学習テーマのうち、「白石踊の魅力発信」学習の詳細を取り上げる。

エ 「白石踊の魅力発信」学習の詳細

「白石踊の魅力発信」のプロジェクト学習の流れ3～9について、紹介する。



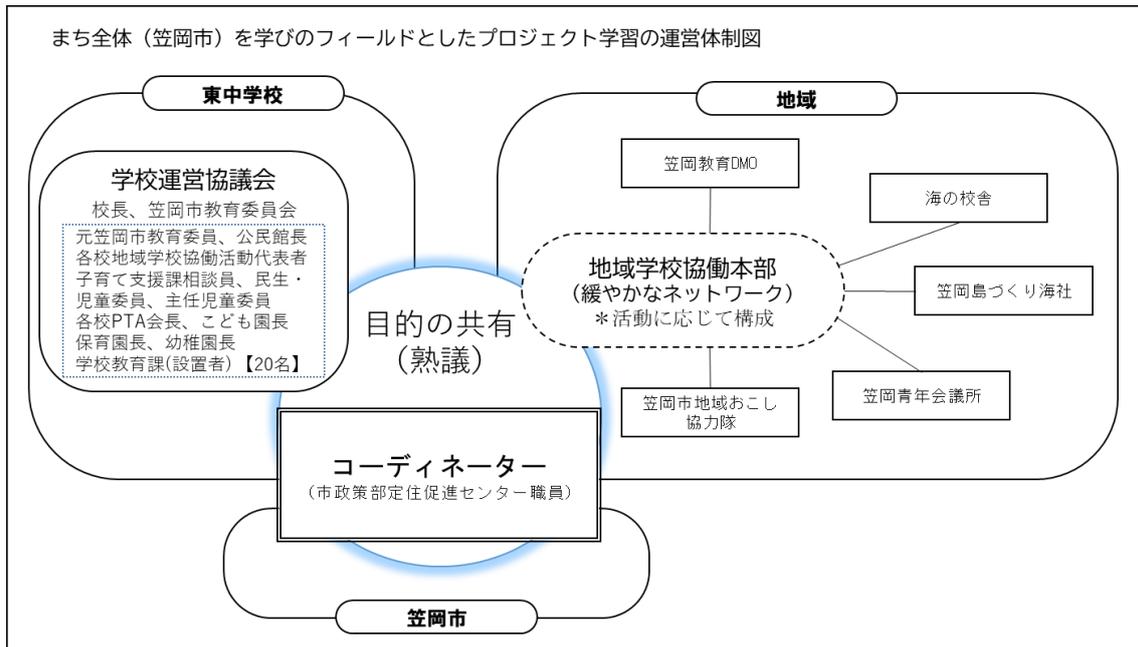


オ 運営体制

目的の共有

学校運営協議会を通じて、学校と地域で取組についての共通理解を図った。取組を進めていくに当たり、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと、学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いが一致し、笠岡市政策部 定住促進センターの職員がコーディネーターとなり、笠岡教育DMO、海の校舎、笠岡島づくり海社、笠岡青年会議所、笠岡市地域おこし協力隊など地域の関係者にプロジェクト学習の趣旨を説明し、協力を働きかけるなど、学校との連絡・調整を行った。

図 10 笠岡市立笠岡東中学校の運営体制図



非認知能力の育成—生徒・教職員・地域の関係者—

非認知能力を高めるため、学校と地域の関係者は、学習活動の目的や生徒の学習活動を価値付ける方法を共有し、同じ視点で生徒と関わった。

- 笠岡東中学校区の小・中学校の教職員が「**9年間で育てたい力**」を整理した。さらに、生徒の行動に価値付けを行うため、それぞれの育てたい力に対して、発達段階に応じた行動指標（別紙資料編参照）を作成し、生徒や地域の関係者に示した。

〈9年間で育てたい力〉

自分と向き合う力			自分を高める力		他者とつながる力		
自分をコントロールする力	粘り強さ	主体性	挑戦力	コミュニケーション力	思いやる力	協力・協働	

- 生徒は、学習活動を通じて自分が育てたい力を選択し、そのために何をがんばるか等の行動目標を設定し、学習活動の事前と事後で自己評価を行った。
- 教職員と地域の関係者は、生徒が設定した行動目標や振り返り等を共有し、生徒の言動を見取り、具体的な声掛け等、生徒の活動に価値付けを行った。

カ 結果（アンケート結果より）

- ① 17のテーマでプロジェクト学習を行う3年生に「自分を高める力」と「地域への愛着心」に関連した項目について、プロジェクト学習の実施前後にアンケート（図11）を実施した。

図11 笠岡市立笠岡東中学校の生徒アンケート

○生徒（3年生）アンケート総数・・・105			事前	事後
主体性、 挑戦力 (粘り 強さ) ↓ 自分を 高める力	1	一度取り組み始めたことは、あきらめずに続けることができる	61.6%	72.0%
	2	一度やりとげたことを、さらに続けてみたいと思うことができる	53.5%	70.9%
	3	ふだん努力していることを、別のことにも活かそうと思える	49.5%	62.4%
	4	具体的に目標を決め、その目標へコツコツと向かっていける	54.6%	62.4%
	5	いま取り組んでいるとことを、さらによりよくしようとする	58.6%	69.9%

※「とてもできている」「少しできている」「どちらともいえない」「あまりできていない」「全くできていない」の5件法での回答のうち、「とてもできている」「少しできている」と回答した生徒の割合

地域への 愛着心	6	自分の住んでいる地域のことが好き	3.58	4.01
	7	地域には良いところがたくさんある	3.37	4.03
	8	地域の行事に参加している	2.28	3.00
	9	地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある	3.04	3.76

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点

（記述より）

- ・自分たちの提案や活動によって、多くの人の考えを変えることができうれしかった。他の人に提案することに面白さを感じた。
- ・島で過疎化が進んでいることを知り、島や市が一丸となって、改善・工夫されていけば良いと思った。若い世代が何をすれば良いか考えるようになった。
- ・自分が求めるだけでなく、何が自分にできるのかを考えないといけないと思った。
- ・学習前は地域に興味が無かったけれど、学習後は自分の地域に少し興味を持ち、地区清掃に参加した。
- ・海にゴミがたまっていたので、ゴミ捨て場まで運んだ。

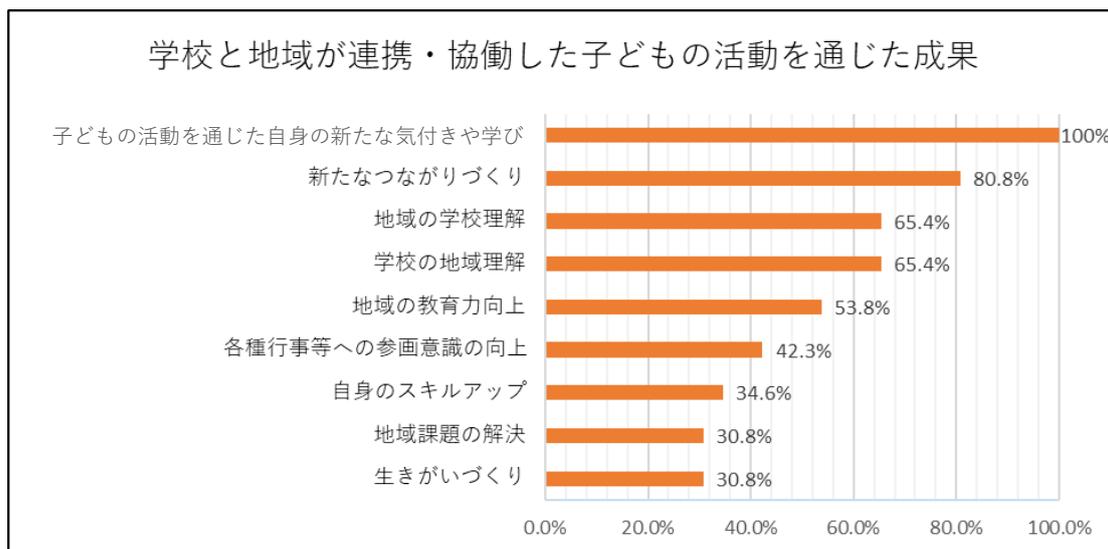
- ・ 地元の食材を買うようになった。
- ・ 自分たちの提案から、市の方にスケートパークのセクションを作ってもらった。

② この学習活動や企画に関わった地域の関係者や教職員に対し、アンケート調査（図 12、13）を行った。

図 12 笠岡市立笠岡東中学校の地域の関係者アンケート

○地域の関係者 アンケート総数・・・26			事前	事後
相互理解	1	子どもの成長や夢を育むには、学校と地域が連携した活動が必要だと思う	4.35	4.81
	2	学校の取組や活動を知っている	2.96	4.04
	3	学校が困っていることや課題を知っている	2.85	3.62

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



※「学校と地域が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

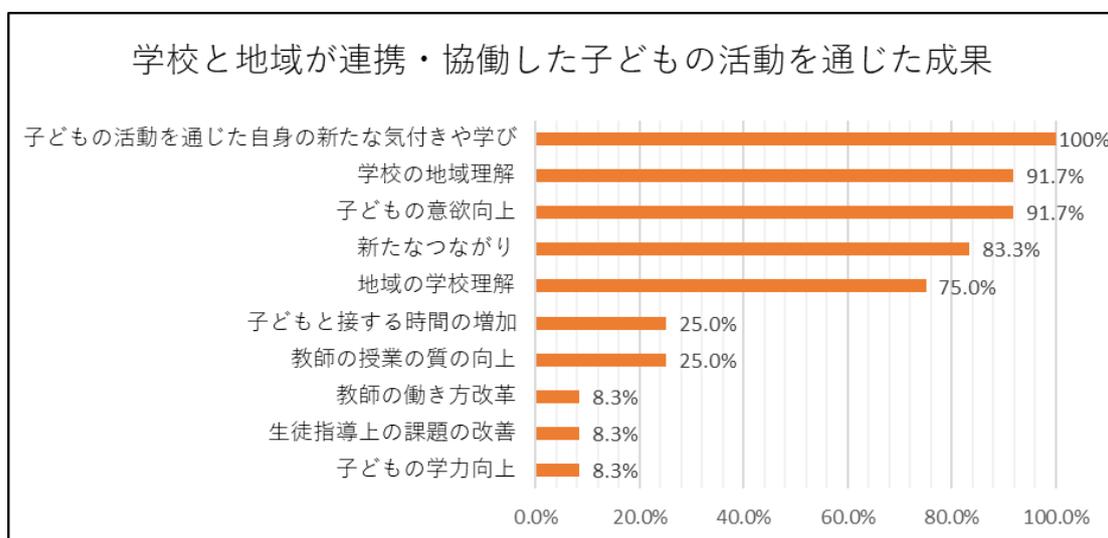
- ・ 学校と地域の人と人のつながりが生まれ、教育活動が活性化している。地域全体で地域を愛する子どもを育てていきたい。
- ・ 地域をより良くする活動に子どもたちにも加わってもらい、文化や環境を大切にすることと、それを継承する方向に持っていかれたらと思う。
- ・ 学校だけでなく、地域で子どもたちを育てていきたいと思った。
- ・ お互い（地域・学校・子ども）の良いところの共有が必要だと思う。

- ・ いろいろな場面で活躍されている方々の子どもたちに対する思いを聞け、自分自身の視野を広げることができた。

図 13 笠岡市立笠岡東中学校の教職員アンケート

○教職員 アンケート総数・・・12		事前	事後	
相互理解	1	子どもの成長や夢を育むには、学校と地域が連携した活動が必要だと思う	4.25	4.83
	2	地域は学校の取組や活動を知っている	3.08	3.83
	3	地域は学校が困っていることや課題を知っている	3.08	4.08

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



※「学校と地域が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

- ・ 活動をする中で、地域のことについていろいろわかってきた。子どもたちも同じように感じているのではないかと思う。
- ・ 教員が地域のことを知らない生徒に伝えられない。だからこそ、地域学を進めていく上で地元の方との連携はとても大切であると思った。
- ・ 生徒の教員以外への関わり方を通じて、社会に出たときに必要になるコミュニケーション力を学べたことが大きな収穫であった。
- ・ 生徒が地域の課題や魅力に目を向けることができ、有効な活動であったと思う。家族や教員以外の大人との関わりも貴重な体験になると思う。

キ 取組の検証

①仮説 1 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 熟議の中で、教職員と地域の関係者が、プロジェクト学習の目的や生徒の活動を価値付ける方法を共有したことで、教職員や地域関係者が生徒の成長に気付き、具体的な声掛け（フィードバック）を行ったことで、生徒は自分の成長を感じやすくなり、主体性の向上へとつながった。
- ・ 学校と地域が連携・協働したプロジェクト学習を通じて、在籍生徒全員に豊かな体験活動に触れる機会が確保され、体験格差の是正につながった。
- ・ プロジェクト学習を実施するに当たって、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと、学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いを一致させたため、コーディネーターを中心として、数多くの地域関係者を巻き込んだ取組を実施することができた。
- ・ 17 グループごとに行うプロジェクト学習は、多くの地域関係者へ取組の説明等や、協力を働きかけるなどの連絡・調整が多岐にわたり、コーディネーター役の負担は大きい。アンケートの結果では、笠岡東中学校においては教職員の負担感に意識の変化は認められないが、行政職員が業務としてコーディネートすることで、可能な限り少ない学校負担で豊かな体験活動を提供することができた。
- ・ プロジェクト学習を通して、中学卒業後も笠岡市の魅力等について考えていきたいという気運が生徒に育まれた。また、一部の生徒には、行動変容が認められた。

〈課 題〉

- ・ 教育課程内の総合的な学習の時間を中心とした学校の活動のため、時間的な制限があったり、活動内容にある程度の制限が生じたりする。子どもが興味や関心を持ち、より深く探究活動を行うためには、学校教育と社会教育が連携し、公民館や放課後・休日等に行われる取組へとつなげていくことが必要である。
- ・ 生徒が地域へ出向く際の引率は、休日や長期休業日に教職員が行っているが、持続可能な取組とするためには、地域の人や保護者を含めた運営・体制づくりが必要である。
- ・ 生徒の活動内容や場所によっては交通費が必要となるため、費用負担等の検討が必要である。

②仮説 2 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 地域全体を学びの場として学校の場を活用し、地域課題について、学校と地域が連携して取り組むことは、地域の教育力向上に有効な活動である。
- ・ 生徒の学習を通して、学習に関わった大人も地域のことを再発見できるきっかけとなった。
- ・ 学校と地域が連携・協働することにより、地域の関係者と教職員の相互理解が進み、新たなつながりづくりに役立った。

〈課 題〉

- ・ 学校と保護者や地域住民との関わりはあまり多くなかったため、保護者や地域住民を含めた熟議を行うことで、より多くの人に関わることができるようにする必要がある。

(2)浅口市立寄島小学校

ア 概要

寄島の魅力である「海」をテーマにSDGsの視点を取り入れ、学校と地域が連携・協働した「寄島に親しむ」「寄島を知る」「寄島を見つめる」「寄島に貢献・還元する」などの学習活動（地域に開かれた教育課程「よりしま学」）の中で、豊かな体験活動を行っている。保育活動（5歳児）、生活科・総合的な学習の時間（小・中学生）を核として実施している。

イ 目的

学校と地域が連携・協働した「よりしま学」を通じ、主体的に問題解決に関わる意欲やコミュニケーション力等の非認知能力やふるさとへの誇りを持つ子どもを育成する。

ウ 主な活動内容

よりしま学（主に総合的な学習の時間で実施）

学年	テーマ	内 容
1年生 25人	大好き わたしたちの よりしま	<ul style="list-style-type: none"> ・海岸散策や砂遊び、ビーチフラッグなど海に関係した遊びを地域ボランティアと行った。 ・海岸散策の際に拾った廃材を使った工作を図工の時間に行った。
2年生 26人	とび出せ！よりしま の町へ	<ul style="list-style-type: none"> ・寄島の町を知るために、町探検に出かけ、町の商店で働く方や漁港で働く方などにインタビューを行った。 ・店の方の協力を得て、スーパーの棚卸しや電気店での懐中電灯の解体作業などを体験した。
3年生 24人	とび出せ！よりしま の海へ	<ul style="list-style-type: none"> ・カキの養殖についてのやりがいや苦労、寄島のカキのおいしさの秘密などを漁業組合の方にインタビューし、まとめた。 ・漁業組合の協力を得て、カキの種付けや収穫を体験したり、カキの成長の様子を観察・記録を行ったりした。 ・水揚げされたたこや魚などを実際に触らせてもらうなどもした。

4年生 28人	守れ！寄島の海と人	<ul style="list-style-type: none"> ・海岸や海のゴミの現状について、漁業組合や地域の方へ聞き取りを行ったり、調べたりした。 ・調べる中で、マイクロプラスチックの存在を知り、NPO 法人グリーンパートナーや山陽学園などの協力も得て、マイクロプラスチックの有無を調べる実験を行った。 ・調べたことを「自分たちにできること」として地域に発信した。
5年生 29人	発信！寄島の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ・行政やNPO法人などの協力を得て、本州で寄島地区にしかないアッケシソウの保護活動を行ったり、シーカヤック体験をしたりした。 ・フィールドワークを行い、地域住民への聞き取りをしながら寄島の魅力についてまとめた。 ・寄島の魅力を幅広く伝えるために、マスコットキャラクターをつくりたいという声が子どもたちから上がり、学校運営協議会で提案した。
6年生 29人	未来へ 寄島歴史探検	<ul style="list-style-type: none"> ・寄島地区に関係した歴史について、フィールドワークをしたり、文化財保護委員や郷土資料館長、宮司等にインタビューなどを行ったりした。 ・調べた内容について、オンライン歴史百科事典「ヨリペディア」を作成し、ホームページに公開した。

エ 運営体制

- ① 令和元年 10 月に小・中学校で学校運営協議会を設置。令和 2 年度から寄島地区にある保育園・こども園・小学校・中学校の 4 校園の「寄島学園コミュニティ・スクール」として保こ小連携活動及び小中一貫教育を推進している。

図 14 寄島学園の運営体制図



(寄島小学校作成)

- ② 学校運営協議会の下部組織として、「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」の3部会を設け、よりしま地域学校協働本部と連携・協働した活動を行っている。
- ③ 学校運営協議会と連動した学校組織体制づくりを編成している。組織体制については、小学校内に全教職員による4つのプロジェクトチーム(学び・心と体・絆・ワークスタイル)を設置し、その内「学び」「心と体」「絆」の3チームが寄島学園コミュニティ・スクールの下部組織である3つの部会「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」と連動するように構築することで、学校経営と学校運営協議会との連動が進むような仕掛けづくりを行っている。

図 15 寄島学園コミュニティ・スクールと連動した組織体制



(寄島小学校作成)

オ 「寄島っ子の未来を考えるワークショップ」(熟議)の開催

学校と地域が思いや目標を共有し、地域みんなで子どもを育てていくために、保育園・こども園・小学校・中学校の教職員、PTAや地域住民、児童生徒の代表が参画し、熟議を行った。テーマについては次のとおり。

- 1回目「育てたい子どもの姿(なりたい大人の姿)」について
- 2回目「「よりしま学」の開発へ向けて」について
- 3回目「寄島っ子のできている非認知能力」について
「できるようになってほしい非認知能力」について

カ 非認知能力の育成

活動の実施に当たり、教職員の校内研修で、子どもが自身の良さに気づき、前向きに取り組むための行動指標(別紙資料編参照)を作成した。また、前出のワークショップの中でも非認知能力について扱い、地域住民も非認知能力について学んだ。ワークショップで共有した内容については、整理してCS通信で全保護者や地域住民に発信した。

キ よりしまみつけ隊の取組

教育課程内の取組である「よりしま学」をきっかけとして更に地域での学びを深めるために、令和3年7月に地域学校協働本部が中心となり、「よりしま！みつけ隊」を設立し、地域の大人のサポートにより放課後や休日に子どもたちの自発性を尊重した活動を行っている。小・中学生の希望者15人程度と地域住民(地域学校協働活動関係者)で構成されている。

設立当初は、「遊び」「体験」「物づくり」の3グループでスタートし、「サッカー」「シーカヤック」「自由工作」等を楽しんだ。

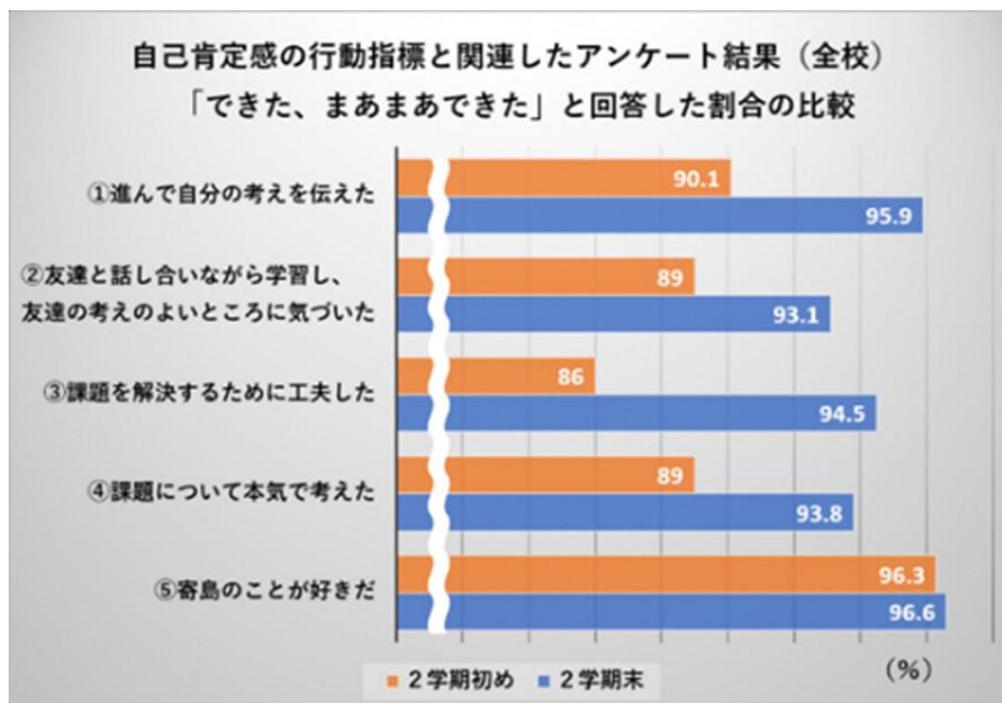
1回目の活動を受けて、井原市内の中学生と高校生の希望者で構成されたグループ「Team 夢源」(「ふるさと井原をベースに「自分たち」も「ふるさと」も魅力的な「ひと」や「まち」になるような活動」を行う)のメンバーを招いて、活動の様子や活動に対する思いを聞いたり、ワークショップを行ったりした。ワークショップが刺激となり、参加した子どもや大人には、次のような新たな活動が生まれてきている。

- ・ 寄島の魅力をカレンダーにして公共施設へ寄贈した。(商品化も検討)
- ・ 寄島の魅力を発信する動画「よりしま散歩」を作成中
- ・ 保育園・子ども園との交流活動を計画中
- ・ 地域イベントの開催を計画中
- ・ ものづくりを行い、地域のお年寄りへプレゼントし、一部を商品化して販売することを計画中

ク 結果 (浅口市立寄島小学校長への聞き取りより)

○活動が自己肯定感に及ぼす効果のアンケート調査及びその分析を行い、次のとおりの結果であった。

図 16 自己肯定感の行動指標と関連したアンケート結果（全校）



（寄島小学校作成）

- 地域に開かれた教育課程「よりしま学」を通して、地域の方とともに、地域の教育資源「ひと・もの・こと」を学ぶことや、授業の中で「寄島小の自己肯定感」の意識づけを行う取組等が、子どもの学習意欲や主体的な学びへつながる一助となった。
 - 5歳児から中学3年生までが同じテーマで系統的に学習を行うことで、学びの連続性を確保した。
 - 子どもの発達段階に応じて、身近な教育資源を活用した指導計画を作成し、地域の方とともに地域を探究する活動を行うことにより、子どもがホンモノ体験や直接体験を行うことができた。
 - 寄島町に暮らす小学生・中学生・高校生の希望者で「よりしま！みつけ隊」を結成し、「自分たちの力で実現すること」をモットーに、寄島を楽しみ、寄島の魅力を伝える活動（教育課程外）を自分たちで企画・交渉・準備・運営等を行うことにより、自己肯定感や地域への愛着心、コミュニケーション力等を育むことができた。
 - 「よりしま！みつけ隊」での寄島の魅力を発信する活動を通じて、小学4年生から高校生までの子どもたちに新たなつながりが生まれるとともに、それを地域の大人がサポートすることで、新たに地域の緩やかなネットワークが構築された。
- 教職員や学校運営協議会委員の目的意識及び当事者意識に差があるこ

とから、関係者の意識を向上させていく必要がある。

- 学校運営協議会や熟議が形式的な会議とならないように、課題解決へ向け、会議運営の工夫をすることで、学校と地域がともに連携・協働の効果を実感し、持続可能な取組としていく必要がある。
- 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等が高齢化し、世代交代が進んでいない状況もあり、保護者をはじめ、幅広い世代の地域の方が参画しやすい地域学校協働活動を考えていく必要がある。

ケ 取組の検証

① 仮説 1 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 「学校運営協議会」や「寄島っ子の未来を考えるワークショップ（熟議）」を通じて、地域住民と教職員、PTA、児童生徒の代表が、「育みたい子ども像（なりたい大人像）」や「育みたい非認知能力」等を共有し、目標を一致させたことで、地域ぐるみで、寄島の魅力を生かした活動を展開することができた。
- ・ 子どもにとって、地域の身近な教育資源をもとに、地域住民等とともに地域を探究したり、直接体験をしたりする活動は、子どもの意欲や主体性を育むために有効である。
- ・ 「よりしま学」を通じて子どもの意欲や主体性を育むために、行動指標を作成し、子どもにも示したことで、子どもが自身の良さや成長に気付き、意欲的に活動に取り組むことができた。
- ・ 子どもたちの自発性を尊重した活動を行う場合、子どもが具体的な活動内容や活動のゴールイメージを持つことが難しいため、先進的に活動している団体等と連携して事例を聞いたり、ワークショップを開催したりすることは有効である。
- ・ 学校運営協議会の組織と校内教職員の体制を連動させ、目標を共有したことで、学校と地域が効果的に連携・協働し、子どもに豊かな体験活動を提供することができた。

〈課 題〉

- ・ コロナ禍で、学校から地域への活動成果の発信がオンラインとなったため、次の活動へ結び付いていない状況である。感染状況を踏まえながらも、次の活動へ結び付け、取組を進めていく工夫をする必要がある。
- ・ 多様な人材が参加する熟議等を行い、協働活動が展開されているが、マンネリ化を防ぎつつ持続可能な取組としていくためには、学校づく

りと地域づくりの両方の視点を入れた熟議を行うなど、工夫していく必要がある。

② 仮説2に対する検証

〈成 果〉

- ・ 子どもを核とした活動に関わることで、新たな大人同士のつながりや子どもとのよりよい関係を作ることができ、生きがいややりがいへとつながる。
- ・ 地域学校協働本部の活動や「よりしま！みつけ隊」において、地域の多くの大人が関わり子どもの活動をサポートした。そのことを通じて、地域に新しい緩やかなネットワークが構築された。

〈課 題〉

- ・ 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等、学校と地域が連携・協働した活動に関わる方の多くが高齢者で、保護者世代の地域の活動を通じたつながりづくりや大人の学びへと発展しにくい状況にあるため、地域学校協働活動にPTA等を含めた幅広い世代の参画の工夫が求められる。

(3)真庭市立八束小学校

ア 概要

全校児童を対象に、「八束の宝を学ぶ」をテーマとして、八束小学校区（蒜山）の文化や歴史、酪農業などについて、各分野で活躍する地域の専門家を招き、「聞く」「見る」「触れる」等の本物を体験する学習を行った。

イ 目的

- ・ 児童が、学区の素晴らしさを改めて実感し、地域への愛着を深める機会とする。
- ・ 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、児童・地域住民・保護者・教職員がともに学ぶ機会とする。

ウ 主な活動内容

① 八束の宝を学ぶ（総合的な学習の時間で実施）

外部講師を招いた学習は、参観日に合わせて実施し、保護者も一緒に学ぶ機会を設けることで、大人も子どもも地域への関心を深めた。

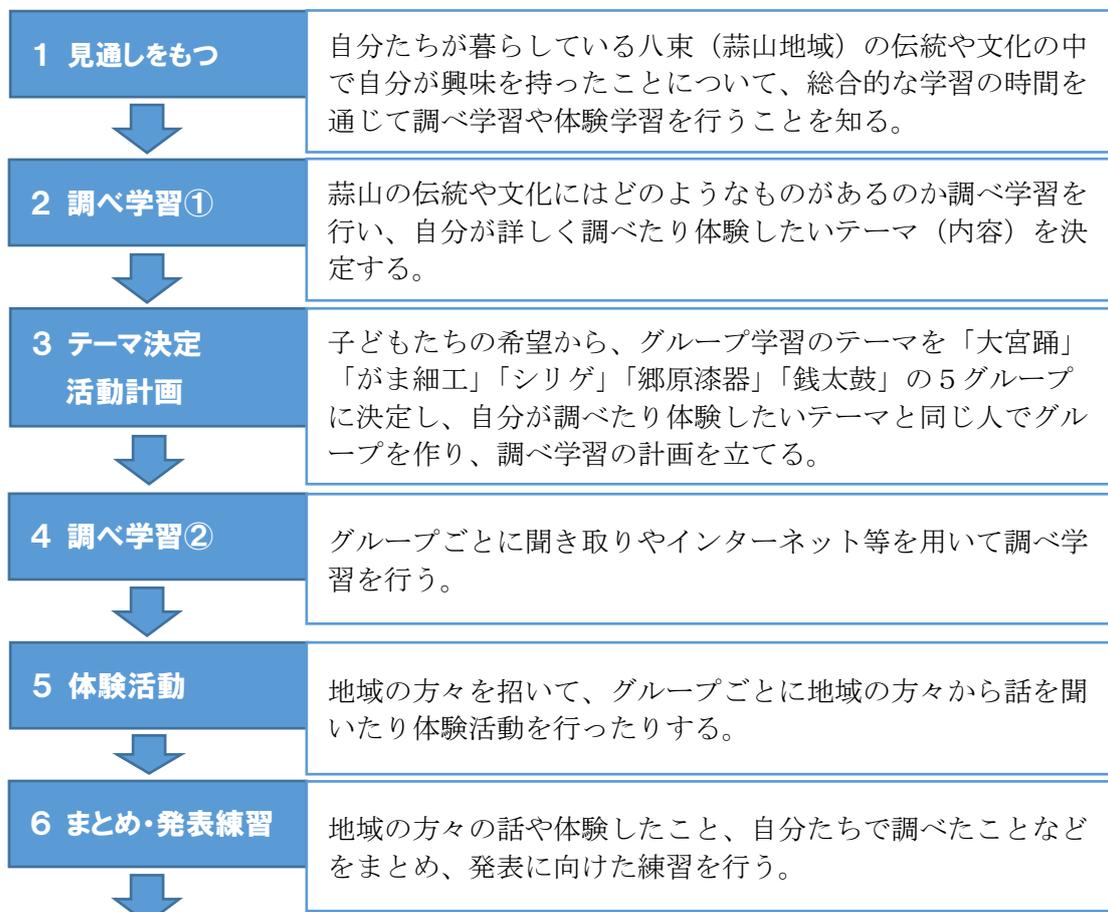
各学年の学習テーマ

学年	テーマ	活動に関わった地域の専門家
1年生	ジャージー牛について	蒜山イキイキ楽酪協議会 真庭家畜保健衛生所
2年生	蒜山の生き物・自然について	津黒いきものふれあいの里
3年生	蒜山の農業について	J A晴れの国岡山
4年生	ジビエについて	蒜山振興局 農業振興課
5年生	八束の食文化について	龍泉
6年生	八束の歴史について	蒜山郷土博物館

②「蒜山の伝統文化」を学ぶ（4年生）の取組

総合的な学習の時間に地域の方を招いて、蒜山の伝統文化「大宮踊」、
「がま細工」、「シリゲ」、「郷原漆器」、「銭太鼓」の5グループに分かれ
て、調べ学習や体験学習を行い、学んだことをグループごとにまとめた。

エ 学習の流れ（全23時間）



7 発表

自分たちの成果を3年生に発表することで、地域の良さを発信するとともに、次の学年での学習についての見通しを持たせる。

③「シリゲ教室」(5・6年生)

蒜山地区に伝わる国指定重要無形民俗文化財である「大宮踊」の伝承活動のひとつとして、「大宮踊」の際に灯籠の下に飾られる切り絵である「シリゲ」を、地域住民に教わりながら制作した。完成した作品は地域のコンクールに出品した。

④「トウモロコシ博士に学ぶ」(3年生)

「蒜山の農業」学習のひとつとして、蒜山の特産物であるトウモロコシの育つ仕組みや栽培の苦労などについて農家の方から学んだ。トウモロコシの皮むき体験、穂についている虫を観察するなど実物に触れたり、匂いを嗅いだりした。

⑤「親子防災ワークショップ」(全校児童：親子でともに学ぶ取組)

年間3回の土曜日授業を活用し、PTA研修育成部が中心となって、消防士や消防団員、防災士、市役所職員などの地域の外部講師を招き、親子で防災について学ぶワークショップを開催した。全校児童を通学班ごとの12グループに分け、「防災について学ぶ時間」と「防災グッズの作成や防災体験の時間」の2部構成で実施した。内容は次のとおりである。

第1部「防災について学ぶ時間」(講話とクイズ)

- ・ 火事と地震のお話
- ・ 消防団の活動について
- ・ 防災クイズ

第2部「防災グッズの作成や防災体験の時間」

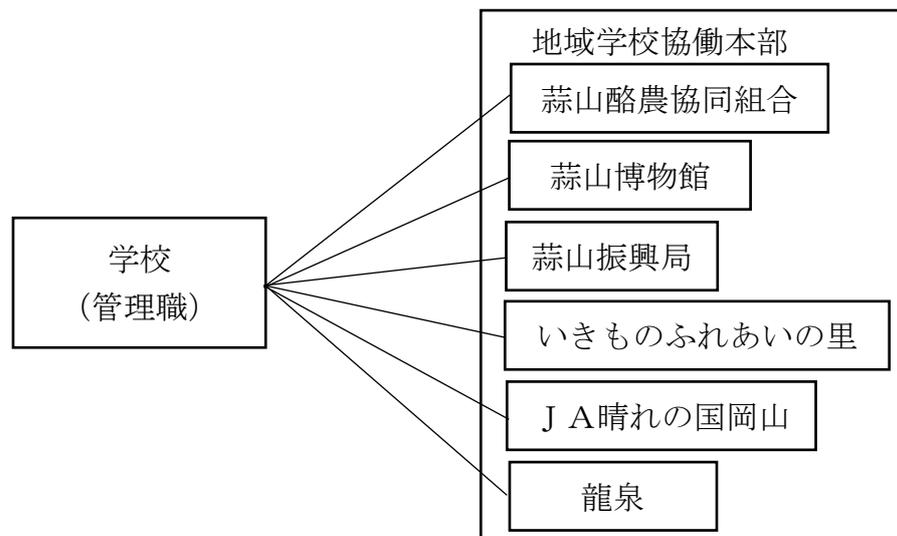
(3つのブースを回る形式で実施)

- ・ 煙中体験 (図工室に機材を持ち込み煙の中を歩く体験)
- ・ 防災ボトル作り (エマージェンシーボトルの中に自分が必要だと思う防災グッズを選んで詰める体験)
- ・ 我が家のルールづくり (保護者と一緒に災害時のルールについて考える。)

オ 運営体制

- ① 地域学校協働本部を活用し、学校と地域が連携した活動を実施している。
- ② 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、

学校と専門家等が直接行った。



カ 結果（真庭市立八束小学校長への聞き取りより）

- 本物体験による具体物との出会い（実物を見たり触れたりする）により、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることができた。
 - 防災ワークショップでは、PTAと連携し、保護者とともに活動を展開できたことで、それぞれの実際の生活について親子で振り返りながら主体的に考えることにつながり、防災意識が高まった。
 - 「八束の宝を学ぶ」に関わることで、自分たち大人も知らなかったことを学べたり、新たな発見があったりした。
 - 活動を通じて子どもと関わることで、子どもたちから活力をもらい、元気になれた。
 - 大人が子どもと一緒に体験活動をしたり、学習を支援したりすることを通じて、自分たちの脳の活性化につながった。
 - 活動を通じて地域の子どもたちに八束の魅力を伝えることができた。また、他業種で働く方ともいろいろと情報交換等ができ、大人同士の新たなつながりが広がった。
 - 子どもと共に学ぶことで、共通の話題ができ、家庭での話題が増えた。
- 様々な児童がいる中で、どのように児童に接したらよいか難しさを感じる地域の方もいる。
 - 教職員と地域の方との活動内容等の打合せ時間の確保が難しい。
 - コロナ禍で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。幅広い地域住民の参画を得て、地域に開かれた活動にしていくためには、来年度導入予定の学校運営協議会を有効に活用し、熟議等を通じて学校と地域の目的等を共有してい

く仕組みを整えていく必要がある。

キ 取組の検証

① 仮説 1 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 地域の特色について、実際に働いている人などから話を聞いたり、実物に触れたりすることは、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることにつながる。
- ・ 防災ワークショップでの保護者と一緒に行う体験活動やワークショップは、その時の学びや気付きに加え、家庭での振り返り等にもつながり、親子で実生活での防災について積極的に考えられた。

〈課 題〉

- ・ コロナ禍の状況で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。子どもたちの興味・関心をきっかけとして、学校と地域と連携・協働したプロジェクト学習を展開することで、さらに学びが深まり、子どもたちの意欲や主体性を高めることにつながることを期待できる。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、学校が窓口となり専門家等と直接行っている。より活動を充実させていくためには、事前に学校と地域が目的の共有を行った後、地域側の人材である地域学校協働活動推進員等が中心となって人やものをつなぎコーディネートしていくことが望まれる。

② 仮説 2 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 地域の特色を学ぶ活動を通じて、大人も知らなかった発見や新たな気付きがあった。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」や「防災ワークショップ」では、参観日等、保護者も集まる機会を利用し、子どもとともに保護者も学ぶことで、その場での新たな気付きと家庭で子どもと振り返ることでの親子での成長などが期待できる。
- ・ 学校と地域が連携した活動を通じて子どもに関わることで、子どもから活力をもらい元気になるなど、生きがいくりにつながった。
- ・ 子どもを核とした学校と地域が連携した活動を通じて、大人同士や大人と子どもの新たなつながりづくりのきっかけとなった。

〈課 題〉

- 対象の大人が保護者や地域の専門家に限定されており、幅広い地域の住民の学びにつながるよう、運営体制を更に検討する必要がある。

2 教育課程外

(1)玉野市地域子ども楽級

ア 概要

多くの地域住民の参画による、放課後や休日において、子どもが自主的にアクセスしやすい公民館や学校等の施設を活用し、各種体験教室や交流活動、学習支援を行う「放課後子ども教室事業」。玉野市内の全 14 小学校区で行われている。

地域学校協働活動推進員等が中心となり、休日や放課後に体験活動や交流活動等を行う「子ども楽級」と、学習アドバイザーが中心となり、放課後に学習支援を行う「おさらい会」があり、どちらも各代表を中心に地域住民が運営する。

地域資源を活用しながら、学校や家庭では体験できない、地域に根ざした取組や活動を行っている。

イ 目的

地域ぐるみで豊かな体験活動や交流活動等を行うことにより、「心豊かでたくましい子ども」、「地域に誇りをもつ子ども」を育むとともに、放課後や休日の子どもの居場所づくりに努める。

ウ 主な活動内容

伝統文化	調理	スポーツ	図画工作
交流	科学	放課後学習支援（おさらい会）	

① 活動例

ホットドック作り (調理)	「ひび子ども楽級」 コッペパンにソーセージやチーズ、キャベツを挟み、アルミホイルに包み牛乳パックに入れて焼く方法で、ホットドック作りを行った。
ダンスをしよう♪ (スポーツ、交流)	「ちっこう子ども楽級」 玉野高校ダンス部員を講師としてダンス教室を実施。参加した小学生は汗だくになりながら、笑顔でダンスを楽しんだ。

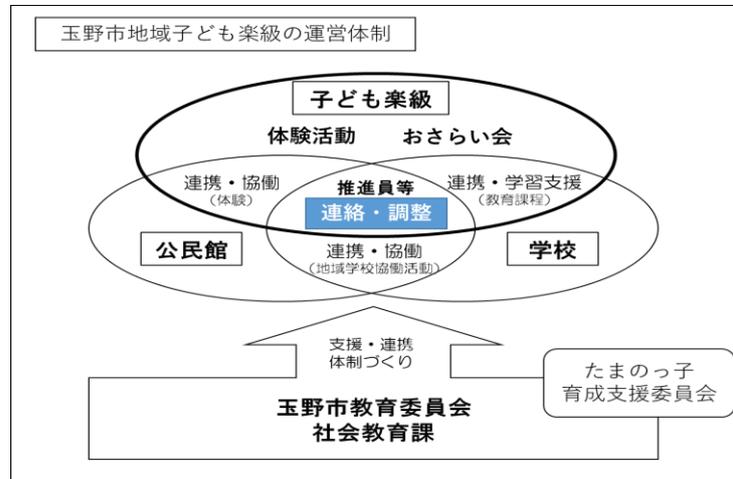
茶道教室 (伝統文化)	「たい子ども楽級」 池田宗政公の茶道流派である「備前御家流」を継承したいという思いから、正式な茶道道具を使い、年間を通じた学習をしている。学習のまとめとして、地域の方を招き、お茶席でお手前を披露した。
----------------	---

② 学校と連携した活動

たい子ども楽級	「学校では夜間に子どもを集めて星を観察することが難しい」という学校からの相談を受けた地域学校協働活動推進員がコーディネートし、4年生理科の学習内容に関連した「星空観察会」を実施した。
ひび子ども楽級	子ども楽級の代表者が学校運営協議会の委員でもあるため、学校の教育活動について会議を通じて共有し、総合的な学習の時間に行った福祉学習の内容と関連させた「障害者スポーツ体験会」(車椅子バスケット)を実施した。
ちっこう子ども楽級 ほか	運動会の開催時期に合わせて、「走り方教室」を実施した。

エ 運営体制

- ① 「地域の子どもは地域で育てる」をテーマに各地域の「子ども楽級」及び「おさらい会」の代表を中心とした地域住民によって運営されている。
- ② 各子ども楽級には事務局として公民館が参画し、地域学校協働活動推進員等のコーディネートのもと、子ども楽級と公民館が協働した活動が行われている。
- ③ 学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流などが行われている。



オ 活動状況（令和2年度実績より）

教室名	1年間の 開設日数	1回あたりの子どもの参加人数		小学校の 児童数
		平日	休日等	
たい子ども楽級	72日	34人	26人	345人
ちっこう子ども楽級	16日	18人	11人	99人
うの子ども楽級	15日	17人	26人	189人
たま子ども楽級	7日	2人	10人	83人
たまはら子ども楽級	76日	9人	7人	148人
わだ子ども楽級	95日	10人	10人	105人
ひび子ども楽級	55日	11人	12人	108人
しょうない子ども楽級	55日	38人	19人	729人
はちはま子ども楽級	80日	21人	23人	167人
おおさき子ども楽級	19日	5人	22人	96人
やまだ子ども楽級	56日	8人	4人	69人
ごかん子ども楽級	49日	1人	6人	29人
むねあげ子ども楽級	63日	8人	7人	79人
ほこたて子ども楽級	60日	10人	12人	67人

カ 結果（玉野市教育委員会社会教育課担当者への聞き取りより）

- 遊びや物づくり体験、スポーツ、伝統文化、芸術等の活動を通じて、ホンモノを見たり、ホンモノに触れたりし、実感を伴った学びを行うことで、子どもたちの意欲・関心の向上につながっている。地域のものや人、自然との関わりを通じて、地域への愛着形成につながった。
- 時間的な面で教育課程内だけでは実施が難しい発展的学習へとつながることができ、子どもの知的好奇心を満たすことができた。
- 学校教育と社会教育が連携することによって、子どもたちの学びがより実感を伴った深いものになった。
- 活動に関わった大人のアンケート調査からは、「子どもたちに関わることができて楽しい」、「家の周りには子どもがいなくなったので、活動に参加すると賑やかでうれしい」、「計画を立てるのは大変だが、子どもたちの喜ぶ姿を見るとやりがいを感じる」など、やりがいや生きがいづくりにつながっている感想が多く見られた。
- 「活動を続けるうちに、地域の活性化のためにも重要な活動であると感じるようになった」等、子どもたちを核として、「まちづくり」や「ひとづくり」につながっていることを意識している感想も見られた。

- 「たい子ども楽級」で行われた地域づくりに関する講座が、公民館の自主講座として開講されるなど、大人を対象とした講座に発展した事例もあった。
- 「たまはら子ども楽級」のモニュメントづくりでは、子どもと保護者が協力して木材を切り出すことから体験が始まるが、そこでの保護者同士の交流から、新たなつながりが生まれた。
- 地域人材の後継者不足が大きな課題である。特に、コーディネーター等の中心的な活動を行う地域学校協働活動推進員等の立場は後継者にスムーズに引き継ぐことが難しい。現在は、活動を広く地域住民に知ってもらうため、玉野市の広報誌において随時、募集を行ったり、地域ごとに独自のチラシ等を作成したりし、広報活動に努めている。また、玉野市PTA連合会と連携し、保護者世代の地域学校協働活動への参画を呼びかけている。
- 子ども楽級の活動について、地域学校協働活動推進員等を通じた学校との連携は一部の子ども楽級に留まっている。学校の働き方改革が叫ばれる中、学校との関わりを躊躇する地域学校協働活動推進員等もいるが、子どもの実感を伴った豊かな学びを実現するためには、学校と子ども楽級が連携した取組を広め、推進していく必要がある。
- さらに多くの地域住民を巻き込み、豊かな体験活動を充実させていくには、必要な予算を確保する必要がある。

キ 事例の検証

① 仮説 1 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 放課後子ども教室等の地域で放課後や休日に行われている体験活動は、地域の文化や人材を生かした様々な取組が行われている。
- ・ 放課後子ども教室の実施場所は地域の公民館や学校の施設を活用していることが多いことから、多くの子どもが参加しやすい状況にある。
- ・ 学校の教育課程内で実施する活動と、地域等で放課後や休日に行う活動内容をつなげて発展させることで、子どもにとって、より豊かな体験を提供することができる。
- ・ 学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流など、様々な関係者等と連携することで、多様な活動を展開することができた。

〈課 題〉

- ・ 放課後子ども教室の取組と学校の教育活動との連携は一部に留まっていることから、地域学校協働活動推進員等や放課後子ども教室関係者が熟議等に参加し、活動の一部を学校の取組と連動させていくことが子どもの体験をより豊かにすることに有効である。
- ・ 地域の実情等により、放課後子ども教室等による活動日数や参加する子どもの人数に相違があることから、放課後子ども教室等の取組を広く周知するとともに、多くの子どもが参加しやすい環境を整えていく必要がある。

② 仮説 2 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 子どもを育む活動を通じて、大人自身のやりがいや生きがいにつながった。
- ・ 子ども楽級での講座が大人や地域を巻き込んだ活動へと広がり、新たな学びが生まれた。
- ・ 子どもを育む活動をきっかけとして、大人と大人、大人と子ども等の新たなつながりが生まれた。また、そこからグループができ新たな活動が生まれることも期待できる。
- ・ 活動を通じた新たな人間関係の構築や地域での活動への発展等は、地域の活性化にもつながる。

〈課 題〉

- ・ 地域学校協働活動推進員等、活動や人材をコーディネートする人材の後継者が不足していることから、まずは、放課後子ども教室等での活動を広く地域住民に知ってもらい、多くの方が気軽に活動に参加したり、関わったりできる環境づくりが必要である。

第5 子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について

1 3つの視点から見た方策

(1) 視点①

学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。

- 子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、豊かな体験活動⁴が必要であり、こうした経験を通じて、子どもは自らの夢を育むことができる。
夢育の推進においては、就学前の子どもたちの保護者を含めた、幅広い世代への豊かな体験活動の働き掛けを求める。
なお、体験格差が生じている実態を踏まえ、その是正を図る必要がある。
- 体験格差の是正や学活⁵の視点から、子どもや地域にとって最も身近な存在である学校の間を活用し、教育課程内で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の間を活用し、豊かな体験活動を提供することが望ましい。
- 学校と地域が連携・協働して行う取組を豊かな体験活動とするためには、学校と地域の関係者間で、子どもたちの実情や課題を整理し、活動目的や活動で育む子ども像、育みたい力等を共有した上で、大人は子どもたちの活動に制限をかけすぎることなく、「伴走者」として適切な支援をすることが求められる。

⁴大人から与えられたものではなく、子どもたちの「やりたい!」「やってみよう!」という内的動機付けにより行われ、かつ、本物に触れたり、「見る」「触る」「味わう」といった直接的な体験、自分たちで計画して実行する活動 (第2より)

⁵最も関わりやすい学校という場を拠点に、保護者が保護者同士・地域の大人・子どもとの関わりを通して学ぶ取組。令和2年6月岡山県生涯学習審議会及び社会教育委員の会議「保護者の学び方改革～みんなで育つ、学活のススメ～(提言)」

その際、大人が育みたい力を見取るためのポイントを共有し、同じ視点で見取り、声掛けを行うことにより、体験の過程に価値づけし、子どもに活動の価値として意識(内面化)しやすいように関わるのが大切である。

見取るためのポイントを明確にするためには、活動における行動指標を学校と地域で作成し、共有することが望ましい。

- 教育課程内で豊かな体験活動を行う取組としては、総合的な学習の時間等で学校と地域が連携・協働し、地域の課題を解決する学習や地域の魅力を発見する学習等が効果的である。

また、放課後や休日に、地域社会全体で豊かな体験活動の場を作っていくことが重要である。

(2)視点②

視点①の取組を行う際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会(コミュニティ・スクール)や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。

- 地域住民、企業、NPO等多様な主体の参画のもと、子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育む潤滑な活動を行う、学校と地域の連携・協働の取組を進めるには、学校のニーズや地域の思いを汲み上げ、学校と地域のつなぎ役となるコーディネーターの存在が不可欠であり、どの学校にも一人は担当するコーディネーターがいることが望ましい。そしてその取組を持続的なものにしていくためには、コーディネーターは法律に位置付けられている地域学校協働活動推進員であることが望ましい。
- 豊かな体験活動を行うためには、幅広い地域住民の参画が必要である。幅広い地域住民の参画を得るには、学校運営協議会(コミュニティ・スクール)や地域学校協働活動を有効に活用し、学校と地域の目的の共有、連携・協働した取組の実施、取組の評価と改善というサイクルを作り、次の取組につなげていくことが必要である。
- 放課後や休日に、地域社会全体で豊かな体験活動の場を作っていくためには、地域住民、企業、NPO等多様な主体を巻き込んだ緩やかなネットワークづくりを進めていくことが求められる。

- 家庭等の状況にかかわらず、全ての子どもに豊かな体験活動を提供していくためには、市町村に対して、必要な予算を確保できるよう働き掛けを行うことも重要である。

(3)視点③

子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。

- 地域と学校が連携・協働することが、地域住民と教職員の信頼関係の構築や地域住民同士の新たなつながりづくりに役立つことが期待できる。
- 地域住民が子どもたちへ豊かな学びを提供することを通して、地域住民による地域づくりへと活動が広がっていくことが期待できる。
- 関係者と活動の目的を共有し、見取りの視点を持って子どもたちの活動に関わったことによる非認知能力の向上につながる子どもの姿を見取る力や大人自身の非認知能力（自制心、意欲、共感性等）そのものの向上により、よりよい人間関係の構築が期待できる。

2 まとめ

- 地域と学校が連携・協働し、子どもや地域にとって最も身近な存在である学校の間を活用し、教育課程内で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の間を活用し、豊かな体験活動を提供することによって、子どもたちの意欲や主体性等を育むことができる。
- 教育課程内で豊かな体験活動を行う取組としては、総合的な学習の時間等で学校と地域が連携・協働し、地域の課題を解決する学習や地域の魅力を発見する学習等が効果的である。
- その際には、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動の仕組みを利用して、地域学校協働活動推進員等がコーディネーターと

なり、学校と地域の関係者をつなぎ、子どもの実情や課題の整理、活動目的や活動で育みたい力、その力を見取るためのポイント等を共有することが重要である。

- そのようにして、子ども達の育ちに地域の大人が主体的に関わることで、子どもだけでなく、大人にも、非認知能力の向上につながる子どもの姿を見取る力や大人自身の非認知能力（自制心、意欲、共感性等）そのものの向上なども期待される。また、大人同士の新たなつながりが生まれ、地域づくりへと活動が広がっていくことが期待される。

3 具体的な方策の提案

(1) 地域と学校をつなぐ人材の育成

- 学校と地域の連携による豊かな体験活動を実施するためには、地域学校協働活動推進員等のコーディネーターとなる人材の育成が重要である。

ア 地域学校協働活動推進員等の養成

- ・ 地域と学校の効果的な連携・協働を推進するためには、各学校に、地域学校協働活動推進員等が1名以上在籍することが望ましいため、保護者や地域住民等幅広い立場の人々を対象に、地域学校協働活動推進員等の養成研修会を行い、新たな人材を確保していくことが必要である。

イ 地域学校協働活動推進員等に求められる役割

- ・ 地域と学校をつなぎ役として実績を持つ5名へのヒアリング（別紙資料編参照）の結果を踏まえ、円滑に地域と学校をつなぐために、地域学校協働活動推進員等には、次の4点が必要である。

- ① 日頃から、学校や地域との関係づくりを行っていること。
- ② 活動で育みたい子ども像等活動の目的について、学校や地域の関係者等と共有していること。
- ③ 活動の目的を達成するための取組を企画立案し、実行すること。
- ④ 活動に関わる人とつながることができるよう円滑な調整を行っていること。

- ・ 地域学校協働活動推進員等に求められる役割は、社会教育主事に求められること（次の①～⑤）と重なる部分が多く、地域学校協働活動推進員等の

スキルアップのためには、社会教育主事講習の受講を促していくことも有効である。

- ① 学習課題の把握と企画立案能力
- ② コミュニケーション能力
- ③ 組織化援助の能力
- ④ 調整者としての能力
- ⑤ 幅広い視野と探究心

- ・さらに学校と地域の連携による豊かな体験活動を実施するためには、活動における子どもの言動を大人が適切に評価し、具体的にフィードバックすることが重要であり、そのためには、地域学校協働活動推進員等を対象に、非認知能力に関する理解を促進し、子どもの言動に価値付ける方法を学ぶ機会を設ける必要がある。

ウ 市町村における社会教育主事の配置について

- ・多様な専門性を有する地域の人材や設備を結びつけながら、学校と地域の連携・協働を効果的に進めるためには、各市町村において、学校や地域学校協働活動推進員等へ必要な助言や支援を行う専門的職員である社会教育主事の全市町村での配置が望ましい。社会教育法第九条の二においても都道府県及び市町村の教育委員会事務局に、社会教育主事を置くこととされているが、人事異動等により社会教育主事が不在の市町村も存在している現状があるため、社会教育主事の必要性を働きかけるとともに、社会教育主事のスキルアップにも努めていくことが必要である。

(2)管理職等の豊かな体験活動への理解の促進

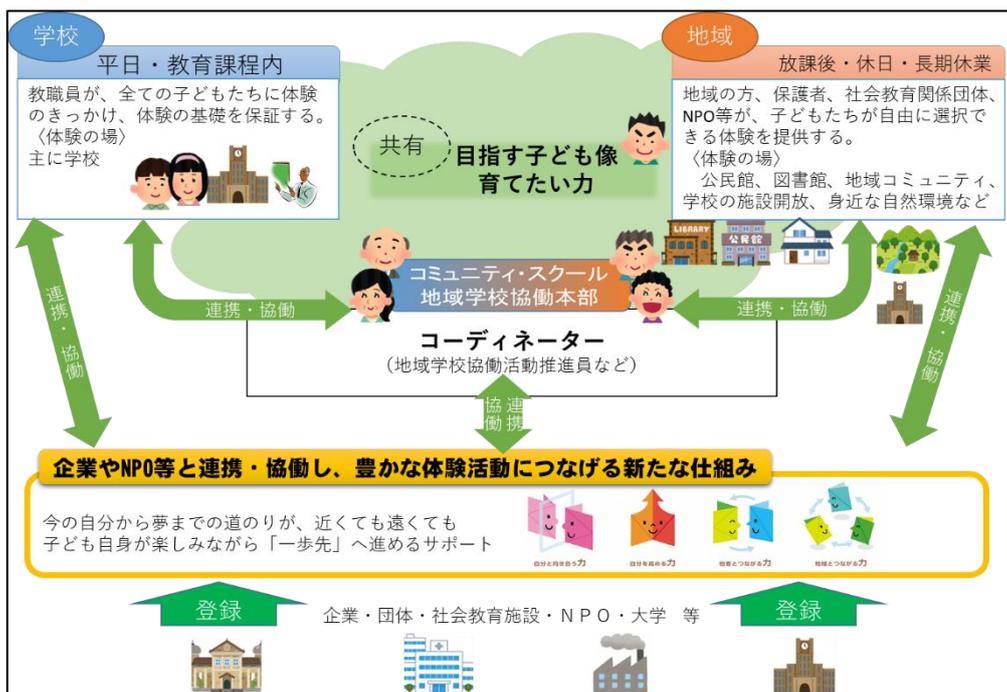
- 地域と学校が連携・協働し、豊かな体験活動を提供していくためには、学校関係者や地域住民等が、地域と学校の連携・協働や豊かな体験活動の必要性について、より一層理解を広げることが重要となる。特に学校長や市町村教育委員会の長等、組織のリーダーの理解が進むよう、働き掛けていく必要がある。

(3)子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むための企業やNPO等と連携・協働した仕組みづくり

- 第4において、子どもたちの意欲や主体性等、自分を高める力を育むための、学校と地域が連携・協働する効果的な体制を検証したが、学校と地域が連携・協働する仕組みや体制が十分に整っていない場合や豊かな体験活動を支援する地域の人材や設備が不足している場合もある。このような場合においては、地域をより広域に捉え、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む活動を実施する企業、NPO、社会教育団体等の団体（以下「企業やNPO等」という。）と学校をつなぎ、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を学校の教育活動や休日、放課後等の地域での活動等に取り入れ、豊かな体験活動につなげていくような仕組みづくり（イメージ図参照）が必要である。

この仕組みにより、学校においては、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を教育活動に取り入れ、子どもたちの学びを充実させることができるとともに、学区内の人材や設備だけでは学ぶことのできない領域の活動を行うことが可能になる。また、企業やNPO等においては、活動を通じて、地域への貢献に留まらず、企業理念等を地域や子どもたちへ伝えることや、子どもたちや保護者が企業やNPO等について知り、身近な存在に感じることによって、中長期的な人材確保につながり、学校と企業やNPO等の全てにメリットが期待できる。

図 20 仕組みのイメージ図



県内の企業やNPO等がその活動により育む力の例

「自分を高める力」	意欲・自信・自発性・チャレンジ精神・主体性等
「自分と向き合う力」	自制心・忍耐力・レジリエンス（回復力）等
「他者につながる力」	コミュニケーション力・コラボレーション力 共感性・協調性 等
「地域につながる力」	他者につながる力＋郷土愛・当事者性 等

企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む
活動事例①

カンコーマナボネクト株式会社

ア 団体の概要

「非認知能力」の育成を軸に、これからの時代に求められる力を育み、環境の変化を乗り越えて、多様な人々と協働しながら、自分らしい人生を切り開いて行けるひとづくりを目指し活動している企業。全国の幼保・小学校・中学校・高校・大学、行政、企業、地域団体等と協働し、授業や研修等のプログラム開発から評価設計、魅力発信等に取り組んでいる。

イ 主な事業（活動）内容

- キャリア教育事業
- 人材育成事業
- 学校魅力化事業
- 働き方改革・業務改善事業

ウ 事業例①：人財育成事業

「非認知能力パートナー養成講座（教員、保育士、地域スポーツ指導者、地域文化活動の指導者、保護者）」

（概要）

子どもと関わる大人が非認知能力について理解し、非認知能力を高めることを意識して子どもと関われるようになることを目的に、非認知能力の伸ばし方を学ぶ研修プログラムを岡山大学の中山准教授と共同開発し、定期的に研修会を開催している。受講者は教員、保育士、地域スポーツ指導者、地域文化活動の指導者など多岐に渡り、令和3年度には、岡山県生涯学習課から事業委託を受け、未就学児を持つ保護者向けの研修プログラムを開発した。

事業例②：キャリア教育事業

「Ancsプログラム（小学校高学年～高校生）」

（概要）

地域の大人が、これまでの人生の浮き沈みをグラフで示しながら職業

観や人生観、夢や目標を紹介。子どもたちは講話を通じて、自分の強みや弱みを考え、仲間と認め合いながら、10年後の自分の姿を描くプログラム。今の自分を認め、生き方を考えることで、教育活動に対する動機づけにもつながっている。これまで延べ2,000名以上の児童生徒が参加しており、教員やゲストとの振り返りや研修なども行っている。

企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む活動事例②

NPO法人備前プレーパークの会

ア 団体の概要

備前市内の自然豊かな里山環境を最大限に活かすプレーパークである。「森の冒険ひみつ基地」を拠点とし、子どもの遊ぶ環境の充実や子育て支援、多世代交流等の事業を行っている。

イ 主な事業

- 備前市地域子育て支援拠点事業
- プレーパーク事業
- 備前市利用者支援事業
- 森のようちえん事業
 - 0～2歳児対象の小規模保育園の運営
 - 3～5歳児対象の認可外保育施設の運営

ウ 事業例：プレーパーク事業「森の冒険ひみつ基地」

(概要)

既設の固定遊具はなく、火や水、土、木、落ち葉などの自然環境、廃材や身近な道具などから、自らひらめき、発見し、自由に遊びを創造できる遊び場である。

自由な遊びを通じて人と関わり合い、創意工夫し、挑戦・失敗し、それら乗り越えていく中で、子どもたちの自己肯定感や非認知能力等、目には見えない「心の根っこ」を育む。

遊びの例

- ・子どもの主体的な興味、関心をベースにした自由な遊び
 - 落ち葉集め、昆虫採集、トカゲとり、自由工作（紙・自然物・粘土・木工）、昔遊び、たき火、どろんこ遊び、水遊び、ダムづくり、ままごと、鬼ごっこ、探検ごっこ、べっこうあめづくり、まきまきパンづくり、やきいも、ひみつ基地づくり、名のないあそび 等

おわりに

今後この答申の内容を実現するためには、県教育委員会だけではなく、市町村教育委員会や首長担当部局との連携が求められる。学校、地域、家庭、企業、NPO、社会教育関係団体等の任意団体など社会の全ての構成員がこれからの社会を担う「子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策」について、具体的に行動していくことを期待したい。

県教育委員会には、この答申が県民に広く理解される機会を設けるよう尽力することを望む。

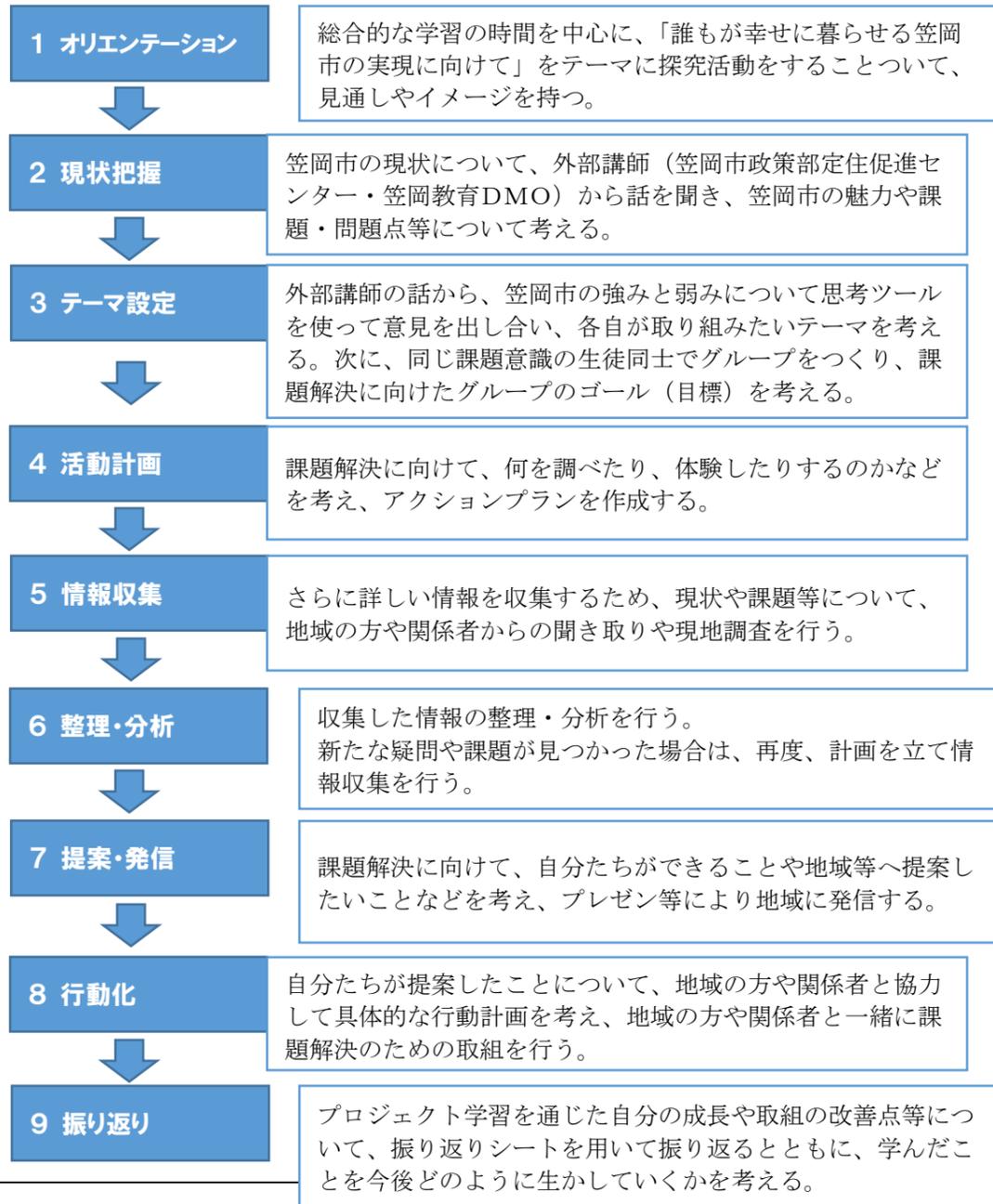
◇新旧対照表

第5回 生涯学習審議会・社会教育委員の会議 提示資料	第4回 生涯学習審議会・社会教育委員の会議 提示資料	備考
目 次	目 次	
はじめに	はじめに	第3までは前回確定済。
第1 「夢」のとらえ方 . . . 1	第1 「夢」のとらえ方 . . . 1	
第2 現状と課題 . . . 1 1 子どもの意欲や主体性について . . . 1 2 豊かな体験活動について . . . 2 3 学校と地域の連携・協働について . . . 4	第2 現状と課題 . . . 1 1 子どもの夢や主体性について . . . 1 2 豊かな体験活動について . . . 2 3 学校と地域の連携・協働について . . . 4	第7回専門部会の意見を受け、「意欲や主体性」という表記に統一した
第3 仮説の設定 . . . 7	第3 仮説の設定 . . . 7	
第4 モデル校等による検証 . . . 8 1 教育課程内 . . . 8 2 教育課程外 . . . 30	第4 モデル校等による検証 . . . 8 1 教育課程内 . . . 8 2 教育課程外 . . . 30 3 総合考察 . . . 35	・「総合考察」と「全体の総括」の内容が似通っていたため、統合した。
第5 <u>子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について</u> . . . 35 1 <u>3つの視点から見た方策</u> . . . 35 2 <u>まとめ</u> . . . 37 3 <u>具体的な方策の提案</u> . . . 38	第5 <u>学校や地域をつなぐための方策について</u> . . . 36 1 <u>地域学校協働活動推進員等の役割等について</u> . . . 36 2 <u>子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むための企業やNPO等と連携・協働した仕組みづくり</u> . . . 42 第6 <u>全体の総括</u> . . . 47	・「モデル校等による検証」の後、いきなり推進員という具体的な方策に入るのは違和感があるため、第5と第6を統合し、大きな方向性と具体的な方策という流れに変更した。
おわりに	おわりに	

実現」に向けた取組を行い、地域の一員としての自分の生き方を考えるとともに、プロジェクト学習²を通じて、「自分を高める力」などの非認知能力³を高める。

²生徒が設定した学習テーマに対し、調査や体験を通じて課題解決の方法を考えたり、実際に課題解決に向けた取組を行ったりする学習手法
³「自分と向き合う力」「自分を高める力」「他者とつながる力」「地域とつながる力」等、測定できない個人の特性による能力

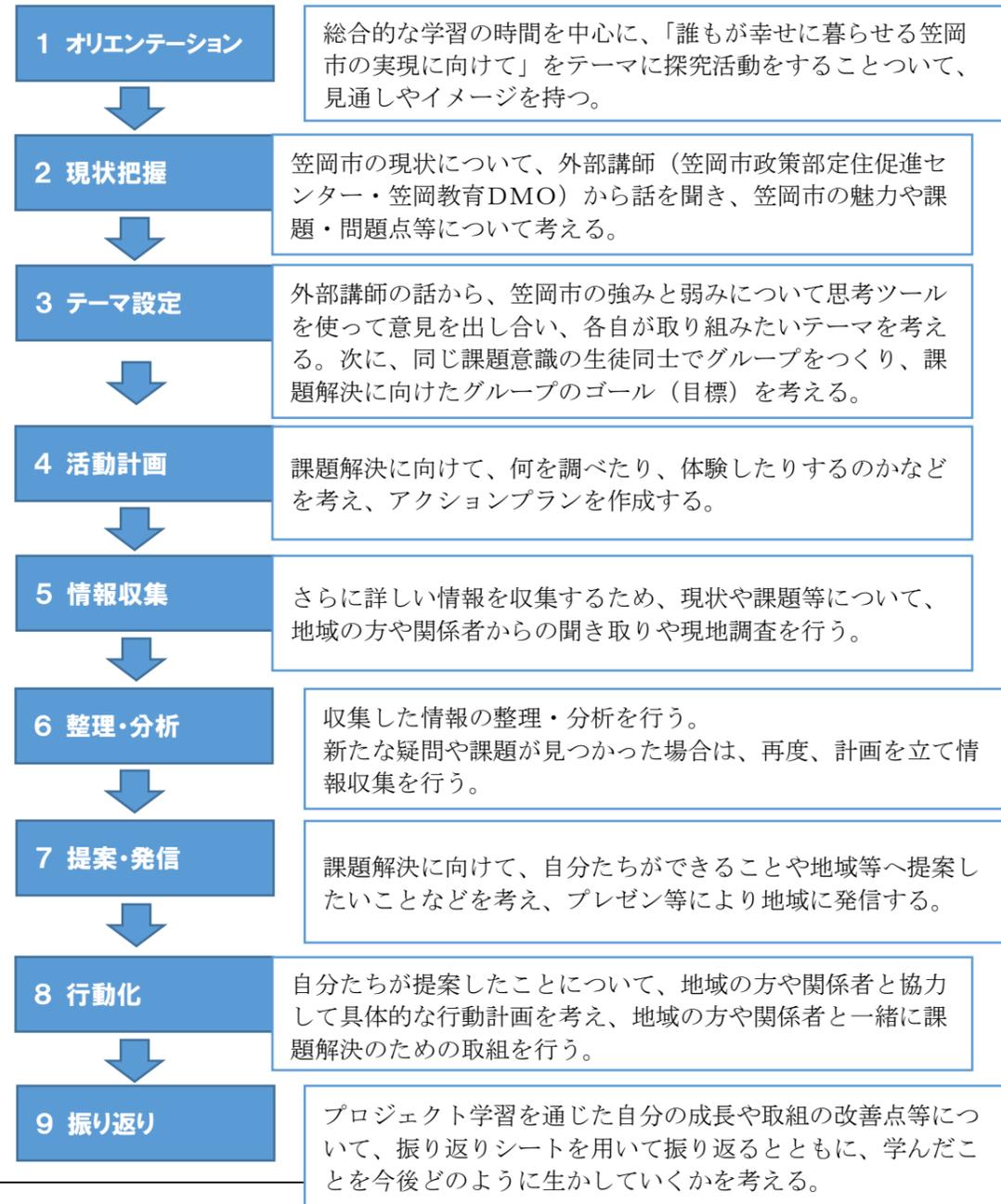
ウ プロジェクト学習の流れ



実現」に向けた取組を行い、地域の一員としての自分の生き方を考えるとともに、プロジェクト学習²を通じて、生徒の非認知能力³を高める。

2 生徒が設定した学習テーマに対し、調査や体験を通じて課題解決の方法を考えたり、実際に課題解決に向けた取組を行ったりする学習手法
 3 「自分と向き合う力」「自分を高める力」「他者とつながる力」「地域とつながる力」等、測定できない個人の特性による能力

【プロジェクト学習の流れ】



・表記を統一した

・表記を統一した。

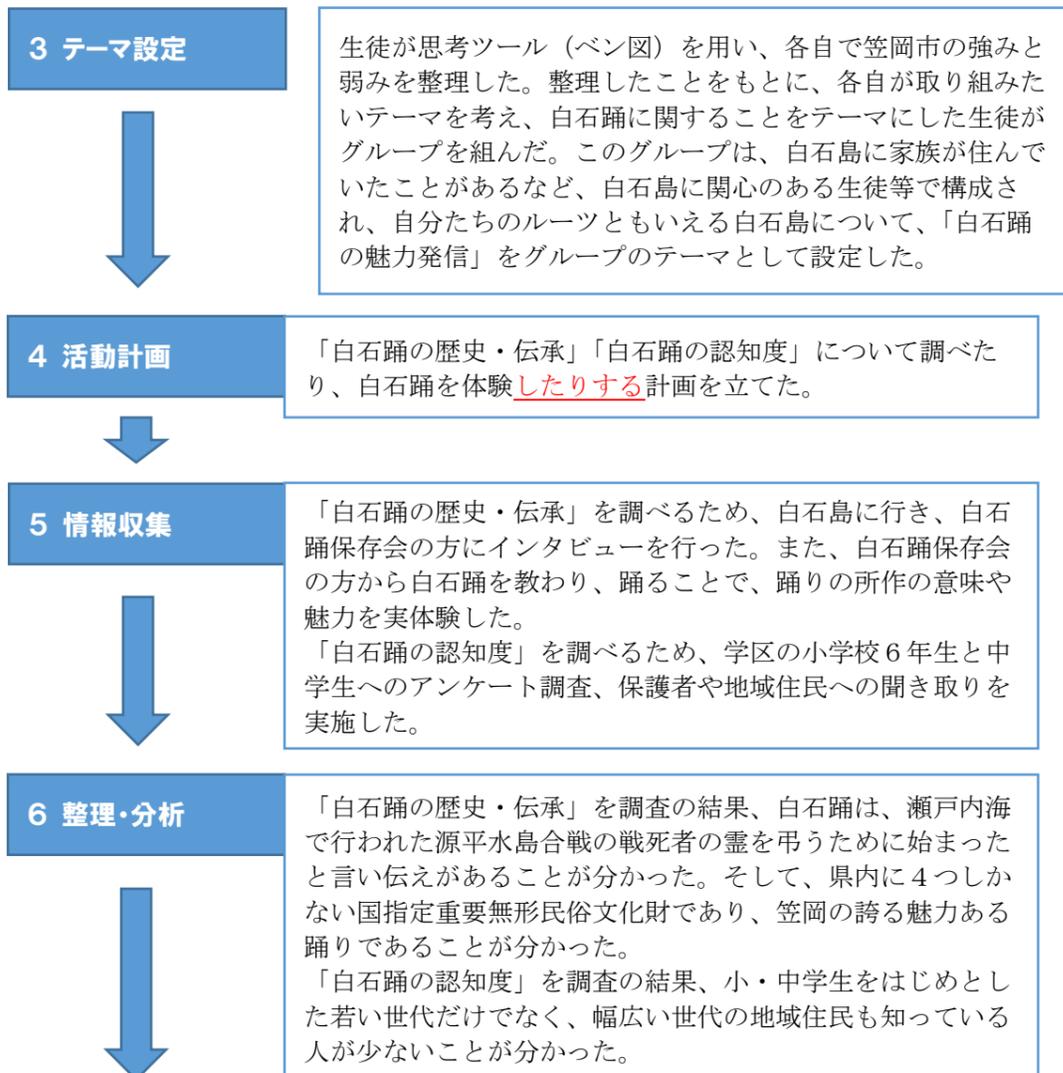
プロジェクト学習の17テーマ

- ・ 白石踊の魅力発信
- ・ 真鍋島の魅力
- ・ 北木島の魅力
- ・ 飛島の魅力
- ・ 大飛島の現状と課題
- ・ 笠岡の歴史
- ・ 笠岡の自然を守ろう
- ・ 生き物の生態
- ・ 笠岡の食の魅力
- ・ 笠岡の飲食店を盛り上げよう
- ・ 笠岡観光プロジェクト
- ・ 空き家を使って商業施設をつくる計画を立てる
- ・ 笠岡市の公共施設
- ・ 笠岡市の公共事業
- ・ 若い世代の人口を増やすために
- ・ 笠岡市の人口を増やす
- ・ 岡山県の詐欺について

更に学習の詳細を知るため、上記の学習テーマのうち、「白石踊の魅力発信」学習の詳細を取り上げる。

エ 「白石踊の魅力発信」学習の詳細

「白石踊の魅力発信」のプロジェクト学習の流れ3～9について、紹介する。

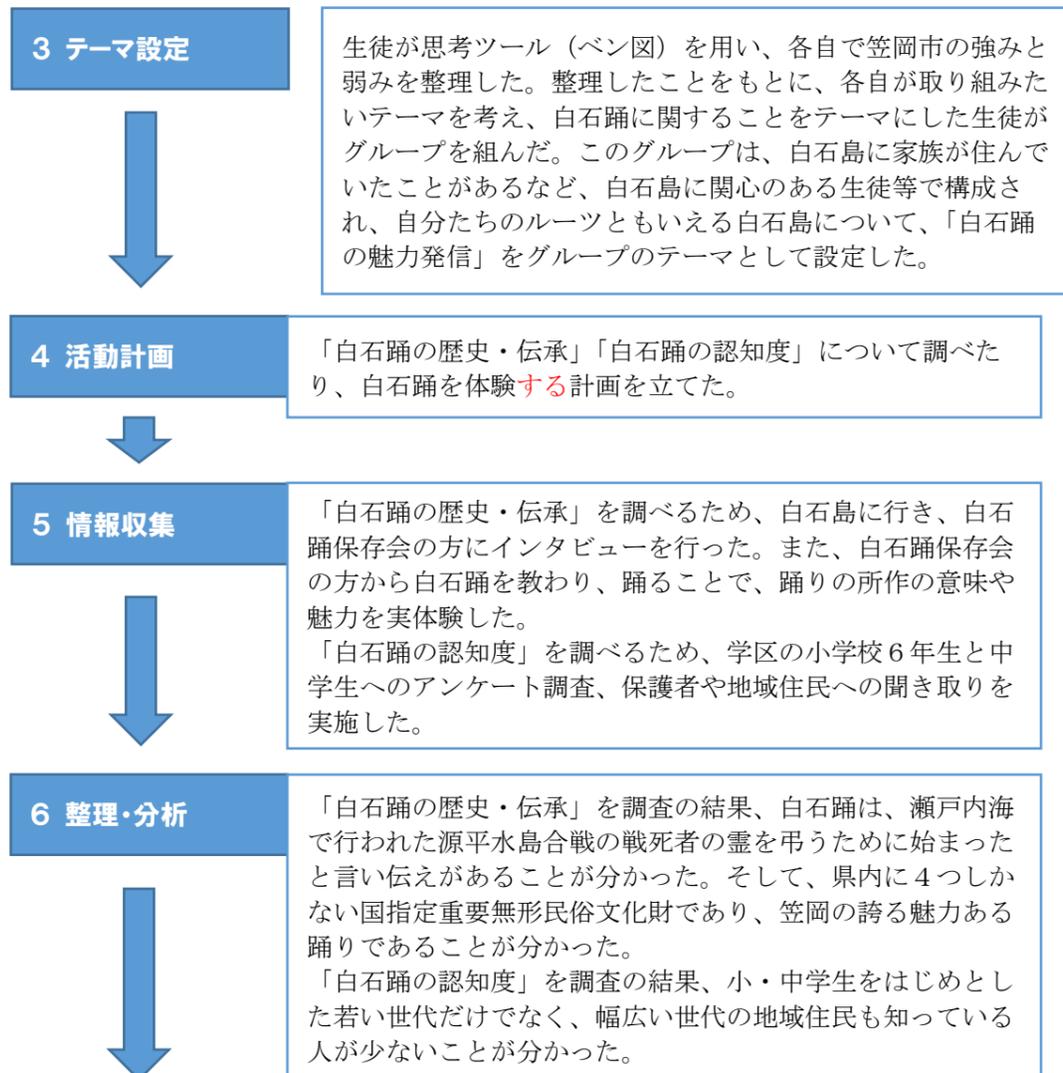


プロジェクト学習の17テーマ

- ・ 白石踊の魅力発信
- ・ 真鍋島の魅力
- ・ 北木島の魅力
- ・ 飛島の魅力
- ・ 大飛島の現状と課題
- ・ 笠岡の歴史
- ・ 笠岡の自然を守ろう
- ・ 生き物の生態
- ・ 笠岡の食の魅力
- ・ 笠岡の飲食店を盛り上げよう
- ・ 笠岡観光プロジェクト
- ・ 空き家を使って商業施設をつくる計画を立てる
- ・ 笠岡市の公共施設
- ・ 笠岡市の公共事業
- ・ 若い世代の人口を増やすために
- ・ 笠岡市の人口を増やす
- ・ 岡山県の詐欺について

【「白石踊の魅力発信」学習の詳細】

「白石踊の魅力発信」のプロジェクト学習の流れ3～8について、紹介する。



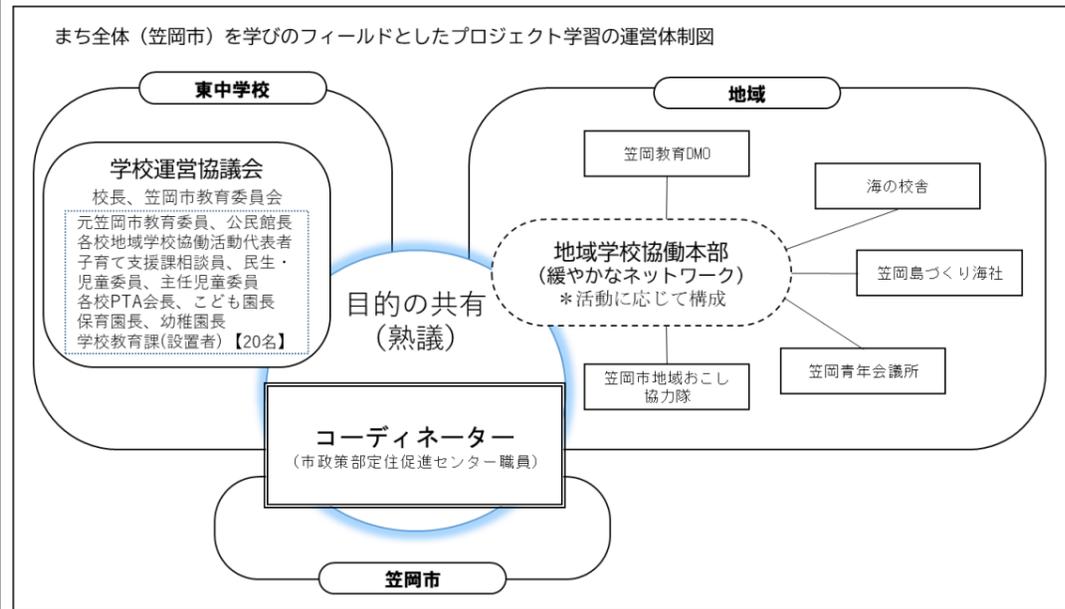
・ 文章が繋がりやすいように、追加した。

・ 表記を統一した。
・ 表記ミスの修正

・ 表記の修正

<p>7 提案・発信</p> <p>「白石踊の魅力発信」を行うためには、①リーフレットの配布やプレゼンを通じて学区の小・中学生に白石踊の魅力を発信すること、②自分たちが地域住民と一緒に白石踊を踊り、地域住民へ魅力を伝え、踊りを継承していくことが重要であることを地域住民に発表した。</p> <p>8 行動化</p> <p>教員や近隣の小学校と協力して、学区の小・中学生がいる家庭を中心に、生徒が作成した白石踊の魅力を伝えるリーフレットを配布することで、白石踊の魅力を地域に発信した。また、地域の盆踊り実行委員と協力して地域の人々と一緒に白石踊を踊ることも計画・準備していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により実施することができなかった。代替えとして、市教育委員会の協力を得て、生徒が習得した白石踊の校内発表会を開催し、在校生徒や来校者へ白石踊の魅力を伝えた。</p> <p>9 振り返り</p> <p>【生徒の振り返りシートより】 私たちの班は白石踊の歴史・背景について調べ、実際に白石島に行って白石踊りを体験し覚えた。さらに、自分が今できることについて考え、PRや発信をして広めるなどの行動に移すことができた。 【今後の展望】 「白石踊」が、笠岡市民の踊りとして伝承されるよう、中学校でのプロジェクト学習をきっかけとして、<u>中学卒業後も考えていきたい</u>という気運が育まれた。</p>	<p>7 提案・発信</p> <p>「白石踊の魅力発信」を行うためには、①リーフレットの配布やプレゼンを通じて学区の小・中学生に白石踊の魅力を発信すること、②自分たちが地域住民と一緒に白石踊を踊り、地域住民へ魅力を伝え、踊りを継承していくことが重要であることを地域住民に発表した。</p> <p>8 行動化</p> <p>教員や近隣の小学校と協力して、学区の小・中学生がいる家庭を中心に、生徒が作成した白石踊の魅力を伝えるリーフレットを配布することで、白石踊の魅力を地域に発信した。また、地域の盆踊り実行委員と協力して地域の人々と一緒に白石踊を踊ることも計画・準備していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により実施することができなかった。代替えとして、市教育委員会の協力を得て、生徒が習得した白石踊の校内発表会を開催し、在校生徒や来校者へ白石踊の魅力を伝えた。</p> <p>9 振り返り</p> <p>【生徒の振り返りシートより】 私たちの班は白石踊の歴史・背景について調べ、実際に白石島に行って白石踊りを体験し覚えた。さらに、自分が今できることについて考え、PRや発信をして広めるなどの行動に移すことができた。 【今後の展望】 「白石踊」が、笠岡市民の踊りとして伝承されるよう、中学校でのプロジェクト学習をきっかけとして、<u>高校やさらにその先も、地域とともに考えていこう</u>という気運が育まれた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・内容がわかりやすいように表現を修正した。 ・表記を統一した。 ・表記を統一した。
<p>オ 運営体制</p> <p>目的の共有</p> <p>学校運営協議会を通じて、学校と地域で取組についての共通理解を図った。取組を進めていくに<u>当たり</u>、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと、学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いが一致し、笠岡市政策部 定住促進センターの職員がコーディネーターとなり、笠岡教育DMO、海の校舎、笠岡島づくり海社、笠岡青年会議所、笠岡市地域おこし協力隊など地域の関係者にプロジェクト学習の趣旨を説明し、協力を働きかけるなど、学校との連絡・調整を行った。</p>	<p>【運営体制】</p> <p>目的の共有</p> <p>学校運営協議会を通じて、学校と地域で取組についての共通理解を図った。取組を進めていくに<u>あたり</u>、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いが一致し、笠岡市政策部 定住促進センターの職員がコーディネーターとなり、笠岡教育DMO、海の校舎、笠岡島づくり海社、笠岡青年会議所、笠岡市地域おこし協力隊など地域の関係者にプロジェクト学習の趣旨を説明し、協力を働きかけるなど、学校との連絡・調整を行った。</p>	

図 10 笠岡市立笠岡東中学校の運営体制図



非認知能力の育成—生徒・教職員・地域の関係者—

非認知能力を高めるため、学校と地域の関係者は、学習活動の目的や生徒の学習活動を価値付ける方法を共有し、同じ視点で生徒と関わった。

- 笠岡東中学校区の小・中学校の教職員が「9年間で育てたい力」を整理した。さらに、生徒の行動に価値付けを行うため、それぞれの育てたい力に対して、発達段階に応じた行動指標（別紙資料編参照）を作成し、生徒や地域の関係者に示した。

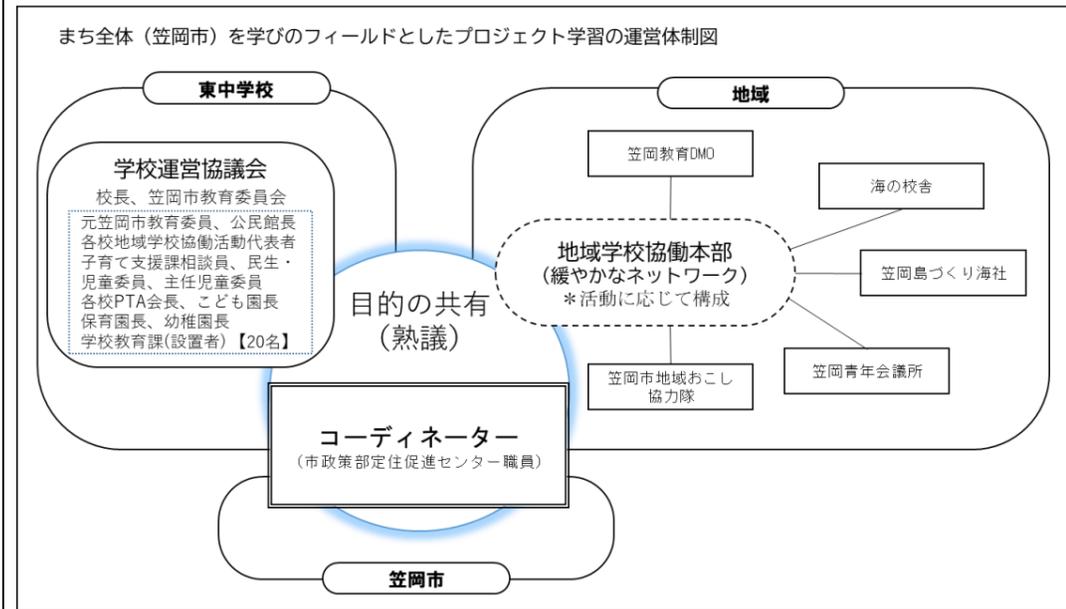
〈9年間で育てたい力〉

自分と向き合う力		自分を高める力		他者とつながる力		
自分をコントロールする力	粘り強さ	主体性	挑戦力	コミュニケーション力	思いやる力	協力・協働

- 生徒は、学習活動を通じて自分が育てたい力を選択し、そのために何をがんばるか等の行動目標を設定し、学習活動の事前と事後で自己評価を行った。
- 教職員と地域の関係者は、生徒が設定した行動目標や振り返り等を共有し、生徒の言動を見取り、具体的な声かけ等、生徒の活動に価値付けを行った。

力 結果 (アンケート結果より)

図 10 笠岡市立笠岡東中学校の運営体制図



非認知能力の育成—生徒・教職員・地域の関係者—

非認知能力を高めるため、学校と地域の関係者は、学習活動の目的や生徒の学習活動を価値付ける方法を共有し、同じ視点で生徒と関わった。

- 笠岡東中学校区の小・中学校の教職員が「9年間で育てたい力」を整理した。さらに、生徒の行動に価値付けを行うため、それぞれの育てたい力に対して、発達段階に応じた行動指標（別紙資料編参照）を作成し、生徒や地域の関係者に示した。

〈9年間で育てたい力〉

自分と向き合う力		自分を高める力		他者とつながる力		
自分をコントロールする力	粘り強さ	主体性	挑戦力	コミュニケーション力	思いやる力	協力・協働

- 生徒は、学習活動を通じて自分が育てたい力を選択し、そのために何をがんばるか等の行動目標を設定し、学習活動の事前と事後で自己評価を行った。
- 教職員と地域の関係者は、生徒が設定した行動目標や振り返り等を共有し、生徒の言動を見取り、具体的な声かけ等、生徒の活動に価値付けを行った。

【結果】

・表記のミスを修正した

・表記を統一した

・表記を統一した

① 17のテーマでプロジェクト学習を行う3年生に「自分を高める力」と「地域への愛着心」に関連した項目について、プロジェクト学習の実施前後にアンケート（図11）を実施した。

図11 笠岡市立笠岡東中学校の生徒アンケート

○生徒（3年生）アンケート総数・・・105			事前	事後
主体性、 挑戦力 (粘り 強さ) ↓ 自分を 高める力	1	一度取り組み始めたことは、あきらめずに続けることができる	61.6%	72.0%
	2	一度やりとげたことを、さらに続けてみたいと思うことができる	53.5%	70.9%
	3	ふだん努力していることを、別のことにも活かそうと思える	49.5%	62.4%
	4	具体的に目標を決め、その目標へコツコツと向かっていける	54.6%	62.4%
	5	いま取り組んでいるとことを、さらによりよくしようとする	58.6%	69.9%

※「とてもできている」「少しできている」「どちらともいえない」「あまりできていない」「全くできていない」の5件法での回答のうち、「とてもできている」「少しできている」と回答した生徒の割合

地域への 愛着心	6	自分の住んでいる地域のことが好き	3.58	4.01
	7	地域には良いところがたくさんある	3.37	4.03
	8	地域の行事に参加している	2.28	3.00
	9	地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある	3.04	3.76

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点

（記述より）

- ・自分たちの提案や活動によって、多くの人の考えを変えることができうれしかった。他の人に提案することに面白さを感じた。
- ・島で過疎化が進んでいることを知り、島や市が一丸となって、改善・工夫されていけば良いと思った。若い世代が何をすれば良いか考えるようになった。
- ・自分が求めるだけでなく、何が自分にできるのかを考えないといけないと思った。
- ・学習前は地域に興味が無かったけれど、学習後は自分の地域に少し興味を持ち、地区清掃に参加した。
- ・海にゴミがたまっていたので、ゴミ捨て場まで運んだ。
- ・**地元**の食材を買うようになった。
- ・自分たちの提案から、市の方にスケートパークのセクションを作ってもらっ

③ 17のテーマでプロジェクト学習を行う3年生に「自分を高める力」と「地域への愛着心」に関連した項目について、プロジェクト学習の実施前後にアンケート（図11）を実施した。

図11 笠岡市立笠岡東中学校の生徒アンケート

○生徒（3年生）アンケート総数・・・105			事前	事後
主体性、 挑戦力 (粘り 強さ) ↓ 自分を 高める力	1	一度取り組み始めたことは、あきらめずに続けることができる	61.6%	72.0%
	2	一度やりとげたことを、さらに続けてみたいと思うことができる	53.5%	70.9%
	3	ふだん努力していることを、別のことにも活かそうと思える	49.5%	62.4%
	4	具体的に目標を決め、その目標へコツコツと向かっていける	54.6%	62.4%
	5	いま取り組んでいるとことを、さらによりよくしようとする	58.6%	69.9%

「とてもできている」「少しできている」「どちらともいえない」「あまりできていない」「全くできていない」の5件法での回答のうち、「とてもできている」「少しできている」と回答した生徒の割合を**示したもの**

地域への 愛着心	6	自分の住んでいる地域のことが好き	3.58	4.01
	7	地域には良いところがたくさんある	3.37	4.03
	8	地域の行事に参加している	2.28	3.00
	9	地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある	3.04	3.76

「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点

（記述より）

- ・自分たちの提案や活動によって、多くの人の考えを変えることができうれしかった。他の人に提案することに面白さを感じた。
- ・島で過疎化が進んでいることを知り、島や市が一丸となって、改善・工夫されていけば良いと思った。若い世代が何をすれば良いか考えるようになった。
- ・自分が求めるだけでなく、何が自分にできるのかを考えないといけないと思った。
- ・学習前は地域に興味が無かったけれど、学習後は自分の地域に少し興味を持ち、地区清掃に参加した。
- ・海にゴミがたまっていたので、ゴミ捨て場まで運んだ。
- ・地産地消の食材を買うようになった。
- ・自分たちの提案から、市の方にスケートパークのセクションを作ってもらっ

・アンケートの結果であることをわかりやすくした。

・表記を統一した

・表記を統一した

・表現を修正した。

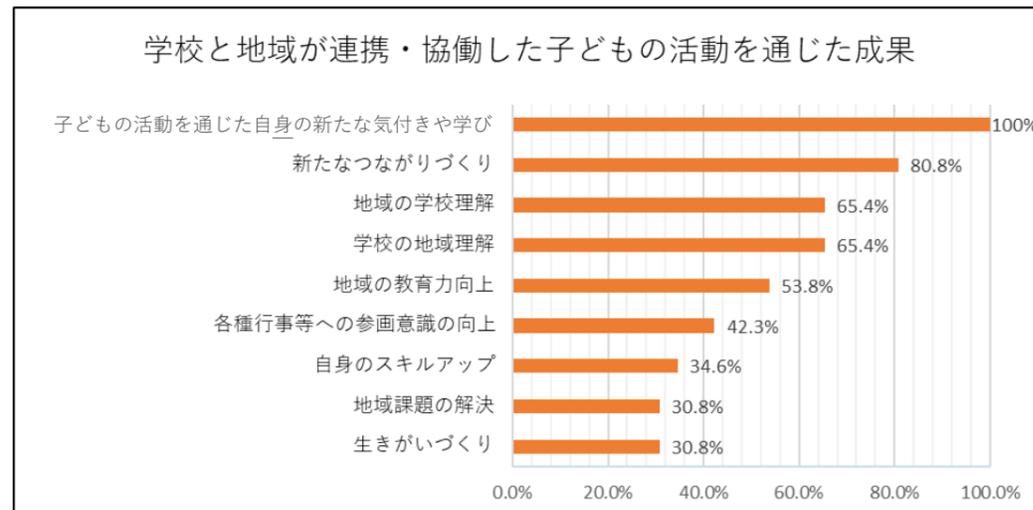
た。

- ② この学習活動や企画に関わった地域の関係者や教職員に対し、アンケート調査（図 12、13）を行った。

図 12 笠岡市立笠岡東中学校の地域の関係者アンケート

○地域の関係者 アンケート総数・・・26		事前	事後
相互理解	1 子どもの成長や夢を育むには、学校と地域が連携した活動が必要だと思う	4.35	4.81
	2 学校の取組や活動を知っている	2.96	4.04
	3 学校が困っていることや課題を知っている	2.85	3.62

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



※「学校と地域が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

- ・ 学校と地域の人と人のつながりが生まれ、教育活動が活性化している。地域全体で地域を愛する子どもを育てていきたい。
- ・ 地域をより良くする活動に子どもたちにも加わってもらい、文化や環境を大切にすることと、それを継承する方向に持っていけたらと思う。
- ・ 学校だけでなく、地域の方で子どもたちを育てていきたいと思った。
- ・ お互い（地域・学校・子ども）の良いところの共有が必要だと思う。
- ・ いろいろな場面で活躍されている方々の子どもたちに対する思いを聞き、自分自身の視野を広げることができた。

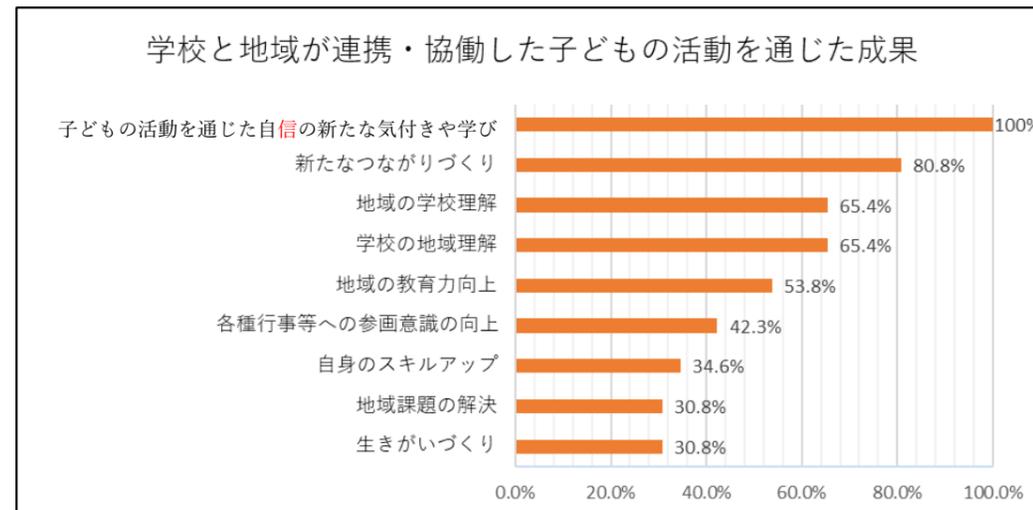
た。

- ④ この学習活動や企画に関わった地域の関係者や教職員に対し、アンケート調査（図 12、13）を行った。

図 12 笠岡市立笠岡東中学校の地域の関係者アンケート

○地域の関係者 アンケート総数・・・26		事前	事後
相互理解	1 子どもの成長や夢を育むには、学校と地域が連携した活動が必要だと思う	4.35	4.81
	2 学校の取組や活動を知っている	2.96	4.04
	3 学校が困っていることや課題を知っている	2.85	3.62

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



※「学校と地域が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

- ・ 学校と地域の人と人のつながりが生まれ、教育活動が活性化している。地域全体で地域を愛する子どもを育てていきたい。
- ・ 地域をより良くする活動に子どもたちにも加わってもらい、文化や環境を大切にすることと、それを継承する方向に持っていけたらと思う。
- ・ 学校だけでなく、地域の方で子どもたちを育てていきたいと思った。
- ・ お互い（地域・学校・子ども）の良いところの共有が必要だと思う。
- ・ **地域の産業や自然環境について、興味を持って調べ取り組み、とても良い学習経験になったのではないかと思います。活動をお手伝いする中で、私たちが初心に返れるような気がした。**

・ 表記を統一した

・ 表記のミスを修正

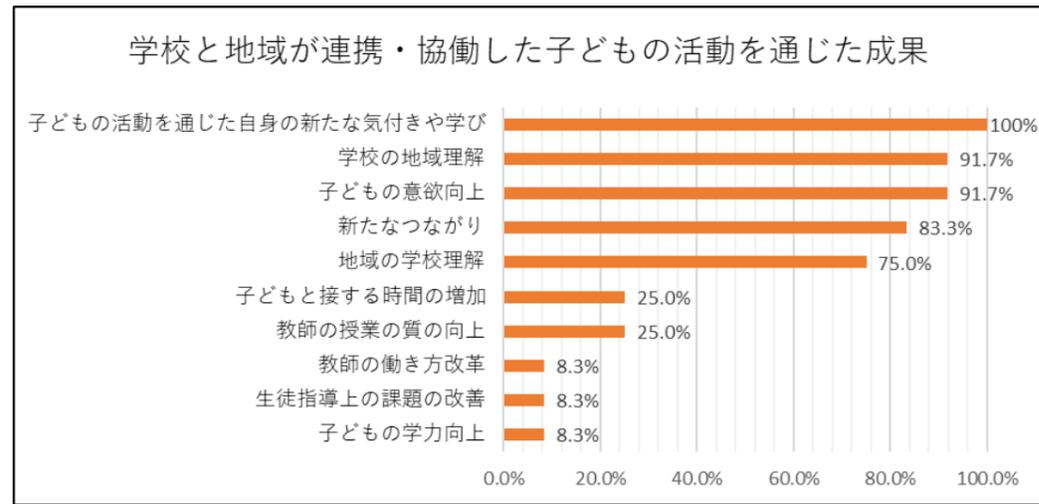
・ 表記を統一した

・ 大人自身の学びがうかがえる感想に変更した。

図 13 笠岡市立笠岡東中学校の教職員アンケート

○教職員 アンケート総数・・・12		事前	事後	
相互理解	1	子どもの成長や夢を育むには、学校と地域が連携した活動が必要だと思う	4.25	4.83
	2	地域は学校の取組や活動を知っている	3.08	3.83
	3	地域は学校が困っていることや課題を知っている	3.08	4.08

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



※「学校と地域が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

- ・ 活動をする中で、地域のことについていろいろわかってきた。子どもたちも同じように感じているのではないかと思う。
- ・ 教員が地域のことを知らないとな生徒に伝えられない。だからこそ、地域学を進めていく上で地元の方との連携はとても大切であると思った。
- ・ 生徒の教員以外への関わり方を通じて、社会に出たときに必要になるコミュニケーション力を学べたことが大きな収穫であった。
- ・ 生徒が地域の課題や魅力に目を向けることができ、有効な活動であったと思う。家族や教員以外の大人との関わりも貴重な体験になると思う。

キ 取組の検証

①仮説1に対する検証

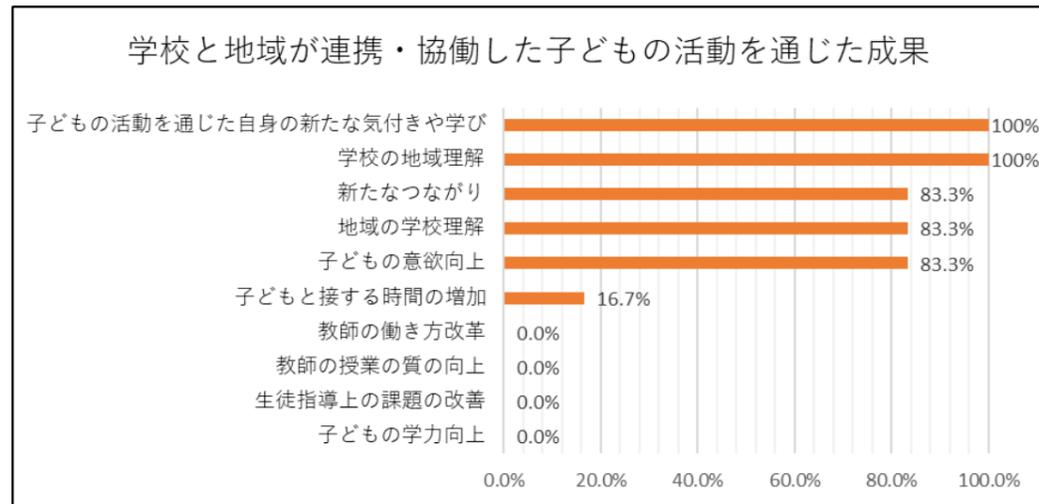
〈成果〉

- ・ 熟議の中で、教職員と地域の関係者が、プロジェクト学習の目的や生徒の活動を価値付ける方法を共有したことで、教職員や地域の関係者が生徒の成長に気付き、具体的な声掛（フィードバック）を行ったことで、

図 13 笠岡市立笠岡東中学校の教職員アンケート

○教職員 アンケート総数・・・6（*集計追加予定）		事前	事後	
相互理解	1	子どもの成長や夢を育むには、学校と地域が連携した活動が必要だと思う	4.17	4.67
	2	地域は学校の取組や活動を知っている	3.00	3.83
	3	地域は学校が困っていることや課題を知っている	2.67	3.83

「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



「学校と地域が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

- ・ 活動をする中で、地域のことについていろいろわかってきた。子どもたちも同じように感じているのではないかと思う。
- ・ 教員が地域のことを知らないとな生徒に伝えられない。だからこそ、地域学を進めていく上で地元の方との連携はとても大切であると思った。
- ・ 生徒の教員以外への関わり方を通じて、社会に出たときに必要になるコミュニケーション力を学べたことが大きな収穫であった。
- ・ 生徒が地域の課題や魅力に目を向けることができ、有効な活動であったと思う。家族や教員以外の大人との関わりも貴重な体験になると思う。

【取組の検証】

① 仮説1に対する検証

〈成果〉

- ・ 熟議の中で、教職員と地域の関係者が、プロジェクト学習の目的や生徒の活動を価値付ける方法を共有することで、教職員や地域の関係者が生徒の成長に気付き、具体的な声かけ（フィードバック）を行うことで、

・ 教職員アンケートの追加分を集計に加えた。

・ 表記を統一した

・ 表記を統一した

・ 表記を統一した。

・ 表記を統一した

<p>生徒は自分の成長を感じやすくなり、主体性の向上へとつながった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校と地域が連携・協働したプロジェクト学習を通じて、在籍生徒全員に豊かな体験活動に触れる機会が確保され、体験格差の是正につながった。 プロジェクト学習を実施するに当たって、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いを一致させたため、コーディネーターを中心として、数多くの地域の関係者を巻き込んだ取組を実施することができた。 17グループごとに行うプロジェクト学習は、多くの地域の関係者へ取組の説明等や、協力を働きかけるなどの連絡・調整が多岐にわたり、コーディネーター役の負担は大きい。アンケートの結果では、笠岡東中学校においては教職員の負担感に意識の変化は認められないが、行政職員が業務としてコーディネートすることで、可能な限り少ない学校負担で豊かな体験活動を提供することができた。 プロジェクト学習を通して、中学卒業後も笠岡市の魅力等について、考えていきたいという気運が生徒に育まれた。また、一部の生徒には、行動変容が認められた。 <p>〈課題〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育課程内の総合的な学習の時間を中心とした学校の活動のため、時間的な制限があったり、活動内容にある程度の制限が生じたりする。子どもが興味や関心を持ち、より深く探究活動を行うためには、学校教育と社会教育が連携し、公民館や放課後・休日等に行われる取組へとつなげていくことが必要である。 生徒が地域へ出向く際の引率は、休日や長期休業日に教職員が行っているが、持続可能な取組とするためには、地域の人や保護者を含めた運営・体制づくりが必要である。 生徒の活動内容や場所によっては交通費が必要となるため、費用負担等の検討が必要である。 <p>②仮説2に対する検証</p> <p>〈成果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域全体を学びの場として学校の場を活用し、地域課題について、学校と地域が連携して取り組むことは、地域の教育力向上に有効な活動である。 生徒の学習を通して、学習に関わった大人も地域のことを再発見できるきっかけとなった。 学校と地域が連携・協働することにより、地域の関係者と教職員の相互 	<p>生徒は自分の成長を感じやすくなり、挑戦力や主体性の向上へとつながった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校と地域が連携・協働したプロジェクト学習を通じて、在籍生徒全員に豊かな体験活動に触れる機会が確保され、体験格差の是正につながった。 プロジェクト学習を実施するに当たって、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いを一致させたため、コーディネーターを中心として、数多くの地域の関係者を巻き込んだ取組を実施することができた。 17グループごとに行うプロジェクト学習は、多くの地域の関係者へ取組の説明等や、協力を働きかけるなどの連絡・調整が多岐にわたり、コーディネーター役に係る負担は大きい。アンケートの結果では、笠岡東中学校においては教員の負担感に意識の変化は認められないが、行政職員が業務としてコーディネートすることで、可能な限り少ない学校負担で豊かな体験活動を実施することができた。 プロジェクト学習を通して、高校やその先も笠岡市の魅力等について、地域とともに生徒が考えるきっかけとなった。また、一部の生徒には、行動変容が認められる。 <p>〈課題〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育課程内の総合的な学習の時間を中心とした学校の活動のため、時間的な制限があったり、活動内容にある程度の制限が生じたりする。子どもが興味や関心を持ち、より深く探究活動を行うためには、学校教育と社会教育が連携し、公民館や放課後・休日等に行われる取組へとつなげていくことが必要である。 生徒が地域へ出向く際の引率は、休日や長期休業日に教員が行っているが、持続可能な取組とするためには、地域の人や保護者を含めた運営・体制づくりが必要である。 生徒の活動内容や場所によっては交通費が必要となるため、費用負担等の検討が必要である。 <p>② 仮説2に対する検証</p> <p>〈成果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域全体を学びの場として学校の場を活用し、地域課題について、学校と地域が連携して取り組むことは、地域の教育力向上に有効な活動である。 生徒の学習を通して、学習に関わった大人も地域のことを再発見できるきっかけとなった。 学校と地域が連携・協働することにより、地域の関係者と教職員の相互 	<ul style="list-style-type: none"> 挑戦力という表現は一般的ではなく、主体性と似ているので主体性のみに変更 表記のミスを修正した 意味が伝わりにくい表記を修正した 表記を統一した
--	--	--

理解が進み、新たなつながりづくりに役立った。

〈課題〉

- ・ 学校と保護者や地域住民との関わりはあまり多くなかったため、保護者や地域住民を含めた熟議を行うことで、より多くの人が関わるができるようにする必要がある。

(2)浅口市立寄島小学校

ア 概要

寄島の魅力である「海」をテーマにSDGsの視点を取り入れ、学校と地域が連携・協働した「寄島に親しむ」「寄島を知る」「寄島を見つめる」「寄島に貢献・還元する」などの学習活動（地域に開かれた教育課程「よりしま学」）の中で、豊かな体験活動を行っている。保育活動（5歳児）、生活科・総合的な学習の時間（小・中学生）を核として実施している。

イ 目的

学校と地域が連携・協働した「よりしま学」を通じ、主体的に問題解決に関わる意欲やコミュニケーション力等の非認知能力やふるさとへの誇りを持つ子どもを育成する。

ウ 主な活動内容

よりしま学（主に総合的な学習の時間で実施）

学年	テーマ	内 容
1年生 25人	大好き わたしたちの よりしま	・海岸散策や砂遊び、ビーチフラッグなど海に関係した遊びを地域ボランティアと行った。 ・海岸散策の際に拾った廃材を使った工作を図工の時間に行った。
2年生 26人	とび出せ！よりしま の町へ	・寄島の町を知るために、町探検に出かけ、町の商店で働く方や漁港で働く方などにインタビューを行った。 ・店の方の協力を得て、スーパーの棚卸しや電気店での懐中電灯の解体作業などを体験した。
		・カキの養殖についてのやりがいや苦勞、寄島のカキのおいしさの秘密などを漁業組合の方にインタビューし、まとめた。

理解が進み、新たなつながりづくりに役立った。

〈課題〉

- ・ 学校と地域の関係者との関わりと比較すると、学校と保護者や学校と地域住民との関わりは少なかったため、保護者や地域住民を含めた熟議を行うことで、より広く地域と関わるができるようにする必要がある。

(2)浅口市立寄島小学校

【概要】

寄島の魅力である「海」をテーマにSDGsの視点を取り入れ、学校と地域が連携した「寄島に親しむ」「寄島を知る」「寄島を見つめる」「寄島に貢献・還元する」などの活動（地域に開かれた教育課程「よりしま学」）を行う。保育活動（5歳児）、生活科・総合的な学習の時間（小・中学生）を核として実施している。

【目的】

学校と地域が連携した「よりしま学」を通じ、主体的に問題解決に関わる意欲やコミュニケーション力等の非認知能力やふるさとに誇りを持つ子どもを育成する。

【主な活動内容】

① よりしま学（主に総合的な学習の時間で実施）

学年	テーマ	内 容
1年生	大好き わたしたちの よりしま	・海岸散策や砂遊び、ビーチフラッグなど海に関係した遊びを地域ボランティアと行った。 ・海岸散策の際に拾った廃材を使った工作を図工の時間に行った。
2年生	とび出せ！よりしま の町へ	・寄島の町を知るために、町探検に出かけ、町の商店で働く方や漁港で働く方などにインタビューを行った。 ・店の方の協力を得て、スーパーの棚卸しや電気店での懐中電灯の解体作業などを体験した。
		・カキの養殖についてのやりがいや苦勞、寄島のカキのおいしさの秘密などを漁業組合の方にインタビューしまとめた。

・意味が伝わりにくい表記を修正した。

・表記を統一した。

・表記を統一した。
・体験活動を行っていることを概要の中に入れた。

・表記を統一した。

・表記のミスを修正した

・表記を統一した。

・②がなくなったため、①を削除した。

・表記のミスを修正

3年生 24人	とび出せ！よりしまの海へ	<ul style="list-style-type: none"> ・漁業組合の協力を得て、カキの種付けや収穫を体験したり、カキの成長の様子を観察・記録を<u>行ったりした</u>。 ・水揚げされたたこや魚などを実際に触らせてもらうなどしました。 	3年生	とび出せ！よりしまの海へ	<ul style="list-style-type: none"> ・漁港組合の協力を得て、カキの種付け収穫を体験したり、カキの成長の様子を観察・記録を<u>行った</u>。 ・水揚げされたたこや魚などを実際に触らせてもらうなどしました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表記のミスを修正
4年生 28人	守れ！寄島の海と人	<ul style="list-style-type: none"> ・海岸や海のゴミの現状について、漁業組合や地域の方へ聞き取りを行ったり、調べたりした。 ・調べる中で、マイクロプラスチックの存在を知り、NPO 法人グリーンパートナーや山陽学園などの協力も得て、マイクロプラスチックの有無を調べる実験を行った。 ・調べたことを「自分たちにできること」として地域に発信した。 	4年生	守れ！寄島の海と人	<ul style="list-style-type: none"> ・海岸や海のゴミの現状について、漁業組合や地域の方へ聞き取りを行ったり、調べたりした。 ・調べる中で、マイクロプラスチックの存在を知り、NPO 法人グリーンパートナーや山陽学園などの協力も得て、マイクロプラスチックの有無を調べる実験を行った。 ・調べたことを「自分たちにできること」として地域に発信した。 	
5年生 29人	発信！寄島の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ・行政やNPO法人などの協力を得て、本州で寄島地区にしかないアッケシソウの保護活動を行ったり、シーカヤック体験をしたりした。 ・フィールドワークを行い、地域住民への聞き取りをしながら寄島の魅力についてまとめた。 ・寄島の魅力を幅広く伝えるために、マスコットキャラクターをつくりたいという声が子どもたちから上がり、学校運営協議会で提案<u>した</u>。 	5年生	発信！寄島の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ・行政やマリンスポーツ店などの協力を得て、本州で寄島地区にしかないアッケシソウの保護活動を行ったり、シーカヤック体験をしたりした。 ・フィールドワークを行い、地域住民への聞き取りをしながら寄島の魅力についてまとめた。 ・寄島の魅力を幅広く伝えるために、マスコットキャラクターをつくりたいという声が子どもたちから上がり、学校運営協議会で提案<u>するための準備を進めている</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表記のミスを修正
6年生 29人	未来へ 寄島歴史探検	<ul style="list-style-type: none"> ・寄島地区に関係した歴史について、フィールドワークをしたり、文化財保護委員や郷土資料館長、宮司<u>等</u>にインタビューなどを<u>行ったりした</u>。 ・調べた内容について、オンライン歴史百科事典「ヨリペディア」を作成し、ホームページに公開した。 	6年生	未来へ 寄島歴史探検	<ul style="list-style-type: none"> ・寄島地区に関係した歴史について、フィールドワークをしたり、文化財保護委員や郷土資料館長、宮司<u>等</u>にインタビューなどを<u>行った</u>。 ・調べた内容について、オンライン歴史百科事典「ヨリペディア」を作成し、ホームページに公開した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表記のミスを修正
			<p>② よりしまみつけ隊の取組</p> <p>令和3年7月に設立し、地域学校協働本部が中心となり、放課後や休日に子どもたちの自発性を尊重した活動を地域の大人がサポートすることを中心に活動を行っている。小・中学生の希望者15人程度と地域住民（地域学校協働活動関係者）で構成されている。</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程外の取組であるため、教育課程内の活動と並べて書くと誤解を招くため、記載する位置を変更した。

設立当初は、「遊び」「体験」「物づくり」の3グループでスタートし、「サッカー」「シーカヤック」「自由工作」等を楽しんだ。

1回目の活動を受けて、井原市内の中学生と高校生の希望者で構成されたグループ「Team 夢源」（「ふるさと井原をベースに「自分たち」も「ふるさと」も魅力的な「ひと」や「まち」になるような活動」を行う）のメンバーを招いて、活動の様子や活動に対する思いを聞いたり、ワークショップを行った。ワークショップが刺激となり、参加した子どもや大人には、次のような新たな活動が生まれてきている。

- ・ 寄島の魅力をカレンダーにして公共施設へ寄贈した。（商品化も検討）
- ・ 寄島の魅力を発信する動画「よりしま散歩」を作成中
- ・ 保育園との交流活動を計画
- ・ 地域イベントの開催を計画
- ・ ものづくりを行い、地域のお年寄りへプレゼントし、一部を商品化して販売することを計画

【運営体制】

- ① 令和元年 10 月に小・中学校で学校運営協議会を設置。令和2年度から寄島地区にある保育園・こども園・小学校・中学校の4校園の「寄島学園コミュニティ・スクール」として保こ小連携活動及び小中一貫教育推進している。

・ 表記を統一した。

エ 運営体制

- ① 令和元年 10 月に小・中学校で学校運営協議会を設置。令和2年度から寄島地区にある保育園・こども園・小学校・中学校の4校園の「寄島学園コミュニティ・スクール」として保こ小連携活動及び小中一貫教育推進している。

図 14 寄島学園の運営体制図



(寄島小学校作成)

図 14 寄島学園の運営体制図



(寄島小学校作成)

・ 解像度の高い図へと変更

② 学校運営協議会の下部組織として、「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」の3部会を設け、よりしま地域学校協働本部と連携・協働した活動を行っている。

③ 学校運営協議会と連動した学校組織体制づくりを編成している。組織体制については、小学校内に全教職員による4つのプロジェクトチーム(学び・心と体・絆・ワークスタイル)を設置し、その内「学び」「心と体」「絆」の3チームが寄島学園コミュニティ・スクールの下部組織である3つの部会「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」と連動するように構築することで、学校経営と学校運営協議会との連動が進むような仕掛けづくりを行っている。

図 15 寄島学園コミュニティ・スクールと連動した組織体制



(寄島小学校作成)

オ 「寄島っ子の未来を考えるワークショップ」(熟議)の開催

学校と地域が思いや目標を共有し、地域みんなで子どもを育てていくために、保育園・こども園・小学校・中学校の教職員、PTAや地域住民、児童生徒の代表が参画し、熟議を行った。テーマについては次のとおり。

- 1回目「育てたい子どもの姿(なりたい大人の姿)」について
- 2回目「「よりしま学」の開発へ向けて」について
- 3回目「寄島っ子のできている非認知能力」について

② 学校運営協議会の実動組織として、「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」の3部会を設け、よりしま地域学校協働本部と連携・協働した活動を行っている。

③ 学校運営協議会の下部組織として、学校運営協議会と連動した学校組織体制づくりを編成している。組織体制については、小学校内に全教職員による4つのプロジェクトチーム(学び・心と体・絆・ワークスタイル)を設置し、その内「学び」「心と体」「絆」の3チームが寄島学園コミュニティ・スクールの下部組織である3つの部会「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」と連動するように構築することで学校経営と学校運営協議会との連動が進むような仕掛けづくりを行っている。

図 15 寄島学園コミュニティ・スクールと連動した組織体制



(寄島小学校作成)

【「寄島っ子の未来を考えるワークショップ」(熟議)の開催】

保育園・こども園・小学校・中学校の教職員、PTAや地域住民、児童生徒の代表が参画し、熟議を行った。テーマについては次のとおり。

- 1回目「育てたい子どもの姿(なりたい大人の姿)」について
- 2回目「「よりしま学」の開発へ向けて」について
- 3回目「寄島っ子のできている非認知能力」について

・表記を修正

・解像度の高い図へと変更した。

・表記を統一した。
・熟議について理解がしやすいように表記を追加した。

「できるようになってほしい非認知能力」について

カ 非認知能力の育成

活動の実施に当たり、教職員の校内研修で、子どもが自身の良さに気づき、前向きに取り組むための行動指標（別紙資料編参照）を作成した。また、前出のワークショップの中でも非認知能力について扱い、地域住民も非認知能力について学んだ。ワークショップで共有した内容については、整理してCS通信で全保護者や地域住民に発信した。

キ よりしまみつけ隊の取組

教育課程内の取組である「よりしま学」をきっかけとして、地域学校協働活動を通じて更に地域での学びを深めるために、令和3年7月に地域学校協働本部が中心となり、「よりしま！みつけ隊」を設立し、地域の大人のサポートにより放課後や休日に子どもたちの自発性を尊重した地域貢献活動を行っている。小・中学生の希望者15人程度と地域住民（地域学校協働活動関係者）で構成されている。

設立当初は、「遊び」「体験」「物づくり」の3グループでスタートし、「サッカー」「シーカヤック」「自由工作」等を楽しんだ。

1回目の活動を受けて、井原市内の中学生と高校生の希望者で構成されたグループ「Team 夢源」（「ふるさと井原をベースに「自分たち」も「ふるさと」も魅力的な「ひと」や「まち」になるような活動）を行う）のメンバーを招いて、活動の様子や活動に対する思いを聞いたり、ワークショップを行ったりした。ワークショップが刺激となり、参加した子どもや大人には、次のような新たな活動が生まれてきている。

- ・ 寄島の魅力をカレンダーにして公共施設へ寄贈した。（商品化も検討）
- ・ 寄島の魅力を発信する動画「よりしま散歩」を作成中
- ・ 保育園・子ども園との交流活動を計画中
- ・ 地域イベントの開催を計画中
- ・ ものづくりを行い、地域のお年寄りへプレゼントし、一部を商品化して販売することを計画中

ク 結果（浅口市立寄島小学校長への聞き取りより）

○活動が自己肯定感に及ぼす効果のアンケート調査及びその分析を行い、次のとおりの結果であった。

「できるようになってほしい非認知能力」について

【成果と課題】（浅口市立寄島小学校長への聞き取りより）

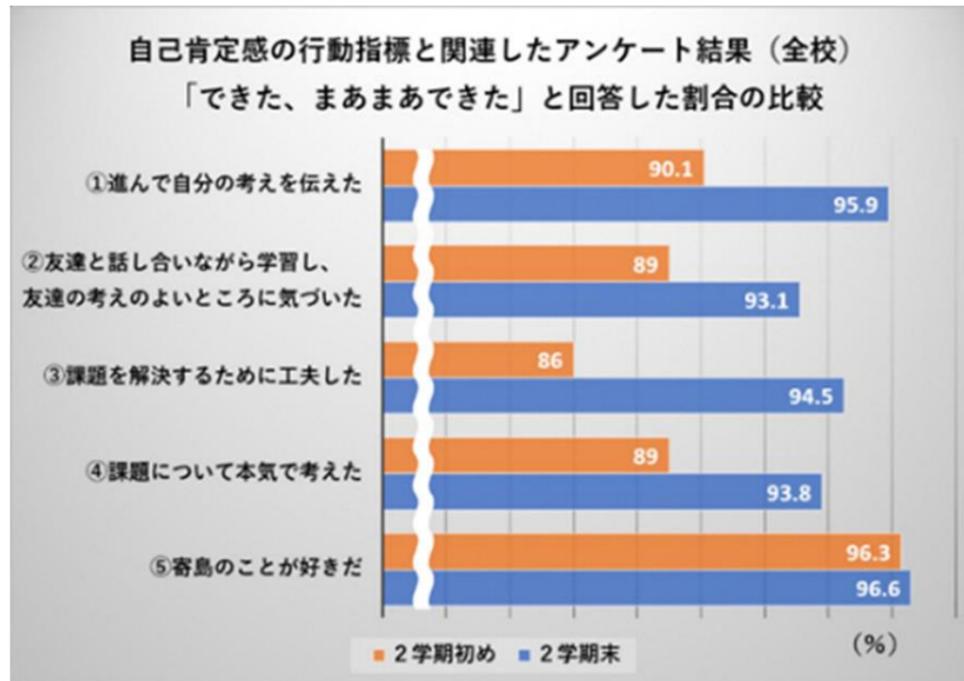
○活動の実施に当たり、校内研修で教職員のワークショップを行い、子どもが自身の良さに気づき、前向きに取り組むための行動指標を作成した。活動が自己肯定感に及ぼす効果の見取りを行い、次のとおりの結果であった。

・笠岡東の事例に合わせて、非認知能力についての記載を追加した

・教育課程外のよりしま見つけ隊については、教育課程内のことと分けて、わかりやすくした。

・表記を統一した。
・他の学校の記載と統一して結果とした。
・結果の前にこのことについて触れられていなかったため、前項に「カ 非認知

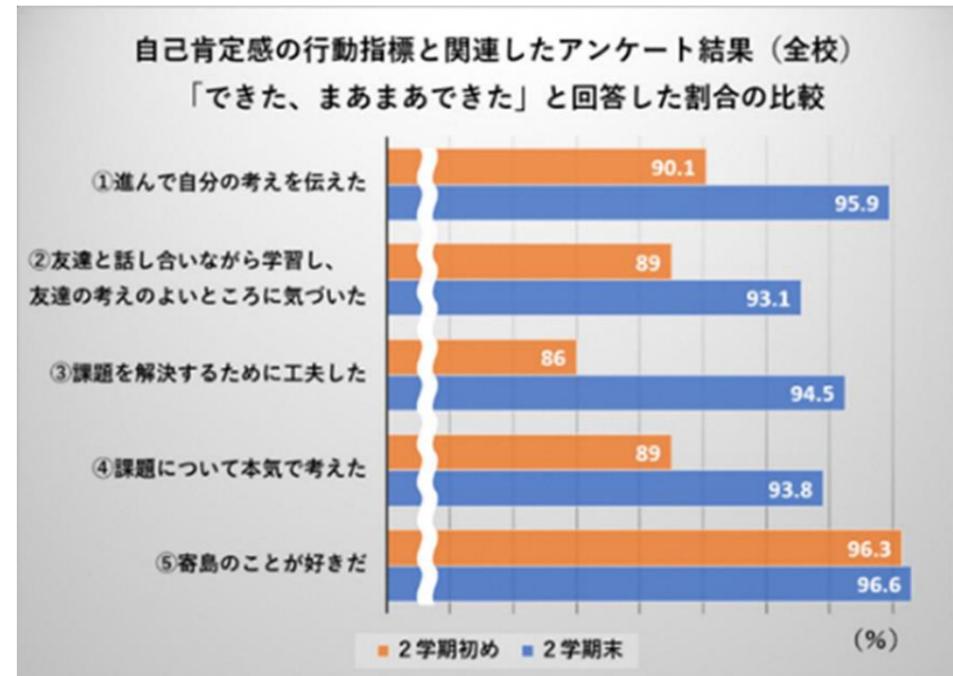
図 16 自己肯定感の行動指標と関連したアンケート結果（全校）



（寄島小学校作成）

- 地域に開かれた教育課程「よりしま学」を通して、地域の方とともに、地域の教育資源「ひと・もの・こと」を学ぶことや、授業の中で「寄島小の自己肯定感」の意識づけを行う取組等が、子どもの学習意欲や主体的な学びへつながる一助となった。
- 5歳児から中学3年生までが同じテーマで系統的に学習を行うことで、学びの連続性を確保した。
- 子どもの発達段階に応じて、身近な教育資源を活用した指導計画を作成し、地域の方とともに地域を探究する活動を行うことにより、子どもがホンモノ体験や直接体験を行うことができた。
- 寄島町に暮らす小学生・中学生・高校生の希望者で「よりしま！みつけ隊」を結成し、「自分たちの力で実現すること」をモットーに、寄島を楽しみ、寄島の魅力を伝える活動（教育課程外）を自分たちで企画・交渉・準備・運営等を行うことにより、自己肯定感や地域への愛着心、コミュニケーション力等を育むことができた。
- 「よりしま！みつけ隊」での寄島の魅力を発信する活動を通じて、小学4年生から高校生までの子どもたちに新たなつながりが生まれるとともに、それを地域の大人がサポートすることで、新たに地域の緩やかなネットワークが構築された。
- 教職員や学校運営協議会委員の目的意識及び当事者意識に差があることから、関係者の意識を向上させていく必要がある。

図 16 自己肯定感の行動指標と関連したアンケート結果（全校）



（寄島小学校作成）

- 地域に開かれた教育課程「よりしま学」を通して、地域の方とともに、地域の教育資源「ひと・もの・こと」を学ぶことや、授業の中で「寄島小の自己肯定感」の意識づけを行う取組等が、子どもの学習意欲や主体的な学びへつながる一助となった。
- 5歳児から中学3年生までが同じテーマで系統的に学習を行うことで、学びの連続性を確保した。
- 子どもの発達段階に応じて、身近な教育資源を活用した指導計画を作成し、地域の方とともに地域を探究する活動を行うことにより、子どもがホンモノ体験や直接体験を行うことができた。
- 寄島町に暮らす小学生・中学生・高校生の希望者で「よりしま！みつけ隊」を結成し、「自分たちの力で実現すること」をモットーに、寄島を楽しみ、寄島の魅力を伝える活動（教育課程外）を自分たちで企画・交渉・準備・運営等を行うことにより、自己肯定感や地域への愛着心、コミュニケーション力等を育むことができた。
- 「よりしま！みつけ隊」での寄島の魅力を発信する活動を通じて、小学4年生から高校生までの子どもたちに新たなつながりが生まれるとともに、それを地域の大人がサポートすることで、新たに地域の緩やかなネットワークが構築された。
- 教職員や学校運営協議会委員の目的意識及び当事者意識に差があることから、関係者の意識を向上させていく必要がある。

能力の育成」として追加し、結果よりは削除した。
・「見取り」という表現をわかりやすく修正した。

- 学校運営協議会や熟議が形式的な会議とならないように、課題解決へ向け、会議運営の工夫をすることで、学校と地域がともに連携・協働の効果を実感し、持続可能な取組としていく必要がある。
- 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等が高齢化し、世代交代が進んでいない状況もあり、保護者をはじめ、幅広い世代の地域の方が参画しやすい地域学校協働活動を考える必要がある。

ケ 取組の検証

① 仮説1に対する検証

〈成果〉

- ・ 「学校運営協議会」や「寄島っ子の未来を考えるワークショップ（熟議）」を通じて、地域住民と教職員、PTA、児童生徒の代表が、「育みたい子ども像（なりたい大人像）」や「育みたい非認知能力」等を共有し、目標を一致させたことで、地域ぐるみで、寄島の魅力を生かした活動を展開することができた。
- ・ 子どもにとって、地域の身近な教育資源をもとに、地域住民等とともに地域を探究したり、直接体験をしたりする活動は、子どもの意欲や主体性を育むために有効である。
- ・ 「よりしま学」を通じて子どもの意欲や主体性を育むために、行動指標を作成し、子どもにも示したことで、子どもが自身の良さや成長に気づき、意欲的に活動に取り組むことができた。
- ・ 子どもたちの自発性を尊重した活動を行う場合、子どもが具体的な活動内容や活動のゴールイメージを持つことが難しいため、先進的に活動している団体等と連携して事例を聞いたり、ワークショップを開催したりすることは有効である。
- ・ 学校運営協議会の組織と校内教職員の体制を連動させ、目標を共有したことで、学校と地域が効果的に連携・協働し、子どもに豊かな体験活動を提供したり、学校の課題解決への一助となったりした。

〈課題〉

- ・ コロナ禍で、学校から地域への活動成果の発信がオンラインとなったため、次の活動へ結び付いていない状況である。感染状況を踏まえながらも、次の活動へ結び付け、取組を進めていく工夫をする必要がある。
- ・ 多様な人材が参加する熟議等を行い、協働活動が展開されているが、マンネリ化を防ぎつつ持続可能な取組としていくためには、学校づくりと地域づくりの両方の視点を入れた熟議を行うなど、工夫していく必要がある。

② 仮説2に対する検証

- 学校運営協議会や熟議が形式的な会議とならないように、課題解決へ向けての会議運営の工夫をすることで、学校と地域がともに連携の効果を実感し、持続可能な取組としていく必要がある。
- 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等が高齢化や世代交代が進んでいない状況もあり、保護者をはじめ、幅広い世代の地域の方が参画しやすい地域学校協働活動を考える必要がある。

【取組の検証】

① 仮説1に対する検証

〈成果〉

- ・ 「学校運営協議会」や「寄島っ子の未来を考えるワークショップ（熟議）」を通じて、地域住民と教職員、PTA、児童の代表が、「育みたい子ども像（なりたい大人像）」や「育みたい非認知能力」等を共有し、目標を一致させたことで、地域ぐるみで、寄島の魅力を生かした活動を展開することができた。
- ・ 子どもにとって、地域の身近な教育資源をもとに、地域住民等とともに地域を探究したり、直接体験をしたりする活動は、子どもの意欲や主体性を育むために有効である。
- ・ 「よりしま学」を通じて子どもの意欲や主体性を育むために、行動指標を作成し、子どもにも示したことで、子どもが自身の良さや成長に気づき、意欲的に活動に取り組むことができた。
- ・ 子どもたちの自発性を尊重した活動を行う場合、子どもが具体的な活動内容や活動のゴールイメージを持つことが難しいため、先進的に活動している団体等と連携して事例を聞いたり、ワークショップを開催したりすることは有効である。
- ・ 学校運営協議会の組織やコミュニティ・スクール目標と教職員で構成される校内体制や目標を連動させたことで、学校と地域が同じ目標に向かって、子どもの体験活動を支援することができた。

〈課題〉

- ・ コロナ禍で、学校から地域への活動成果の発信がオンラインとなったため、次の活動へ結びついていない状況である。感染状況を踏まえながらも、次の活動へ結びつけ、取組を進めていく必要がある。
- ・ 多様な人材が参加する熟議等を行い、協働活動が展開されているが、マンネリ化を防ぎつつ持続可能な取組としていくためには、学校づくりと地域づくりの両方の視点を入れた熟議を行うなど、工夫していく必要がある。

② 仮説2に対する検証

- ・ 表記を統一した
- ・ 表現を修正した。
- ・ 表記のミスを修正した。
- ・ 表記を修正した。
- ・ 表記を統一した。
- ・ 表記をわかりやすくした。
- ・ 表記を統一した
- ・ 表現を修正した。

〈成 果〉

- ・ 子どもを核とした活動に関わることで、新たな大人同士のつながりや子どもとのよりよい関係を作ることができ、生きがいややりがいへとつながる。
- ・ 地域学校協働本部の活動や「よりしま！みつけ隊」において、地域の多くの大人が関わり、子どもの活動をサポートした。そのことを通じて、地域に新しい緩やかなネットワークが構築された。

〈課 題〉

- ・ 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等、学校と地域が連携・協働した活動に関わる方が多くが高齢者で、保護者世代の地域の活動を通じたつながりづくりや大人の学びへと発展しにくい状況にあるため、地域学校協働活動にPTA等を含めた幅広い世代の参画の工夫が求められる。

(3)真庭市立八束小学校

ア 概要

全校児童を対象に、「八束の宝を学ぶ」をテーマとして、八束小学校区(蒜山)の文化や歴史、酪農業などについて、各分野で活躍する地域の専門家を招き、「聞く」「見る」「触れる」等の本物を体験する学習を行った。

イ 目的

- ・ 児童が、学区の素晴らしさを改めて実感し、地域への愛着を深める機会とする。
- ・ 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、児童・地域住民・保護者・教職員がともに学ぶ機会とする。

ウ 主な活動内容

① 八束の宝を学ぶ(総合的な学習の時間で実施)

外部講師を招いた学習は、参観日に合わせて実施し、保護者も一緒に学ぶ機会を設けることで、大人も子どもも地域への関心を深めた。

各学年の学習テーマ

学年	テーマ	活動に関わった地域の専門家
1年生	ジャージー牛について	蒜山イキイキ酪協議会 真庭家畜保健衛生所
2年生	蒜山の生き物・自然について	津黒いきものふれあいの里

〈成 果〉

- ・ 子どもを核とした活動に関わることは、新たな大人同士のつながりや子どもとのよりよい関係ができ、生きがいややりがいへとつながる。
- ・ 「よりしまみつけ隊」の活動を地域学校協働本部の活動として、地域の多くの大人が関わり子どもの活動をサポートすることを通じて、地域に新しい緩やかなネットワークが構築された。

〈課 題〉

- ・ 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等、学校と地域が連携した活動に関わる方が多くが高齢者で、保護者世代の地域の活動を通じたつながりづくりや大人の学びへと発展しにくい状況にあるため、地域学校協働活動にPTA等を含めた幅広い世代の参画の工夫が求められる。

(3)真庭市立八束小学校

【概要】

全校児童を対象に、「八束の宝を学ぶ」をテーマとして、八束小学校区(蒜山)の文化や歴史、酪農業などについて、各分野で活躍する地域の専門家を招き、「聞く」「見る」「触れる」等の本物を体験する学習を行った。

【目的】

- ・ 児童が、学区の素晴らしさを改めて実感し、地域への愛着を深める機会とする。
- ・ 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、児童・地域住民・保護者・教職員がともに学ぶ機会とする。

【主な活動内容】

① 八束の宝を学ぶ(総合的な学習の時間で実施)

外部講師を招いた学習は、参観日に合わせて実施し、保護者も一緒に学ぶ機会を深めた。

各学年の学習テーマ

学年	テーマ	活動に関わった地域の専門家
1年生	ジャージー牛について	蒜山イキイキ酪協議会 真庭家畜保健衛生所
2年生	蒜山の生き物・自然について	津黒いきものふれあいの里

・ 表記を修正した

・ 表記を修正した。

・ 表記を統一した。

・ 表記を統一した。

・ 表記を統一した。

・ 表記を統一した。

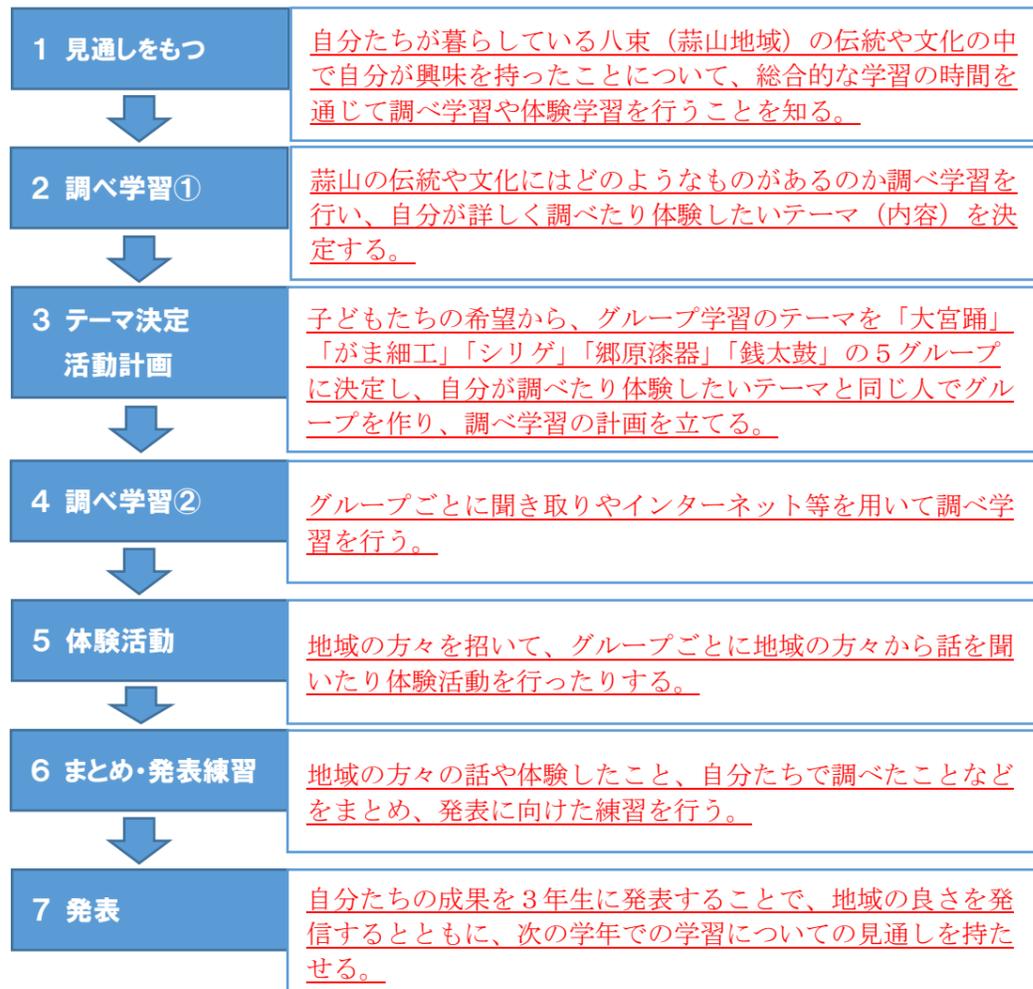
・ 内容を詳しくした。

3年生	蒜山の農業について	J A晴れの国岡山
4年生	ジビエについて	蒜山振興局 農業振興課
5年生	八束の食文化について	龍泉
6年生	八束の歴史について	蒜山郷土博物館

②「蒜山の伝統文化」を学ぶ（4年生）の取組

総合的な学習の時間に地域の方を招いて、蒜山の伝統文化「大宮踊」、「がま細工」、「シリゲ」、「郷原漆器」、「銭太鼓」の5グループに分かれて、調べ学習や体験学習を行い、学んだことをグループごとにまとめた。

エ 学習の流れ（全23時間）



③「シリゲ教室」（5・6年生）

蒜山地区に伝わる国指定重要無形民俗文化財である「大宮踊」の伝承活

3年生	蒜山の農業について	J A晴れの国岡山
4年生	ジビエについて	蒜山振興局 農業振興課
5年生	八束の食文化について	ホテル龍泉閣
6年生	八束の歴史について	蒜山郷土博物館

② 八束の宝に関連した取組

ア シリゲ教室（5・6年生）

蒜山地区に伝わる国指定重要無形民俗文化財である「大宮踊」の伝承

・八束小より修正

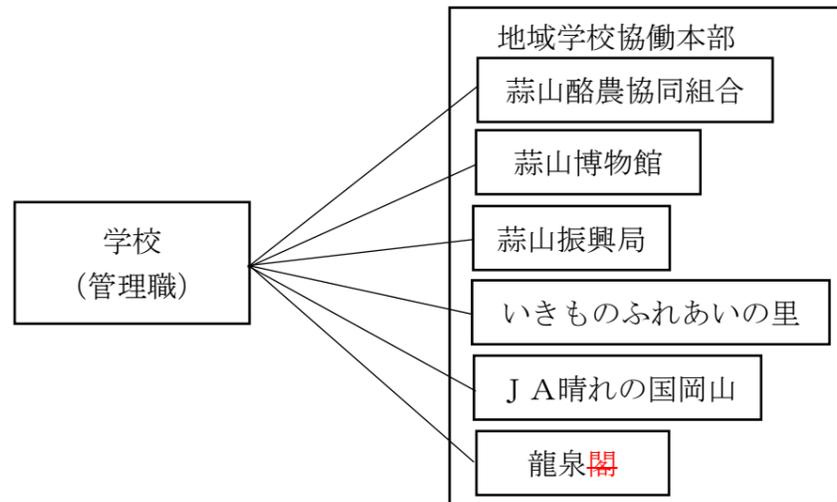
・プロジェクト的な学習を行っている4年生の取組を取り上げた。

・他の事例に合わせて、学習の流れを記載した。

・表記を統一した。

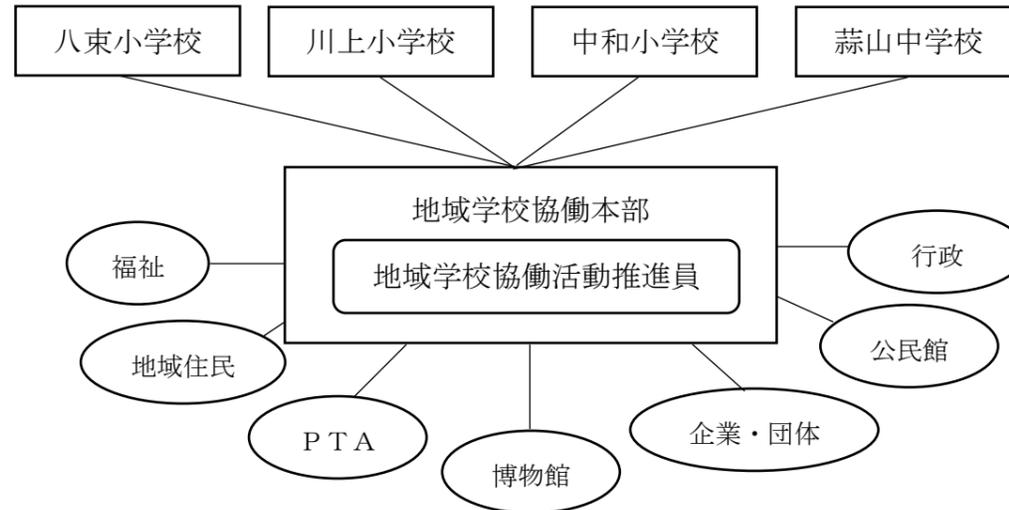
<p>動のひとつとして、「大宮踊」の際に灯籠の下に飾られる切り絵である「シリゲ」を、地域住民に教わりながら制作した。完成した作品は地域のコンクールに出品した。</p> <p>④「トウモロコシ博士に学ぶ」(3年生)</p> <p>「蒜山の農業」学習のひとつとして、蒜山の特産物であるトウモロコシの育つ仕組みや栽培の苦勞などについて農家の方から学んだ。トウモロコシの皮むき体験、穂についている虫を観察するなど実物に触れたり、匂いを嗅いだりした。</p> <p>⑤「親子防災ワークショップ」(全校児童：親子でともに学ぶ取組)</p> <p><u>年間3回の土曜日授業を活用し、PTA研修育成部が中心となって、消防士や消防団員、防災士、市役所職員などの地域の外部講師を招き、親子で防災について学ぶワークショップを開催した。全校児童を通学班ごとの12グループに分け、「防災について学ぶ時間」と「防災グッズの作成や防災体験の時間」の2部構成で実施した。内容は次のとおりである。</u></p> <p><u>第1部「防災について学ぶ時間」(講話とクイズ)</u></p> <p><u>・火事と地震のお話 ・消防団の活動について ・防災クイズ</u></p> <p><u>第2部「防災グッズの作成や防災体験の時間」</u> <u>(3つのブースを回る形式で実施)</u></p> <p><u>・煙中体験 (図工室に機材を持ち込み煙の中を歩く体験)</u> <u>・防災ボトル作り (エマージェンシーボトルの中に自分が必要だと思う防災グッズを選んで詰める体験)</u> <u>・我が家のルールづくり (保護者と一緒に災害時のルールについて考える。)</u></p> <p>オ 運営体制</p> <p>① 地域学校協働本部を活用し、学校と地域が連携した活動を実施している。</p>	<p>活動のひとつとして、「大宮踊」の際に灯籠の下に飾られる切り絵である「シリゲ」を、地域住民に教わりながら制作した。完成した作品は地域のコンクールに出品した。</p> <p>イ 蒜山の伝統文化(4年生)</p> <p>・総合的な学習の時間に地域の方を招いて、蒜山の伝統文化「大宮踊」、「がま細工」、「シリゲ」、「郷原漆器」、「銭太鼓」の5グループに分かれて、調べ学習や体験学習を行い、学んだことをグループごとにまとめた。</p> <p>ウ トウモロコシ博士に学ぶ(3年生)</p> <p>・「蒜山の農業」学習のひとつとして、蒜山の特産物であるトウモロコシの育つ仕組みや栽培の苦勞などについて農家の方から学んだ。トウモロコシの皮むき体験、穂についている虫を観察するなど実物に触れたり、匂いを嗅いだりした。</p> <p>③ 親子でともに学ぶ取組について</p> <p>○ 親子防災ワークショップ</p> <p>・PTAと連携し、地域の外部講師を招き、親子で防災について学ぶワークショップを開催した。全校児童を通学班ごとのグループに分け、「防災について学ぶ時間」と「防災グッズの作成や防災体験の時間」の2部構成で実施した。</p> <p>【運営体制】</p> <p>① 地域学校協働本部を活用し、学校と地域が連携した活動を実施している。</p>	<p>・上で詳しく取り上げたため削除した。</p> <p>・表記を統一した。</p> <p>・防災ワークショップしか親子でともに学ぶ取組がないため、統合して表記した。</p> <p>・内容について詳しくした。</p> <p>・表記を統一した。</p>
--	--	---

② 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、学校と専門家等が直接行った。

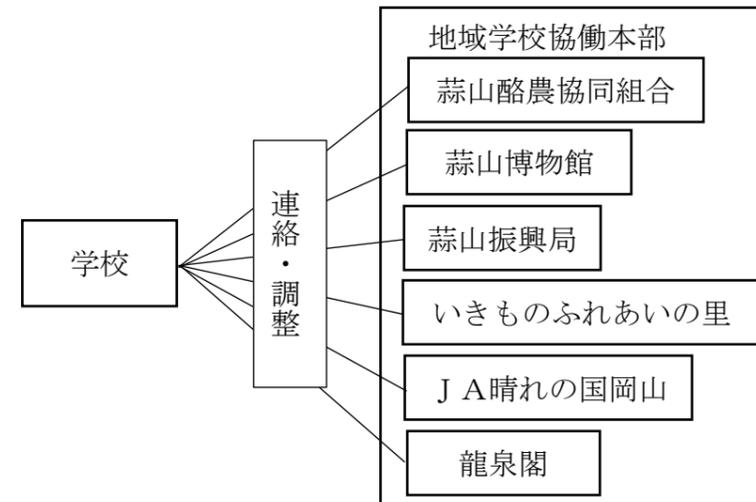


カ 結果 (真庭市立八束小学校長への聞き取りより)

- 本物体験による具体物との出会い（実物を見たり触れたりする）により、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることができた。
- 防災ワークショップでは、PTAと連携し、保護者とともに活動を展開できたことで、それぞれの実際の生活について親子で振り返りながら主体的に考えることにつながり、防災意識が高まった。
- 「八束の宝を学ぶ」に関わることで、自分たち大人も知らなかったことを学べたり、新たな発見があったりした。
- 活動を通じて子どもと関わることで、子どもたちから活力をもらい、元気になった。
- 大人が子どもと一緒に体験活動をしたり、学習を支援したりすることを通じて、自分たちの脳の活性化につながった。



② 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、学校と専門家等が直接行った。



【成果と課題】 (真庭市立八束小学校長への聞き取りより)

- 本物体験による具体物との出会い（実物を見たり触れたりする）により、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることができた。
- 防災ワークショップでは、PTAと連携し、保護者とともに活動を展開できたことで、それぞれの実際の生活について親子で振り返りながら主体的に考えることにつながり、防災意識が高まった。
- 「八束の宝を学ぶ」に関わることで、自分たち大人も知らなかったことを学べたり、新たな発見があったりした。
- 活動を通じて子どもと関わることで、子どもたちから活力をもらい、元気になった。
- 大人が子どもと一緒に体験活動をしたり、学習を支援したりすることを通じて、自分たちの脳の活性化につながった。

・今回取り上げていない他の学校名があり、混乱を招くので、図を削除。

・表記を修正した

・表記を統一した。

- 活動を通じて地域の子どもたちに八束の魅力を伝えることができた。また、他業種で働く方ともいろいろと情報交換等ができ、大人同士の新たなつながりが広がった。
- 子どもと共に学ぶことで、共通の話題ができ、家庭での話題が増えた。
- 様々な児童がいる中で、どのように児童に接したらよいか難しさを感じる地域の方もいる。
- 教職員と地域の方との活動内容等の打合せ時間の確保が難しい。
- コロナ禍で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。幅広い地域住民の参画を得て、地域に開かれた活動にしていくためには、来年度導入予定の学校運営協議会を有効に活用し、熟議等を通じて学校と地域の目的等を共有していく仕組みを整えていく必要がある。

キ 取組の検証

① 仮説1に対する検証

〈成果〉

- ・ 地域の特色について、実際に働いている人などから話を聞いたり、実物に触れたりすることは、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることにつながる。
- ・ 防災ワークショップでの保護者と一緒に行う体験活動やワークショップは、その時の学びや気づきに加え、家庭での振り返り等にもつながり、親子で実生活での防災について積極的に考えられた。

〈課題〉

- ・ コロナ禍の状況で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。子どもたちの興味・関心をきっかけとして、学校と地域と連携・協働したプロジェクト学習を展開することで、さらに学びが深まり、子どもたちの意欲や主体性を高めることにつながることを期待できる。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、学校が窓口となり専門家等と直接行っている。より活動を充実させていくためには、事前に学校と地域が目的の共有を行った後、地域側の人材である地域学校協働活動推進員等が中心となって人やものをつなぎコーディネートしていくことが望まれる。

② 仮説2に対する検証

〈成果〉

- 活動を通じて地域の子どもたちに八束の魅力を伝えることができた。また、他業種で働く方ともいろいろと情報交換等ができ、大人同士の新たなつながりが広がった。
- 子どもと共に学ぶことで、共通の話題ができ、家庭での話題が増えた。
- 様々な児童がいる中で、どのように児童に接したらよいか難しさを感じる地域の方もいる。
- 教職員と地域の方との活動内容等の打合せ時間の確保が難しい。
- コロナ禍で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。幅広い地域住民の参画を得て、地域に開かれた活動にしていくためには、来年度導入予定の学校運営協議会を有効に活用し、熟議等を通じて学校と地域共通の目的等を共有していく仕組みを整えていく必要がある。

【取組の検証】

① 仮説1に対する検証

〈成果〉

- ・ 地域の特色について、実際に働いている人などから話を聞いたり、実物に触れたりすることは、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることにつながる。
- ・ 防災ワークショップでの保護者と一緒に行う体験活動やワークショップは、その時の学びや気づきに加え、家庭での振り返り等にもつながり、親子で実生活での防災について積極的に考えられた。

〈課題〉

- ・ コロナ禍の状況で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。子どもたちの興味・関心をきっかけとして、学校と地域と連携・協働したプロジェクト学習を展開することで、さらに学びが深まり、子どもたちの意欲や主体性を高めることにつながることを期待できる。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、学校が専門家等と直接行ったため、学校の負担が大きかったと思われる。活動を充実させ、持続可能なものとしていくためには、事前に学校と地域が目的の共有を行った後、地域側の人材である地域学校協働活動推進員等が中心となって人やものをつなぎコーディネートしていくことが望まれる。

② 仮説2に対する検証

〈成果〉

・ わかりにくい表記を修正した。

・ 表記を統一した。

・ 表記を修正した。

- ・ 地域の特色を学ぶ活動を通じて、大人も知らなかった発見や新たな気づきがあった。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」や「防災ワークショップ」では、参観日等、保護者も集まる機会を利用し、子どもとともに保護者も学ぶことで、その場での新たな気づきと家庭で子どもと振り返ることでの親子での成長などが期待できる。
- ・ 学校と地域が連携した活動を通じて子どもに関わることで、子どもから活力をもらい元気になるなど、生きがいつくりにつながった。
- ・ 子どもを核とした学校と地域が連携した活動を通じて、大人同士や大人と子どもの新たなつながりづくりのきっかけとなった。

〈課 題〉

- ・ 対象の大人が保護者や地域の専門家に限定されており、幅広い地域の住民の学びにつながるよう、運営体制を更に検討する必要がある。

2 教育課程外

(1)玉野市地域子ども楽級

ア 概要

多くの地域住民の参画による、放課後や休日において、子どもが自主的にアクセスしやすい公民館や学校等の施設を活用し、各種体験教室や交流活動、学習支援を行う「放課後子ども教室事業」。玉野市内の全14小学校区で行われている。

地域学校協働活動推進員等が中心となり、休日や放課後に体験活動や交流活動等を行う「子ども楽級」と、学習アドバイザーが中心となり、放課後に学習支援を行う「おさらい会」があり、どちらも各代表を中心に地域住民が運営する。

地域資源を活用しながら、学校や家庭では体験できない、地域に根ざした取組や活動を行っている。

イ 目的

地域ぐるみで豊かな体験活動や交流活動等を行うことにより、「心豊かでたくましい子ども」、「地域に誇りをもつ子ども」を育むとともに、放課後や休日の子どもの居場所づくりに努める。

ウ 主な活動内容

伝統文化	調理	スポーツ	図画工作
交流	科学	放課後学習支援（おさらい会）	

- ・ 地域の特色を学ぶ活動を通じて、大人も知らなかった発見や新たな気づきがあった。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」や「防災ワークショップ」では、参観日等、保護者も集まる機会を利用し、子どもとともに保護者も学ぶことで、その場での新たな気づきと家庭で子どもと振り返ることでの親子での成長などが期待できる。
- ・ 学校と地域が連携した活動を通じて子どもに関わることで、子どもから活力をもらい元気になるなど、生きがいつくりにつながった。
- ・ 子どもを核とした学校と地域が連携した活動を通じて、大人同士や大人と子どもの新たなつながりづくりのきっかけとなった。

〈課 題〉

- ・ 対象の大人が保護者や地域の専門家に限定されており、幅広い地域の住民の学びにつながるよう、運営体制を更に検討する必要がある。

2 教育課程外

玉野市地域子ども楽級

【概要】

多くの地域住民の参画による、放課後や休日において公民館や学校等の施設を活用し、各種体験教室や交流活動、学習支援を行う「放課後子ども教室事業」。玉野市内の全14小学校区で行われる。

地域学校協働活動推進員等が中心となり、休日や放課後に体験活動や交流活動等を行う「子ども楽級」と、学習アドバイザーが中心となり、放課後に学習支援を行う「おさらい会」があり、どちらも各代表を中心に地域住民が運営する。

地域資源を活用しながら、学校や家庭では体験できない、地域に根ざした取組や活動を行っている。

【目的】

・ 地域ぐるみで豊かな体験活動や交流活動等を行うことにより、「心豊かでたくましい子ども」、「地域に誇りをもつ子ども」を育むとともに、放課後や休日の子どもの居場所づくりに努める。

【主な活動内容】

伝統文化	調理	スポーツ	図画工作
交流	科学	放課後学習支援（おさらい会）	

・「子どもが自主的に参加しやすい」と公民館等の社会教育施設で教育課程外で行う意義を強調するため、追記した。

・第7回専門部会の平井委員の意見を受けて修正

・表記を統一した。

① 活動例

ホットドック作り (調理)	「ひび子ども楽級」 コッペパンにソーセージやチーズ、キャベツを挟み、アルミホイルに包み牛乳パックに入れて焼く方法で、ホットドック作りを行った。
ダンスをしよう♪ (スポーツ、交流)	「ちっこう子ども楽級」 玉野高校ダンス部員を講師としてダンス教室を実施。参加した小学生は汗だくになりながら、笑顔でダンスを楽しんだ。
茶道教室 (伝統文化)	「たい子ども楽級」 池田宗政公の茶道流派である「備前御家流」を継承したいという思いから、正式な茶道道具を使い、年間を通じた学習をしている。学習のまとめとして、地域の方を招き、お茶席でお手前を披露した。

② 学校と連携した活動

たい子ども楽級	「学校では夜間に子どもを集めて星を観察することが難しい」という学校からの相談を受けた地域学校協働活動推進員がコーディネートし、4年生理科の学習内容に関連した「星空観察会」を実施した。
ひび子ども楽級	<u>子ども楽級の代表者が学校運営協議会の委員でもあるため、学校の教育活動について会議を通じて共有し</u> 、総合的な学習の時間に行った福祉学習の内容と関連させた「障害者スポーツ体験会」(車椅子バスケット)を実施した。
<u>ちっこう子ども楽級</u> <u>ほか</u>	運動会の開催時期に合わせて、「走り方教室」を実施した。

エ 運営体制

- ① 「地域の子どもは地域で育てる」をテーマに各地域の「子ども楽級」及び「おさらい会」の代表を中心とした地域住民によって運営されている。
- ② 各子ども楽級には事務局として公民館が参画し、地域学校協働活動推進員等のコーディネートのもと、子ども楽級と公民館が協働した活動が行われている。
- ③ 学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流などが行われている。

① 活動例

ホットドック作り (調理)	「ひび子ども楽級」 コッペパンにソーセージやチーズ、キャベツを挟み、アルミホイルに包み牛乳パックに入れて焼く方法で、ホットドック作りを行った。
ダンスをしよう♪ (スポーツ、交流)	「ちっこう子ども楽級」 玉野高校ダンス部員を講師としてダンス教室を実施。参加した小学生は汗だくになりながら、笑顔でダンスを楽しんだ。
茶道教室 (伝統文化)	「たい子ども楽級」 池田宗政公の茶道流派である「備前御家流」を継承したいという思いから、正式な茶道道具を使い、年間を通じた学習をしている。学習のまとめとして、地域の方を招き、お茶席でお手前を披露した。

② 学校と連携した活動

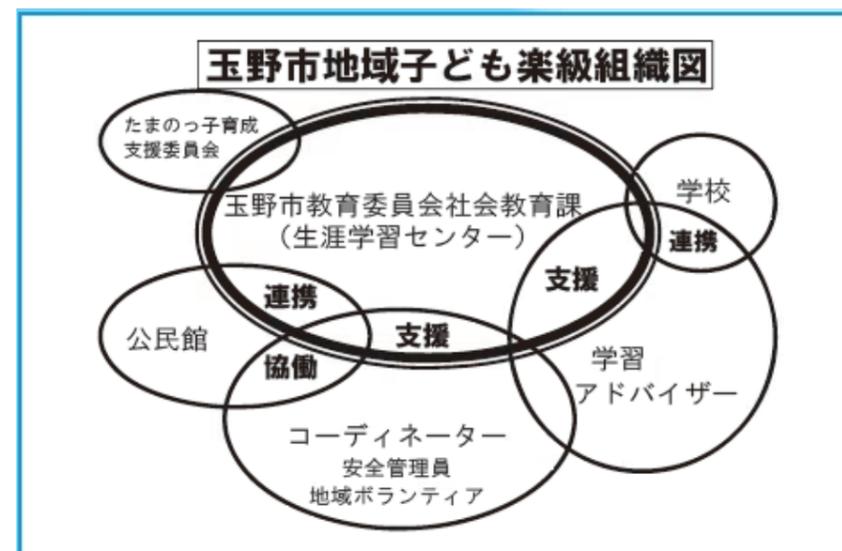
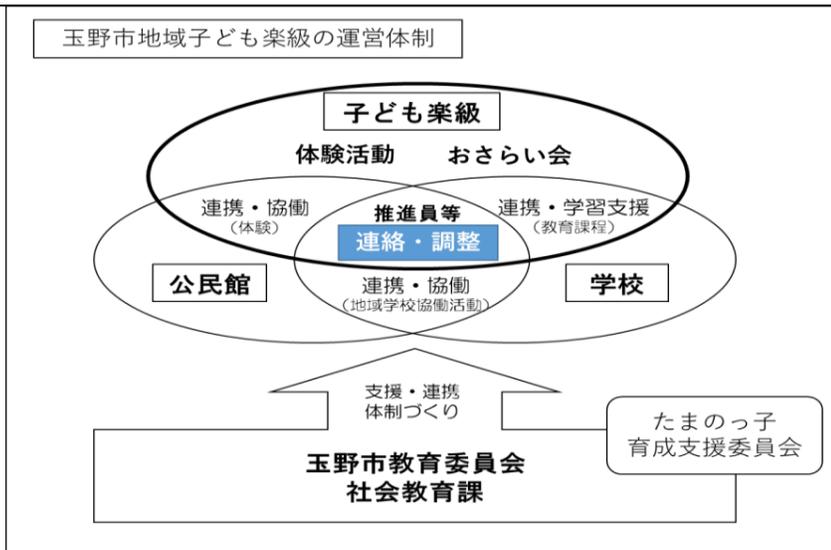
たい子ども楽級	「学校では夜間に子どもを集めて星を観察することが難しい」という学校からの相談を受けた地域学校協働活動推進員がコーディネートし、4年生理科の学習内容に関連した「星空観察会」を実施した。
ひび子ども楽級	総合的な学習の時間に行った福祉学習の内容と関連させた「障害者スポーツ体験会」を実施した。
その他	運動会の開催時期に合わせて、「走り方教室」を実施した。

【運営体制】

- ① 「地域の子どもは地域で育てる」をテーマに各地域の「子ども楽級」及び「おさらい会」の代表を中心とした地域住民によって運営されている。
- ② 各子ども楽級には事務局として公民館が参画し、地域学校協働活動推進員等のコーディネートのもと、子ども楽級と公民館が協働した活動が行われている。
- ③ 学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流などが行われている。

- ・たい子ども楽級に合わせ、詳細を追記した。
- ・「その他」ではなく、教室名を表記した。

- ・表記を統一した。



・図を分かりやすいものに変更した。

オ 活動状況（令和2年度実績より）

教室名	1年間の開設日数	1回あたりの子どもの参加人数		小学校の児童数
		平日	休日等	
たい子ども楽級	72日	34人	26人	345人
ちっこう子ども楽級	16日	18人	11人	99人
うの子ども楽級	15日	17人	26人	189人
たま子ども楽級	7日	2人	10人	83人
たまはら子ども楽級	76日	9人	7人	148人
わだ子ども楽級	95日	10人	10人	105人
ひび子ども楽級	55日	11人	12人	108人
しょうない子ども楽級	55日	38人	19人	729人
はちはま子ども楽級	80日	21人	23人	167人
おおさき子ども楽級	19日	5人	22人	96人
やまだ子ども楽級	56日	8人	4人	69人
ごかん子ども楽級	49日	1人	6人	29人
むねあげ子ども楽級	63日	8人	7人	79人
ほこたて子ども楽級	60日	10人	12人	67人

カ 結果（玉野市教育委員会社会教育課担当者への聞き取りより）

- 遊びや物づくり体験、スポーツ、伝統文化、芸術等の活動を通じて、ホンモノを見たり、ホンモノに触れたりし、実感を伴った学びを行うことで、子どもたちの意欲・関心の向上につながっている。地域のものや人、自然との関わりを通じて、地域への愛着形成につながった。
- 時間的な面で教育課程内だけでは実施が難しい発展的学習へとつなぐこ

【活動状況】（令和2年度実績より）

教室名	1年間の開設日数	1回あたりの子どもの参加人数	
		平日	休日等
たい子ども楽級	72日	34人	26人
ちっこう子ども楽級	16日	18人	11人
うの子ども楽級	15日	17人	26人
たま子ども楽級	7日	2人	10人
たまはら子ども楽級	76日	9人	7人
わだ子ども楽級	95日	10人	10人
ひび子ども楽級	55日	11人	12人
しょうない子ども楽級	55日	38人	19人
はちはま子ども楽級	80日	21人	23人
おおさき子ども楽級	19日	5人	22人
やまだ子ども楽級	56日	8人	4人
ごかん子ども楽級	49日	1人	6人
むねあげ子ども楽級	63日	8人	7人
ほこたて子ども楽級	60日	10人	12人

・参加率が分かるように、小学校の児童数を追記した。

【成果と課題】（玉野市教育委員会社会教育課担当者への聞き取りより）

- 遊びや物づくり体験、スポーツ、伝統文化、芸術等の活動を通じて、ホンモノを見たり、ホンモノに触れたりし、実感を伴った学びを行うことで、子どもたちの意欲・関心の向上につながっている。地域のものや人、自然との関わりを通じて、地域への愛着形成につながった。
- 時間的な面で教育課程内だけでは実施が難しい発展的学習へとつなぐことができ、子どもの知的好奇心を満たすことができた。

・表記を統一した。

<p>とができ、子どもの知的好奇心を満たすことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校教育と社会教育が連携することによって、子どもたちの学びがより実感を伴った深いものになった。 ○ 活動に関わった大人のアンケート調査からは、「子どもたちに関わることができて楽しい」、「家の周りには子どもがいなくなったので、活動に参加すると賑やかでうれしい」、「計画を立てるのは大変だが、子どもたちの喜ぶ姿を見るとやりがいを感じる」など、やりがいや生きがいづくりにつながっている感想が多く見られた。 ○ 「活動を続けるうちに、地域の活性化のためにも重要な活動であると感じるようになった」等、子どもたちを核として、「まちづくり」や「ひとづくり」につながっていることを意識している感想も見られた。 ○ 「たい子ども楽級」で行われた地域づくりに関する講座が、公民館の自主講座として開講されるなど、大人を対象とした講座に発展した事例もあった。 ○ 「たまはら子ども楽級」のモニュメントづくりでは、子どもと保護者が協力して木材を切り出すことから体験が始まるが、そこでの保護者同士の交流から、新たなつながりが生まれた。 <ul style="list-style-type: none"> ● 地域人材の後継者不足が大きな課題である。特に、コーディネーター等の中心的な活動を行う地域学校協働活動推進員等の立場は後継者にスムーズに引き継ぐことが難しい。現在は、活動を広く地域住民に知ってもらうため、玉野市の広報誌において随時、募集を行ったり、地域ごとに独自のチラシ等を作成したりし、広報活動に努めている。また、玉野市PTA連合会と連携し、保護者世代の地域学校協働活動への参画を呼びかけている。 ● 子ども楽級の活動について、地域学校協働活動推進員等を通じた学校との連携は一部の子ども楽級に留まっている。学校の働き方改革が叫ばれる中、学校との関わりを躊躇する地域学校協働活動推進員等もいるが、子どもの実感を伴った豊かな学びを実現するためには、学校と子ども楽級が連携した取組を広め、推進していく必要がある。 ● <u>さらに多くの地域住民を巻き込み、豊かな体験活動を充実させていくには、必要な予算を確保する必要がある。</u> <p>キ 事例の検証</p> <p>① 仮説1に対する検証</p> <p>〈成 果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 放課後子ども教室等の地域で放課後や休日に行われている体験活動は、地域の文化や人材を生かした様々な取組が行われている。 ・ 放課後子ども教室の実施場所は地域の公民館や学校の施設を活用していることが多いことから、多くの子どもが参加しやすい状況にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校教育と社会教育が連携することによって、子どもたちの学びがより実感を伴った深いものになった。 ○ 活動に関わった大人のアンケート調査からは、「子どもたちに関わることができて楽しい」、「家の周りには子どもがいなくなったので、活動に参加すると賑やかでうれしい」、「計画を立てるのは大変だが、子どもたちの喜ぶ姿を見るとやりがいを感じる」など、やりがいや生きがいづくりにつながっている感想が多く見られた。 ○ 「活動を続けるうちに、地域の活性化のためにも重要な活動であると感じるようになった」等、子どもたちを核として、「まちづくり」や「ひとづくり」につながっていることを意識している感想も見られた。 ○ 「たい子ども楽級」で行われた地域づくりに関する講座が、公民館の自主講座として開講されるなど、大人を対象とした講座に発展した事例もあった。 ○ 「たまはら子ども楽級」のモニュメントづくりでは、子どもと保護者が協力して木材を切り出すことから体験が始まるが、そこでの保護者同士の交流から、新たなつながりが生まれた。 <ul style="list-style-type: none"> ● 地域人材の後継者不足が大きな課題である。特に、コーディネーター等の中心的な活動を行う地域学校協働活動推進員等の立場は後継者にスムーズに引き継ぐことが難しい。現在は、活動を広く地域住民に知ってもらうため、玉野市の広報誌において随時、募集を行ったり、地域ごとに独自のチラシ等を作成したりし、広報活動に努めている。また、玉野市PTA連合会と連携し、保護者世代の地域学校協働活動への参画を呼びかけている。 ● 子ども楽級の活動について、地域学校協働活動推進員等を通じた学校との連携は一部の子ども楽級に留まっている。学校の働き方改革が叫ばれる中、学校との関わりを躊躇する地域学校協働活動推進員等もいるが、子どもの実感を伴った豊かな学びを実現するためには、学校と子ども楽級が連携した取組を広め、推進していく必要がある。 <p>【事例の検証】</p> <p>① 仮説1に対する検証</p> <p>〈成 果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 放課後子ども教室等の地域で放課後や休日に行われている体験活動は、地域の文化や人材を生かした様々な取組が行われている。 ・ 放課後子ども教室の実施場所は地域の公民館や学校の施設を活用していることが多いことから、多くの子どもが参加しやすい状況にある。 ・ 学校の教育課程内で実施する活動と、地域等で放課後や休日に行う活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予算に関して聞き取りを行い、追記した。 ・ 表記を統一した。
---	---	---

- ・学校の教育課程内で実施する活動と、地域等で放課後や休日に行う活動内容をつなげて発展させることで、子どもにとって、より豊かな体験を提供することができる。
- ・学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流など、様々な関係者等と連携することで、多様な活動を展開することができた。

〈課題〉

- ・放課後子ども教室の取組と学校の教育活動との連携は一部に留まっていることから、地域学校協働活動推進員等や放課後子ども教室関係者が熟議等に参加し、活動の一部を学校の取組と連動させていくことが子どもの体験をより豊かにすることに有効である。
- ・地域の実情等により、放課後子ども教室等による活動日数や参加する子どもの人数に相違があることから、放課後子ども教室等の取組を広く周知するとともに、多くの子どもが参加しやすい環境を整えていく必要がある。

② 仮説2に対する検証

〈成果〉

- ・子どもを育む活動を通じて、大人自身のやりがいや生きがいにつながった。
- ・子ども楽級での講座が大人や地域を巻き込んだ活動へと広がり、新たな学びが生まれた。
- ・子どもを育む活動をきっかけとして、大人と大人、大人と子ども等の新たなつながりが生まれた。また、そこからグループができ新たな活動が生まれることも期待できる。
- ・活動を通じた新たな人間関係の構築や地域での活動への発展等は、地域の活性化にもつながる。

〈課題〉

- ・地域学校協働活動推進員等、活動や人材をコーディネートする人材の後継者が不足していることから、まずは、放課後子ども教室等での活動を広く地域住民に知ってもらい、多くの方が気軽に活動に参加したり、関わったりできる環境づくりが必要である。

内容をつなげて発展させることで、子どもにとって、より豊かな体験を提供することができる。

- ・学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流など、様々な関係者等と連携することで、多様な活動を展開することができた。

〈課題〉

- ・放課後子ども教室の取組と学校の教育活動との連携は一部に留まっていることから、地域学校協働活動推進員等や放課後子ども教室関係者が熟議等に参加し、活動の一部を学校の取組と連動させていくことが子どもの体験をより豊かにすることに有効である。
- ・地域の実情等により、放課後子ども教室等による活動日数や参加する子どもの人数に相違があることから、放課後子ども教室等の取組を広く周知するとともに、多くの子どもが参加しやすい環境を整えていく必要がある。

② 仮説2に対する検証

〈成果〉

- ・子どもを育む活動を通じて、大人自身のやりがいや生きがいにつながった。
- ・子ども楽級での講座が大人や地域を巻き込んだ活動へと広がり、新たな学びが生まれた。
- ・子どもを育む活動をきっかけとして、大人と大人、大人と子ども等の新たなつながりが生まれた。また、そこからグループができ新たな活動が生まれることも期待できる。
- ・活動を通じた新たな人間関係の構築や地域での活動への発展等は、地域の活性化にもつながる。

〈課題〉

- ・地域学校協働活動推進員等、活動や人材をコーディネートする人材の後継者が不足していることから、まずは、放課後子ども教室等での活動を広く地域住民に知ってもらい、多くの方が気軽に活動に参加したり、関わったりできる環境づくりが必要である。

3 総合考察

・内容が第5とかぶるため、

	<p>仮説1について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校の間を活用した取組は、教育課程内外で子どもたちが豊かな体験活動に触れる機会を設けることにつながり、体験格差を是正しつつ、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むことにつながった。 ○ いずれの検証モデルや事例においても、それぞれの活動や物事における地域の経験者や専門家が活動に関わり、子どもが実物に触れたり、実際に活動を体験したりすることで、意欲の向上や主体的な学びへとつながっていた。 ○ 子どもたちの意欲や主体性は、活動における目的の共有や子どもの言動の見取りの視点等を活動に関わる大人が共有することで、単に活動を行う場合に比べて、より高めることができる。 ○ 教育課程内で実施される活動は、教育目標を達成するために行われる活動であり、生徒が行うことができる活動には一定の制限が課されることから、より深く探究するためには、学校での学びをきっかけとして地域等で行われる教育課程外の取組につなげていく必要がある。 ○ 学校と地域が連携・協働して子どもの意欲や主体性を育む活動を充実させるためには、地域と学校が熟議を通じて目的等を共有することと目的を達成するために活動やそれに関わる人やものをコーディネートする地域学校協働活動推進員等の存在と関わりが必要不可欠である。 <p>仮説2について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 活動の目的を学校と地域が共有し、子どもの言動について見取りの視点を持って大人に関わり、子どもたちの言動に価値付けをし、具体的に声かけ等を行うことで、大人自身のコミュニケーション力等の向上にもつながる。 ○ いずれの検証モデル・事例においても、子どもたちの育ちに地域の大人が主体的に関わることで、地域への気づきや地域での緩やかなつながりの形成につながった。 ○ 子どもを核とした地域の活動に関わることは、子どもの意欲や主体性を育むとともに大人自身のやりがいを育むことにつながるとともに、活動を通じた新たな出会い等をきっかけとして、地域での大人の新たな活動が生まれるなど、生きがいくりにつながることも期待できる。 ○ 学校と地域が連携・協働した活動に保護者も参加することで、保護者が子どもとの関わりや地域の大人、保護者同士との関わりを通して学びを深めたり、出会いを通じた家庭の孤立化を防止したりすることにもつながる。 	<p>削除した。</p>
--	--	--------------

第5 子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について

1 3つの視点から見た方策

(1) 視点①

学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。

- 子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、豊かな体験活動⁴が必要であり、こうした経験を通じて、子どもは自らの夢を育むことができる。
夢育の推進においては、就学前の子どもの保護者を含めた、幅広い世代への豊かな体験活動の働き掛けを求める。
なお、体験格差が生じている実態を踏まえ、その是正を図る必要がある。
- 体験格差の是正や学活⁵の視点から、子どもや地域にとって最も身近な存在である学校の場合を活用し、教育課程内で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の場合を活用し、豊かな体験活動を提供することが望ましい。
- 学校と地域が連携・協働して行う取組を豊かな体験活動とするためには、学校と地域の関係者間で、子どもの実情や課題を整理し、活動目的や活動で育む子ども像、育みたい力等を共有した上で、大人は子どもの活動に制限をかけすぎることなく、「伴走者」として適切な支援をすることが求められる。

⁴大人から与えられたものではなく、子どもの「やりたい!」「やってみたい!」という内的動機付けにより行われ、かつ、本物に触れたり、「見る」「触る」「味わう」といった直接的な体験、自分たちで計画して実行する活動 (第2より)

⁵最も関わりやすい学校という場を拠点に、保護者が保護者同士・地域の大人・子どもとの関わりを通して学ぶ取組。 令和2年6月岡山県生涯学習審議会及び社会教育委員の会議「保護者の学び方改革～みんなで育つ、学活のススメ～(提言)」

第6 全体の総括

諮問事項の3つの視点を踏まえ、答申の総括を行う。

【視点1】

学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。

- 子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、豊かな体験活動が必要であり、こうした経験を通じて、子どもは自らの夢を育むことができる。
夢育の推進においては、就学前の子どもの保護者を含めた、幅広い世代の子どもへの豊かな体験活動の働き掛けを求める。
なお、体験格差が生じている実態を踏まえ、**豊かな体験活動の機会を確保することに併せて**、その是正を行う必要がある。
- 体験格差の是正や学活⁴の視点から、子どもや地域にとって最も身近な存在である「学校」の場合を活用し、教育課程内外で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことが望ましい。
- 学校と地域が連携・協働して行う取組を豊かな体験活動とするためには、学校と地域の関係者間で、子どもの実情や課題を整理し、活動目的や活動で育む子ども像、育みたい力等を共有した上で、大人は子どもの活動に制限をかけすぎることなく、「伴走者」として適切な支援をすることが求められる。

⁴大人から与えられたものではなく、子どもの「やりたい!」「やってみたい!」という内的動機付けにより行われ、かつ、本物に触れたり、「見る」「触る」「味わう」といった直接的な体験、自分たちで計画してやってみる活動 (第2より)

⁵令和2年6月岡山県生涯学習審議会及び社会教育委員の会議「保護者の学び方改革～みんなで育つ、学活のススメ～(提言)」

・第5と第6の順番を入れ替えた。

・表記を修正した

・表記のミスを修正した

・上段にある内容とかぶるため削除した。

・第4の表記に合わせ修正した。格差の是正についての考え方をわかりやすくした。

・第2の表記に合わせた

・学活について内容を追記した。

その際、大人が育みたい力を見取るためのポイントを共有し、同じ視点で見取り、声掛けを行うことにより、体験の過程に価値づけし、子どもに活動の価値として意識（内面化）しやすいように関わる大切である。

見取るためのポイントを明確にするためには、活動における行動指標を学校と地域で作成し、共有することが望ましい。

- 教育課程内で豊かな体験活動を行う取組としては、総合的な学習（探究）の時間等で学校と地域が連携・協働し、地域の課題を解決する学習や地域の魅力を発見する学習等が効果的である。
また、放課後や休日に、地域社会全体で豊かな体験活動の場を作っていくことが重要である。

(2)視点②

視点①の取組を行う際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。

- 地域住民、企業、NPO等多様な主体の参画のもと、子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育む潤滑な活動を行う、学校と地域の連携・協働の取組を進めるには、学校のニーズや地域の思いを汲み上げ、学校と地域のつなぎ役となるコーディネーターの存在が不可欠であり、どの学校にも一人は担当するコーディネーターがいることが望ましい。そしてその取組を持続的なものにしていくためには、コーディネーターは法律に位置付けられている地域学校協働活動推進員であることが望ましい。

その際、大人が育みたい力を見取るためのポイントを共有し、同じ視点で見取り、声掛けを行うことにより、体験の過程に価値づけし、子どもに活動の価値として意識（内面化）しやすいように関わる大切である。

見取るためのポイントを明確にするためには、活動における行動指標を学校と地域で作成し、共有することが望ましい。

- 学校と地域が連携・協働して行う取組として、教育課程内で豊かな体験活動を行う取組には、総合的な時間等を活用した地域の課題解決を学習や地域の魅力を発見する学習等が挙げられる。
ただし、学校での体験はあくまできっかけづくりであり、さらに深く体験し、経験を積ませたい場合は、放課後や休日に、地域に委ねることが必要であり、そのためには、地域住民、企業、NPO等多様な主体を巻き込んだ緩やかなネットワークづくりを進めていくことが求められる。

【視点2】

視点1の取組を行う際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。

- 学校運営協議会（コミュニティスクール）と地域学校協働活動を一体的に推進するには、学校と地域が協議の上、取組の目標を共有し、連携・協働した取組を行い、取組後に評価を行い、次の取組につなげていくことが必要である。
- 地域住民、企業、NPO等多様な主体の参画のもと、子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育む潤滑な活動を行う、学校と地域の連携・協働の取組を進めるには、学校のニーズや地域の思いを汲み上げ、学校と地域のつなぎ役となる地域学校協働活動推進員等の存在が不可欠である。

- ・事例は多くが総合的な学習の時間を活用した取組を紹介しているため、効果的と表現を強めている。
- ・学校での体験の後に、地域での体験があると捉えられる可能性があるため、第4回の大久保委員、中山会長の意見を受けて修正した。
- ・ネットワークづくりは体制整備の内容なので視点②へ移動。
- ・表記を統一した。

- ・CSと地域学校協働活動の一体的な推進の前に、体制構築について記載した方が順番としてわかりやすいため、位置を変更した。
- ・第4回の井上委員、延江委員、杉山委員の意見を受け、コーディネーターの存在について強調した。
- ・第4回の幡多委員の意見を受けて、「どの学校にも一人は担当するコーディネーターがいることが望ましい」とした。

<p>○ <u>豊かな体験活動を行うためには、幅広い地域住民の参画が必要である。幅広い地域住民の参画を得るには、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動を有効に活用し、学校と地域の目的の共有、連携・協働した取組の実施、取組の評価と改善というサイクルを作り、次の取組につなげていく必要がある。</u></p> <p>○ <u>放課後や休日に、地域社会全体で豊かな体験活動の場を作っていくためには、地域住民、企業、NPO等多様な主体を巻き込んだ緩やかなネットワークづくりを進めていくことが求められる。</u></p> <p>○ <u>家庭等の状況にかかわらず、全ての子どもに豊かな体験活動を提供していくためには、市町村に対して、必要な予算を確保できるよう働き掛けを行うことも重要である。</u></p>	<p>○ 学校運営協議会（コミュニティスクール）と地域学校協働活動を一体的に推進するには、学校と地域が協議の上、取組の目標を共有し、連携・協働した取組を行い、取組後に評価を行い、次の取組につなげていく必要がある。</p> <p>○ 地域学校協働活動推進員等には、学校の抱える現状や課題、学校が求めを熟知し、加えて社会教育の視点を持ちながら、学校と地域が連携した取組をコーディネートする役割が求められることから、地域学校協働活動推進等に必要な助言や支援を行うため、各市町村に社会教育主事を配置することも1つの有効な手段であると考えられる。</p> <p>○ 学校と地域の実情により、学校と地域の連携・協働の仕組みや体制が整っていない場合や豊かな体験活動を支援する地域の人材が不足している現状を踏まえ、地域をより広域に捉え、岡山県内で子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育む活動をしている企業や団体等を募集・登録し、企業や団体等が持つ専門的な知識やノウハウ等を学校や休日、放課後、地域行事等に取り入れ、豊かな体験活動につなげていく仕組みづくりが求められる。</p>	<p>・位置を変更。内容をわかりやすく修正した。</p> <p>・視点①より移動</p> <p>・第4回の小田委員の意見を受け、予算について追記した。</p> <p>・これは、具体的な方策であるため、後半に移動。</p> <p>・具体的な方策であるため、後半へ移動。</p> <p>・表記を統一した。</p>
<p>(3)視点③</p> <p>子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。</p> <p>○ 地域と学校が連携・協働することが、地域住民と教職員の信頼関係の構築や<u>地域住民同士</u>の新たなつながりづくりに役立つことが期待できる。</p> <p>○ 地域住民が子どもたちへ豊かな学びを提供することを通して、地域住民による<u>地域づくりへと活動</u>が広がっていくことが期待できる。</p>	<p>【視点3】</p> <p>子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。</p> <p>○ 地域と学校が連携・協働することが、地域住民と教職員の信頼関係の構築や新たなつながりづくりに役立つことが期待できる。</p> <p>○ 地域住民が子どもたちへ豊かな学びを提供することを通して、地域住民による<u>地域づくりや、地域活性化へとつながる活動</u>が広がっていくことが期待できる。</p>	<p>・表記を詳しくした。</p> <p>・表記ミスの修正</p>

○ 関係者と活動の目的を共有し、見取りの視点を持って子どもたちの活動に関わったことによる非認知能力の向上につながる子どもの姿を見取る力や、大人自身の非認知能力（自制心、意欲、共感性等）そのものの向上により、よりよい人間関係の構築が期待できる。

2 まとめ

○ 地域と学校が連携・協働し、子どもや地域にとって最も身近な存在である学校の間を活用し、教育課程内で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の間を活用し、豊かな体験活動を提供することによって、子どもたちの意欲や主体性等を育むことができる。

○ 教育課程内で豊かな体験活動を行う取組としては、総合的な学習の時間等で学校と地域が連携・協働し、地域の課題を解決する学習や地域の魅力を発見する学習等が効果的である。

○ その際には、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動の仕組みを利用して、地域学校協働活動推進員等がコーディネーターとなり、学校と地域の関係者をつなぎ、子どもの実情や課題の整理、活動目的や活動で育みたい力、その力を見取るためのポイント等を共有することが重要である。

○ そのようにして、子ども達の育ちに地域の大人が主体的に関わることで、子どもだけでなく、大人にも、非認知能力の向上につながる子どもの姿を見取る力や大人自身の非認知能力（自制心、意欲、共感性等）そのものの向上なども期待される。また、大人同士の新たなつながりが生まれ、地域づくりへと活動が広がっていくことが期待される。

○ 関係者と活動の目的を共有し、見取りの視点を持って子どもたちの活動に関わったことによる非認知能力の見取り力の向上、更には大人自身の非認知能力（コミュニケーション力等）の向上により、よりよい人間関係の構築が期待できる。

・ 3つの視点を受けて、諮問に対する回答として、まとめを記載した。

3 具体的な方策の提案

(1) 地域と学校をつなぐ人材の育成

- 学校と地域の連携による豊かな体験活動を実施するためには、地域学校協働活動推進員等のコーディネーターとなる人材の育成が重要である。

ア 地域学校協働活動推進員等の養成

- ・ 地域と学校の効果的な連携・協働を推進するためには、各学校に、地域学校協働活動推進員等が1名以上在籍することが望ましいため、保護者や地域住民等幅広い立場の人々を対象に、地域学校協働活動推進員等の養成研修会を行い、新たな人材を確保していくことが必要である。

第5 学校と地域をつなぐための方策について

1 地域学校協働活動推進員等の役割等について

第4の笠岡東中学校の取組において、学校と地域のつなぎ役のコーディネーターが重要な役割を担っていたように、多様な地域住民が参画し、効果的な地域学校協働活動が行われている学校（地域）の共通点として、学校と地域のつなぎ役（コーディネーター）となる地域学校協働活動推進員（岡山県：令和4年1月時点 270名）、学校運営協議会関係者、地域学校協働活動関係者（以下「地域学校協働活動推進員等」という。）の存在がある。

学校と地域の連携による豊かな体験活動を実施するためには、地域学校協働活動推進員等の役割が重要である。

そこで、実践者として、学校と地域のつなぎ役として実績を持つ5名へのヒアリングを踏まえ、地域学校協働活動推進員等に求められる役割について検討した。

(1) 地域学校協働活動推進員等の役割について

① 地域側としての学校との関わり

実践者1（一社）やかげ小中高子ども連合代表理事

学校との関係づくり

- ・ 学校の管理職や教職員の理解を得るために、こまめな報告・調整を行い、学校の教育課程等を理解することに時間をかけている。

- ・ 事例の検証の後、具体的な方策を記載すると違和感があるため、第5を第6と順番を入れ替えて、「まとめ」⇒「具体策」という形にする。また、第5と第6を統合して記載する。
- ・ 推進員等の役割が前とつながりにくいため、タイトルを変更した。
- ・ 途中にある推進員等の養成を最初に移動した。

- ・ ヒアリング内容については、別紙参考資料に入れることとする。

- ・ 学校行事や学習内容に関連した活動を提案するなど、学校の負担軽減につながる活動になるよう留意している。

関係者との目的の共有

- ・ 学校へ赴き、当該団体のチラシなどを用いて、団体の活動内容や、活動を通じた子どもたちの成長について日頃から説明を行っている。活動に参加する子どもの変化などから、学校の理解も徐々に深まっている。

活動に当たり心がけていること

〈活動の企画立案や実施について〉

- ・ 活動内容については、子どもの思いを大切にしている。
- ・ 活動を通じて、大人から子どもたちへアドバイスや提案を行うこともあるが、基本的に、子どもたちの中から生まれてくる「やってみよう」「楽しそう」という思いを大切に、子どもたちの選択や企画をサポートしている。
- ・ 幅広い地域住民に活動へ参加してもらうために、学校や地域の活動の一部分だけにでも関わることができるなど、柔軟性や気軽さが肝心であると意識し活動している。

実践者 2： 久米南町地域おこし協力隊 ※

※協力隊の活動の中で、中高生が中心となり、久米南町の商店街の活性化を図る「未来商店街」事業のコーディネーターを務める。

学校や行政との関係づくり

- ・ 町内の3小学校は地域とのつながりを持ち、地域も教育活動に協力的な基盤がある。学校と地域関係者の中で直接的なやり取りが行われているため、地域おこし協力隊は必要に応じて学校と地域学校協働活動関係者等との連絡・調整を行っている。

関係者との目的の共有

- ・ 中学校では令和3年度から新たに地域学習（久米南学）が始まり、コーディネーターとして、学校と地域の連絡・調整を行う中で、お互いの思いや意見を共有する等、双方の関係性を構築中である。
- ・ 「久米南町未来商店街」において、行政と学校、行政と地域という関係性はできているが、中学校と地域が直接関わる機会は少なく、今後の課題である。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動実施に関して〉

- ・ コロナ禍で「久米南町未来商店街」の実施は難しい状況であるが、中高生が活躍できる場や中高生と地域の人との結びつきを持てるように実行委員会の開催を続けている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 授業等で教員が対応できない時間帯においては、地域おこし協力隊が地域のボランティア等と打合せを行っている。

② 行政担当者としての学校・地域との関わり

実践者3 井原市教育委員会担当者

学校や地域との関係づくり

- ・ 市内全小・中学校区（13小・5中）にひとつづくりネットワーク運営協議会を設置した。
- ・ 各学校区の代表者により組織する井原市ひとつづくりネットワーク運営協議会を立ち上げ、年2～3回の協議会、懇談会を実施し、学校区を越えた情報共有や、関係者の資質向上につながる情報の提供を行っている。

関係者との目的の共有

- ・ 各学校区の実情に応じて年2～3回の協議会（協議会員による企画会議）、年1～2回程度の懇談会（協議会員及び地域人材による熟議を取り入れた研修会）を開催し、目指す子ども像（必要に応じて学校像、地域像、家庭像も検討）を踏まえた地域学校協働活動を推進している。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動実施に関して〉

- ・ 各学校区での取組は、各協議会（学校）に委ねているが、依頼や相談があれば、教育委員会事務局員やひとつづくりアドバイザーが助言等の支援や熟議のファシリテーション等を行っている。その際は、各学校区の実情を踏まえ、「一律型」、「トップダウン型」にならないように配慮するとともに、機会をとらえ、地域学校協働活動の好事例を発信するよう心がけている。
- ・ 各協議会（学校）に対しては、取組の進捗状況の報告を適宜依頼し、現状の把握とともに、必要に応じた助言に努めている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 地域住民との連絡・調整については、各協議会（学校）を通して実施している。外部人材とのマッチングや本事業に対する要望や問合せ等の各協議会（学校）との連絡・調整については、教育委員会の担当者が窓口となり対応している。

③ 学校関係者としての地域との関わり

実践者4：浅口市立寄島小学校長

地域との関係づくり

- ・ 保護者や地域の方、学校ボランティア等が来校したり、地域で会った

- りした時などは、気軽に声をかけ、信頼関係を構築している。
- ・ 地域学校協働活動に校長が率先して参加し、人間関係を深めている。
- ・ 「校長室だより」を作成し、地域に配布することで、校長の考えや学校の取組を発信している。

関係者との目的の共有

- ・ 地域に開かれた教育課程「よりしま学」の実現に向けて、学校や地域の現状や課題を把握するため、アンケートを実施した。アンケート結果をもとに、学校運営協議会で熟議を行い、学校と地域の共通目標「CS 共育目標」を作成した。「CS 共育目標」は、アンケート結果とともにフィードバックし、教職員、保護者、地域住民で共有している。
- ・ 教職員、保護者、地域住民、児童がフラットな関係で互いの考えを出し合う場として、熟議を設けている。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動実施に関して〉

- ・ 「CS 共育目標」を達成するため、学校運営協議会の下部組織や校内体制を整備するとともに、地域学校協働活動において、地域が主体となって企画運営をしなければ地域の活性化につながらないことを伝え、当事者意識の醸成を図っている。
- ・ 地域に開かれた教育課程「よりしま学」を通じて、子どもだけでなく、教職員も地域住民とともに地域を学び、双方が当事者として考え、行動できるよう意識変革を図っている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 地域と持続可能で緩やかなネットワークを構築していくために、学校の窓口として主幹教諭がプロジェクトマネージャーを担当し、4名の地域の魅力化コーディネーターと連絡調整を行うよう体制を整えた。

実践者5 勝央町立勝間田小学校長

地域との関係づくり

- ・ 校長が率先して、毎朝の見守り活動（あいさつ運動）や地域の行事等に積極的に参加し、地域住民との顔合わせや情報交換等を行うよう心がけている。

関係者との目的の共有

- ・ 年間6回開催する学校運営協議会のうち2回は教職員も参加するよう促し、テーマに沿った熟議を行い、学校・地域・家庭での取組や連携・協働して行うことの共通理解を図っている。
- ・ 学校と地域の相互理解のために、校長と地域連携担当教職員が勝央町コーディネーター連絡会へ出席し、取組の課題や目的を共有している。

地域学校協働活動推進員等に求められる役割

・ 地域と学校のつなぎ役として実績を持つ5名へのヒアリング（別紙資料編参照）の結果を踏まえ、円滑に地域と学校をつなぐために、地域学校協働活動推進員等には、次の4点が必要である。

- ① 日頃から、学校や地域との関係づくりを行っていること。
- ② 活動で育みたい子ども像等活動の目的について、学校や地域の関係者等と共有していること。
- ③ 活動の目的を達成するための取組を企画立案し、実行すること。
- ④ 活動に関わる人とながることができるよう円滑な調整を行っていること。

・ 地域学校協働活動推進員等に求められる役割は、社会教育主事に求められること（次の①～⑤）と重なる部分が多く、地域学校協働活動推進員等のスキルアップのためには、社会教育主事講習の受講を促していくことも有効である。

- ・ 学校が目指す「夢育の推進」や「非認知能力の育成」の方向性や、関連する取組等について、学校だよりのほか、勝央町の広報誌を活用し、広く町民に対しても紹介している。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動の実施に関して〉

- ・ 教職員の意識を高めることが必要と考え、学校経営計画書の中に「地域との連携に関する内容」を位置付け、教職員の意識高揚と取組の充実に努めている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 定期的にコーディネーターに来校してもらい、教頭・地域連携担当教職員と意見交換をしている。

5名の実践者の活動地域、学校の特色、課題等は異なるものの、共通点として、次の4つがある。いずれの点も、学校と地域の連携・協働の取組を持続可能なものとしていくために、学校と地域のつなぎ役となる地域学校協働活動推進員等に求められる役割である。

- ① 日頃から、学校や地域との関係づくりを行っていること。
- ② 活動で育みたい子ども像等活動の目的について、学校や地域の関係者等と共有していること。
- ③ 活動の目的を達成するための取組を企画立案し、実行すること。
- ④ 活動に関わる人とながることができるよう円滑な調整を行っていること。

(2)地域学校協働活動推進員等の養成及びスキルアップについて

○地域学校協働活動推進員等の養成

学校と地域の効果的な連携・協働を推進するためには、各学校に、地域学校協働活動推進員等が1名以上在籍することが望ましいため、保護者や地域住民等幅広い立場の人々を対象に、地域学校協働活動推進員等の養成研修会を行い、新たな人材を確保していくことが必要である。

○地域学校協働活動推進員等のスキルアップ

- ・ 学校と地域の連携による豊かな体験活動を実施するためには、活動における子どもの言動を大人が適切に評価し、具体的にフィードバックすることが重要であり、そのためには、地域学校協働活動推進員等を対象に、非認知能力に関する理解を促進し、子どもの言動に価値付ける方法を学ぶ機会を設ける必要がある。

・ 同じ項の前半に移動。

・ 地域とつなぐためには、社会教育主事に求められることの方が重なるため、順番を変更した。

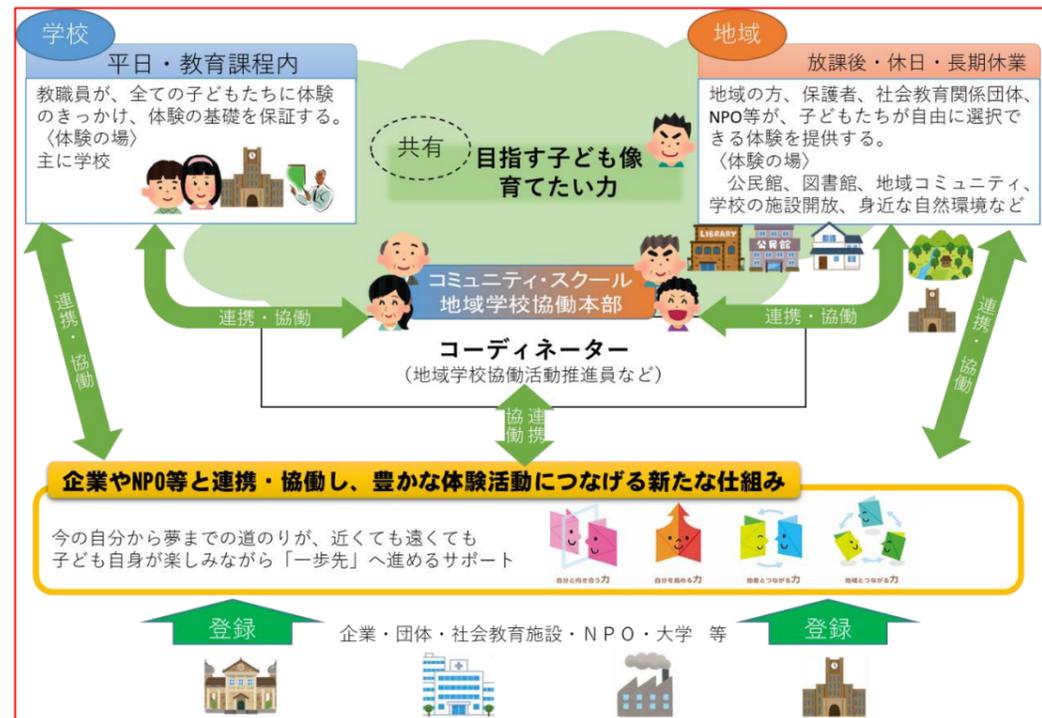
・ 「必要がある」とまでは言え

<div data-bbox="296 184 825 403" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ① 学習課題の把握と企画立案能力 ② コミュニケーション能力 ③ 組織化援助の能力 ④ 調整者としての能力 ⑤ 幅広い視野と探究心 </div> <p>・さらに学校と地域の連携による豊かな体験活動を実施するためには、活動における子どもの言動を大人が適切に評価し、具体的にフィードバックすることが重要であり、そのためには、地域学校協働活動推進員等を対象に、非認知能力に関する理解を促進し、子どもの言動に価値付ける方法を学ぶ機会を設ける必要がある。</p> <p>ウ 市町村における社会教育主事の配置について</p> <p>・多様な専門性を有する地域の人材や設備を結びつけながら、学校と地域の連携・協働を効果的に進めるためには、各市町村において、学校や地域学校協働活動推進員等へ必要な助言や支援を行う専門的職員である社会教育主事の全市町村での配置が望ましい。社会教育法第九条の二においても都道府県及び市町村の教育委員会事務局に、社会教育主事を置くこととされているが、人事異動等により社会教育主事が不在の市町村も存在している現状があるため、社会教育主事の必要性を働きかけるとともに、社会教育主事のスキルアップにも努めていくことが必要である。</p> <p>(2)管理職等の豊かな体験活動への理解の促進</p> <p>○ 地域と学校が連携・協働し、豊かな体験活動を提供していくためには、学校関係者や地域住民等が、地域と学校の連携・協働や豊かな体験活動の必要性について、より一層理解を広げることが重要となる。特に学校長や市町村教育委員会の長等、組織のリーダーの理解が進むよう、働き掛けていく必要がある。</p> <p>(3)子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むための企業やNPO等と連携・協働した仕組みづくり</p> <p>○ 第4において、子どもたちの意欲や主体性等、自分を高める力を育むための、学校と地域が連携・協働する効果的な体制を検証したが、学校と地域が連携・協働する仕組みや体制が十分に整っていない場合や豊かな体験活動を支援する地域の人材や設備が不足している場合もある。このような場合においては、地域をより広域に捉え、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域学校協働活動推進員等に求められる役割は、社会教育主事に求められること（次の①～⑤）と重なる部分が多く、地域学校協働活動推進員等のスキルアップのためには、社会教育主事講習の受講を促していく必要がある。 <div data-bbox="1469 451 1944 672" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ① 学習課題の把握と企画立案能力 ② コミュニケーション能力 ③ 組織化援助の能力 ④ 調整者としての能力 ⑤ 幅広い視野と探究心 </div> <p>(3)市町村における社会教育主事の配置について</p> <p>多様な専門性を有する地域の人材や設備を結びつけながら、学校と地域の連携・協働を効果的に進めるためには、学校や地域学校協働活動推進員等へ必要な助言や支援を行う専門的職員である社会教育主事について、教員籍等の学校教育と社会教育双方をよく理解している者を、県内市町村に配置することが望ましい。</p> <p>※社会教育法第九条の二 都道府県及び市町村の教育委員会の事務局に、社会教育主事を置く。</p> <p>2 子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むための企業や NPO 等と連携・協働した仕組みづくり</p> <p>第4において、子どもたちの意欲や主体性等、自分を高める力を育むための、学校と地域が連携・協働する効果的な体制を検証したが、学校と地域が連携・協働する仕組みや体制が十分に整っていない場合や豊かな体験活動を支援する地域の人材や設備が不足している場合もある。このような場合においては、地域を</p>	<p>ないため、表現を弱めた。</p> <p>・社会教育法の表記を文中に統合した。</p> <p>・第4回での小田委員の意見を受け追加した。</p> <p>・表記を統一した。</p>
---	---	---

育む活動を実施する企業、NPO、社会教育団体等の団体（以下「企業やNPO等」という。）と学校をつなぎ、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を学校の教育活動や休日、放課後等の地域での活動等に取り入れ、豊かな体験活動につなげていくような仕組みづくり（イメージ図参照）が必要である。

この仕組みにより、学校においては、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を教育活動に取り入れ、子どもたちの学びを充実させることができるとともに、学区内の人材や設備だけでは学ぶことのできない領域の活動を行うことが可能になる。また、企業やNPO等においては、活動を通じて、地域への貢献に留まらず、企業理念等を地域や子どもたちへ伝えることや、子どもたちや保護者が企業やNPO等について知り、身近な存在に感じることで、中長期的な人材確保につながり、学校と企業やNPO等の全てにメリットが期待できる。

図 20 仕組みのイメージ図



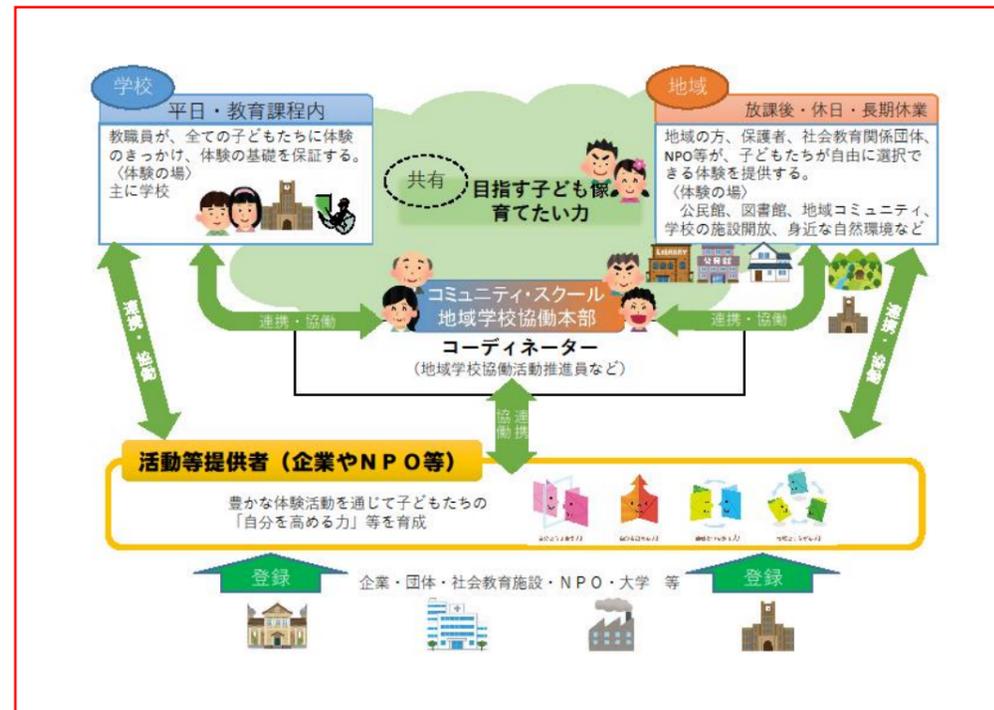
県内の企業やNPO等がその活動により育む力の例

- 「自分を高める力」 意欲・自信・自発性・チャレンジ精神・主体性等
- 「自分と向き合う力」 自制心・忍耐力・レジリエンス（回復力）等
- 「他者につながる力」 コミュニケーション力・コラボレーション力
共感性・協調性 等
- 「地域につながる力」 他者につながる力+郷土愛・当事者性 等

より広域に捉え、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む活動を実施する企業、NPO、社会教育団体等の団体（以下「企業やNPO等」という。）と学校をつなぎ、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を学校の教育活動や休日、放課後等の地域での活動等に取り入れ、豊かな体験活動につなげていくような仕組みづくり（イメージ図参照）が必要である。

この仕組みにより、学校においては、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を教育活動に取り入れ、子どもたちの学びを充実させることができるとともに、学区内の人材や設備だけでは学ぶことのできない領域の活動を行うことが可能になる。また、企業やNPO等においては、活動を通じて、地域への貢献に留まらず、企業理念等を地域や子どもたちへ伝えることや、子どもたちや保護者が企業やNPO等について知り、身近な存在に感じることで、中長期的な人材確保につながり、学校と企業やNPO等の全てにメリットが期待できる。

図 20 : 仕組みのイメージ図



県内の企業やNPO等がその活動により育む力の例

- 「自分を高める力」 意欲・自信・自発性・チャレンジ精神・主体性等
- 「自分と向き合う力」 自制心・忍耐力・レジリエンス（回復力）等
- 「他者につながる力」 コミュニケーション力・コラボレーション力
共感性・協調性 等
- 「地域につながる力」 他者につながる力+郷土愛・当事者性 等

図を分かりやすいものに差し替えた

**企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む
活動事例①**
カンコーマナボネクト株式会社

ア 団体の概要

「非認知能力」の育成を軸に、これからの時代に求められる力を育み、環境の変化を乗り越えて、多様な人々と協働しながら、自分らしい人生を切り開いて行けるひとづくりを目指し活動している企業。全国の幼保・小学校・中学校・高校・大学、行政、企業、地域団体等と協働し、授業や研修等のプログラム開発から評価設計、魅力発信等に取組んでいる。

イ 主な事業（活動）内容

- キャリア教育事業
- 人材育成事業
- 学校魅力化事業
- 働き方改革・業務改善事業

ウ 事業例①：人財育成事業

「非認知能力パートナー養成講座（教員、保育士、地域スポーツ指導者、地域文化活動の指導者、保護者）」

(概要)

子どもと関わる大人が非認知能力について理解し、非認知能力を高めることを意識して子どもと関われるようになることを目的に、非認知能力の伸ばし方を学ぶ研修プログラムを岡山大学の中山准教授と共同開発し、定期的に研修会を開催している。受講者は教員、保育士、地域スポーツ指導者、地域文化活動の指導者など多岐に渡り、令和3年度には、岡山県生涯学習課から事業委託を受け、未就学児を持つ保護者向けの研修プログラムを開発した。

事業例②：キャリア教育事業

「Ancsプログラム（小学校高学年～高校生）」

(概要)

地域の大人が、これまでの人生の浮き沈みをグラフで示しながら職業観や人生観、夢や目標を紹介。子どもたちは講話を通じて、自分の強みや弱みを考え、仲間と認め合いながら、10年後の自分の姿を描くプログラム。今の自分を認め、生き方を考えることで、教育活動に対する動機づけにもつながっている。これまで延べ2,000名以上の児童生徒が参加しており、教員やゲストとの振り返りや研修なども行っている。

**企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む
活動事例②**
NPO法人備前プレーパークの会

**企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む
活動事例①**
カンコーマナボネクト株式会社
Ancs プログラム、カンコーNCS プログラム等を記載予定

**企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む
活動事例②**
NPO法人備前プレーパーク

・カンコーマナボネクトより提供いただいた情報を記載した。

備前プレーパークに確認してもらい、表記を修正した

ア 団体の概要

備前市内の自然豊かな里山環境を最大限に活かすプレーパークである。「森の冒険ひみつ基地」を拠点とし、子どもの遊ぶ環境の充実や子育て支援、多世代交流等の事業を行っている。

イ 主な事業

- 備前市地域子育て支援拠点事業
- プレーパーク事業
- 備前市利用者支援事業
- 森のようちえん事業
 - 0～2歳児対象の小規模保育園の運営
 - 3～5歳児対象の認可外保育施設の運営

ウ 事業例：プレーパーク事業「森の冒険ひみつ基地」

(概要)

既設の固定遊具はなく、火や水、土、木、落ち葉などの自然環境、廃材や身近な道具などから、自らひらめき、発見し、自由に遊びを創造できる遊び場である。

自由な遊びを通じて人と関わり合い、創意工夫し、挑戦・失敗し、それらを乗り越えていく中で、子どもたちの自己肯定感や非認知能力等、目には見えない「心の根っこ」を育む。

遊びの例

- ・子どもの主体的な興味、関心をベースにした自由な遊び
- 落ち葉集め、昆虫採集、トカゲとり、自由工作（紙・自然物・粘土・木工）、昔遊び、たき火、どろんこ遊び、水遊び、ダムづくり、ままごと、鬼ごっこ、探検ごっこ、べっこうあめづくり、まきまきパンづくり、やきいも、ひみつ基地づくり、名のないあそび 等

ア 団体の概要

備前市内の自然豊かな里山環境を最大限に活かすプレーパークである。「森の冒険ひみつ基地」を拠点とし、子どもの遊ぶ環境の充実や子育て支援、多世代交流等の事業を行っている。

イ 主な事業

- 備前市子育て支援事業
- プレーパーク事業（「森の冒険ひみつ基地」）
- 備前市利用者支援事業
- 森のようちえん事業
 - 0～2歳児対象の小規模保育園の運営
 - 3～5歳児対象の認可外保育施設の運営

ウ プレーパーク事業「森の冒険ひみつ基地」

(概要)

既設の固定遊具はなく、子どもたちが廃材や身近な道具等を使いながら、自分たちのアイデアとスタイルで楽しむ。

保護者やスタッフが活動内容について話し合う機会を設けながら、活動の振り返り等を行う。

遊びの例

- | | | | | |
|----------|-------|-----|-------|------|
| ひみつ基地づくり | 木工 | 昔遊び | たき火 | 砂遊び |
| どろんこ遊び | 水遊び | 砂遊び | おにごっこ | ままごと |
| 探検ごっこ | おしゃべり | | | |

(ねらい)

- ・子どもが、自然の中での自由な遊びを通して、五感をたっぷり使い、人と関わり合い、創意工夫し、挑戦し、失敗し、それらを乗り越えていくことで成長すること。
- ・子どもの遊びを通じて大人のつながる場をつくること。

(子どもたちの意欲や主体性等を育む活動の例)

火起こし作業

- ・大人が子どもの「自分でやってみたい」という子どもの気持ちを支え、見守る中、就学前の幼児も、何度も失敗を繰り返しながら挑戦し、成功体験を味わう。
- ・火起こしができるようになった子どもが別の子にアドバイスをする姿が見られる。
⇒ チャレンジ精神、忍耐力、意欲、主体性、共感性、協調性の育成

備前プレーパークに確認してもらい、表記を修正した

備前プレーパークに確認してもらい、表記を修正した

・あくまで活動事例であるため、「ねらい」等は削除した。

川づくり

- ・ 初対面の子どもが多い中でも、アイデアを出し合ったり、役割分担を決めたりするなど、山から流れてくる水を生かし、いろいろな道具を使い、協力しながら遊びに熱中する姿が見られる。
 - ・ 乳幼児においても、最初は水を怖がったり、驚いて泣く子もいるが、保護者に見守られながら、タライにためられた水をたたいてしぶきをあげたり、じょうろから出る水を足にかけたりなど、自分のペースで水に親しもうとする姿が見られる。
- ⇒ コミュニケーション力、意欲、主体性の育成

木工作

- ・ 大人は安全面の配慮や工具の使い方のアドバイスなど、必要最低限の関わりにとどめ、子どもたちの主体性を尊重し、子どもの自由な発想を生かし、自然物を使った作品を制作する。就学前の幼児においても、金槌やのこぎりを持って、見様見真似で取り組む姿が見られる。
 - ・ 作品の完成後の「こどもふろしき市」では、子どもが値段設定やブースの形態を考える。
- ⇒ 意欲、主体性の育成

〈豊かな体験活動に関わる大人の成長〉

- ・ 保護者が得意なことを生かし、講師として子どもの活動に関わることや、同じ趣味をもつ保護者が音楽グループを結成するなど新しい活動が生まれている。
- ・ 複数の大人が交代でゆるやかに子どもの遊びを見守ることのできる環境づくりにより、孤独感を持つ親にとっては、余裕を持ち子どもと接することのできる時間となる。
- ・ 我が子を客観的に見る目を養ったり、子育てについて振り返ったりする機会となる。

(今後の課題)

- ・ 遊び場の必要性が専門家等の間では認知されてきている一方で、不登校傾向の児童やその保護者の利用も増えつつあり、学校や教育関係者への周知・連携は不足していると感じており、ソーシャルスクールワーカーなどを通じて、学校と地域を結びつけるとともに、専門家との連携など、学校や福祉関連事業所等を含む関係各所が一体となった支援体制づくりが必要である。
- ・ 共働き世帯の増加などによる家庭の孤立化等が進む中、地域や民間が地域における子育ての伴走者となっていくため、備前市や岡山県全体の学校や行政を含めた様々な機関とつながり、持続可能な地域コミュニティを創設していくことが必要である。

参考資料

笠岡東中学校区で育んでいきたい資質・能力

育てたい力	定義	前期		中期		後期	
		小1・2	小3・4	小5・6・中1	中2・3		
自分と向き合う力	粘り強さ ・継続する力 ・忍耐力 ・回復する力 ・気持ちの切り替え ・落ち着き ・情緒の安定	やるべきことや課題に対して、粘り強く取り組みることができる。	やるべきことや課題に対して、最後まで粘り強く努力を続けることができる。	やるべきことや課題に対して、最後まで粘り強く努力を続けることができる。	自己の設定した課題に対して、自分の役割と責任を自覚し、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げることができる。		
		自分をコントロールする力 ・気持ちを整理し、行動することができる。 ・落ち着き ・情緒の安定	場面に応じて、自分の気持ちを整理し、落ち着いた行動をすることができる。 自分なりの目標の達成や自分の役割を果たすための方法を考え、進んで行動することができる。	場面に応じて、自分の気持ちを整理し、落ち着いた行動をすることができる。 自分なりの目標の達成や自分の役割を果たすための方法を考え、責任をもって行動することができる。	自分のおかれている状況を客観的に捉え、自分の気持ちを整理し、その場に応じた適切な行動をとることができる。		
自分を高める力	主体性 ・責任感 ・目標設定 ・行動力 挑戦力 ・夢を育む ・前向きさ ・向上心 ・自分ならできるという自信	自分なりの目標を決め、それに向けて、進んで行動することができる。	自分なりの目標の達成や自分の役割を果たすための方法を考え、進んで行動することができる。	自分なりの目標の達成や自分の役割を果たすための方法を考え、責任をもって行動することができる。	より高い目標を設定し、主体的に考え、判断し、責任をもって行動することができる。		
		夢や目標を実現するために、初めてのことや難しい課題に前向きに挑戦することができる。	夢や目標を実現するために、初めてのことや難しい課題に挑戦し、前向きな姿勢で取り組むことができる。	夢や目標を実現するために、初めてのことや難しい課題にも積極的に挑戦し、前向きな姿勢で取り組むことができる。	夢や目標を実現するために、試行錯誤をしながらも失敗を恐れず、自信をもって取り組むことができる。		
他者とつながる力	コミュニケーション力 ・あいさつ、返事 ・発信力 ・傾聴する力 思いやる力 ・相手に寄り添う ・思いやり ・共感する 協力・協働 ・団結力 ・協調性 ・仲間を大切にす	あいさつや返事を進んで行うことができる。自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを聞いたりすることができる。	場に応じたあいさつや返事を進んで行うことができる。自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを聞いたりすることができる。	相手の気持ちを考えながら、自分の思いや考えを分かりやすく伝えたり、相手の思いや考えを最後まで聞いたりすることができる。	社会の一員として心を込めて、場に応じたあいさつや返事を進んで行うことができる。自分の思いや考えを相手に伝えるときにも、それぞれの立場を尊重し、いろいろなもの見方・考え方があることを理解することができる。		
		友達に声をかけたり、手助けをしたりすることができる。	身近な人の思いを考え、優しく声をかけたり、手助けをしたりすることができる。	周りの人の思いを考え、優しく声をかけたり、進んで手助けをしたりすることができる。	誰に対しても思いやりの心もち、互いに励まし合い、相手の話や思いに共感し、進んで手助けすることができる。		
		目標に向かって、友達と協力して取り組むことができる。	共通の目標に向かって、お互いの考えを大切にし、身近な人と協力して取り組むことができる。	共通の目標に向かって、異なる意見を大切にし、良いところを認め合ったり、折り合いをつけたりしながら、周りの人と協力して取り組むことができる。	より良い社会の実現に向けて、多様な立場の人と協働し、地域の人・もの・ことに積極的に関わることができる。		

素直さと自分のよさから前向きさへ 寄島小学校の「自己肯定感」

寄島小学校の「自己肯定感」とは、①素直さをもって、②自分のよさを分かっているから、③前向きに取り組むことができる非認知能力である。さらに、自分だけでなく周囲の人たちに対しても同様にとらえたり関わったりするための力でもある。

<p>①素直さ</p> <p>自分のありのままを受け入れ、相手のことも偏見などを持つことなく受け入れられること</p> 	<p>自分の考えや気持ちをそのまま表現することができる</p> 	<p>自分の考えや気持ちを自ら表現できている</p> <p>自分の考えや気持ちを支援されて表現できている</p> <p>自分の考えや気持ちを表現しようとしている</p>		
	<p>自分とは異なる相手の意見を受け入れることができる</p> 	<p>自分と相手の意見をつなげて考えることができている</p> <p>自分と相手の意見の違いをわかっている</p> <p>相手の意見を聞くことができている</p>		
	<p>自分から相手に感謝や謝罪も伝えることができる</p> 	<p>感謝や謝罪を自ら伝えることができている</p> <p>感謝や謝罪を支援されて伝えることができている</p> <p>感謝や謝罪を伝えようとしている</p>		
	<p>②自分のよさ</p> <p>自分自身を肯定的にとらえられるとともに、相手に対しても肯定的にとらえられること</p> 	<p>自分のよさに気づき、その自分のよさを伝えることができる</p> 	<p>自分のよさを自ら伝えることができている</p> <p>自分のよさを支援されて伝えることができている</p> <p>自分のよさを伝えようとしている</p>	
		<p>相手のよさに気づき、その相手のよさを伝えることができる</p> 	<p>相手のよさを自ら伝えることができている</p> <p>相手のよさを支援されて伝えることができている</p> <p>相手のよさを伝えようとしている</p>	
		<p>相手のよさを自分のよさとして取り入れることができる</p> 	<p>相手のよさが自分の中にもあらわれている</p> <p>自分にはない相手のよさがわかっている</p> <p>相手のよさを具体的に挙げるができている</p>	
		<p>③前向きさ</p> <p>いろんな課題に直面したとき、あきらめずに改善や工夫、他者との協力ができること</p> 	<p>いろいろな課題に対して、自ら積極的に取り組むことができる</p> 	<p>複数の課題であっても進んで取り組むことができる</p> <p>複数の課題に関心を広げることができる</p> <p>特定の課題に進んで取り組むことができる</p>
			<p>課題がうまくいかなくても、工夫や改善をすることができる</p> 	<p>解決のための工夫や改善を実行することができる</p> <p>解決のための工夫や改善を考えることができる</p> <p>上手くいかなくても投げ出さないことができる</p>
			<p>課題に取り組む中で、相手に頼り、相手と協力することができる</p> 	<p>お互いの弱みを補い、強みを生かすことができる</p> <p>相手と一緒に協力して取り組むことができる</p> <p>相手に対して頼ったり誘ったりすることができる</p>

○地域学校協働活動推進員等の役割について 実践者5名へのヒアリング結果

① 地域側としての学校との関わり

実践者1 (一社) やかげ小中高子ども連合代表理事

学校との関係づくり

- ・ 学校の管理職や教職員の理解を得るために、こまめな報告・調整を行い、学校の教育課程等を理解することに時間をかけている。
- ・ 学校行事や学習内容に関連した活動を提案するなど、学校の負担軽減につながる活動になるよう留意している。

関係者との目的の共有

- ・ 学校へ赴き、当該団体のチラシなどを用いて、団体の活動内容や、活動を通じた子どもたちの成長について日頃から説明を行っている。活動に参加する子どもの変化などから、学校の理解も徐々に深まっている。

活動に当たり心がけていること

〈活動の企画立案や実施について〉

- ・ 活動内容については、子どもの思いを大切にしている。
- ・ 活動を通じて、大人から子どもたちへアドバイスや提案を行うこともあるが、基本的に、子どもたちの中から生まれてくる「やってみよう」「楽しそう」という思いを大切に、子どもたちの選択や企画をサポートしている。
- ・ 幅広い地域住民に活動へ参加してもらうために、学校や地域の活動の一部分だけにでも関わることができるなど、柔軟性や気軽さが肝心であると意識し活動している。

実践者2： 久米南町地域おこし協力隊 ※

※協力隊の活動の中で、中高生が中心となり、久米南町の商店街の活性化を図る「未来商店街」事業のコーディネーターを務める。

学校や行政との関係づくり

- ・ 町内の3小学校は地域とのつながりを持ち、地域も教育活動に協力的な基盤がある。学校と地域関係者の間で直接的なやり取りが行われているため、地域おこし協力隊は必要に応じて学校と地域学校協働活動関係者等との連絡・調整を行っている。

関係者との目的の共有

- ・ 中学校では令和3年度から新たに地域学習（久米南学）が始まり、コーディネーターとして、学校と地域の連絡・調整を行う中で、お

互いの思いや意見を共有する等、双方の関係性を構築中である。

- ・ 「久米南町未来商店街」において、行政と学校、行政と地域という関係性はできているが、中学校と地域が直接関わる機会は少なく、今後の課題である。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動実施に関して〉

- ・ コロナ禍で「久米南町未来商店街」の実施は難しい状況であるが、中高生が活躍できる場や中高生と地域の人との結びつきを持てるように実行委員会の開催を続けている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 授業等で教員が対応できない時間帯においては、地域おこし協力隊が地域のボランティア等と打合せを行っている。

② 行政担当者としての学校・地域との関わり

実践者3 井原市教育委員会担当者

学校や地域との関係づくり

- ・ 市内全小・中学校区（13小・5中）にひとつづくりネットワーク運営協議会を設置した。
- ・ 各学校区の代表者により組織する井原市ひとつづくりネットワーク運営協議会を立ち上げ、年2～3回の協議会、懇談会を実施し、学校区を越えた情報共有や、関係者の資質向上につながる情報の提供を行っている。

関係者との目的の共有

- ・ 各学校区の実情に応じて年2～3回の協議会（協議会員による企画会議）、年1～2回程度の懇談会（協議会員及び地域人材による熟議を取り入れた研修会）を開催し、目指す子ども像（必要に応じて学校像、地域像、家庭像も検討）を踏まえた地域学校協働活動を推進している。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動実施に関して〉

- ・ 各学校区での取組は、各協議会（学校）に委ねているが、依頼や相談があれば、教育委員会事務局員やひとつづくりアドバイザーが助言等の支援や熟議のファシリテーション等を行っている。その際は、各学校区の実情を踏まえ、「一律型」、「トップダウン型」にならないように配慮するとともに、機会をとらえ、地域学校協働活動の好事例を発信するよう心がけている。
- ・ 各協議会（学校）に対しては、取組の進捗状況の報告を適宜依頼し、

現状の把握とともに、必要に応じた助言に努めている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 地域住民との連絡・調整については、各協議会（学校）を通して実施している。外部人材とのマッチングや本事業に対する要望や問合せ等の各協議会（学校）との連絡・調整については、教育委員会の担当者が窓口となり対応している。

③ 学校関係者としての地域との関わり

実践者 4：浅口市立寄島小学校長

地域との関係づくり

- ・ 保護者や地域の方、学校ボランティア等が来校したり、地域で会った時などは、気軽に声をかけ、信頼関係を構築している。
- ・ 地域学校協働活動に校長が率先して参加し、人間関係を深めている。
- ・ 「校長室だより」を作成し、地域に配布することで、校長の考えや学校の取組を発信している。

関係者との目的の共有

- ・ 学校や地域の現状や課題を把握するため、アンケートを実施した。アンケート結果や地域住民等との熟議により、学校と地域の共通目標「CS 共育目標」を作成した。「CS 共育目標」は、アンケート結果とともにフィードバックし、教職員、保護者、地域住民で共有している。
- ・ 教職員、保護者、地域住民、児童生徒がフラットな関係で互いの考えを出し合う場として、熟議を設けている。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動実施に関して〉

- ・ 「CS 共育目標」を達成するため、学校運営協議会の下部組織や校内体制を整備するとともに、地域学校協働活動において、地域が主体となって企画運営をしなければ地域の活性化につながらないことを伝え、当事者意識の醸成を図っている。
- ・ 地域に開かれた教育課程「よりしま学」を通じて、子どもだけではなく、教職員も地域住民とともに地域を学び、双方が当事者として考え、行動できるよう意識変革を図っている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 地域と持続可能で緩やかなネットワークを構築していくために、学校の窓口として主幹教諭がプロジェクトマネージャーを担当し、4名の地域の魅力化コーディネーターと連絡調整を行うよう体制を整えた。

実践者5 勝央町立勝間田小学校長

地域との関係づくり

- ・ 校長が率先して、毎朝の見守り活動（あいさつ運動）や地域の行事等に積極的に参加し、地域住民との顔合わせや情報交換等を行うよう心がけている。

関係者との目的の共有

- ・ 年間6回開催する学校運営協議会のうち2回は教職員も参加するよう促し、テーマに沿った熟議を行い、学校・地域・家庭での取組や連携・協働して行うことの共通理解を図っている。
- ・ 学校と地域の相互理解のために、校長と地域連携担当教職員が勝央町コーディネーター連絡会へ出席し、取組の課題や目的を共有している。
- ・ 学校が目指す「夢育の推進」や「非認知能力の育成」の方向性や、関連する取組等について、学校だよりのほか、勝央町の広報誌を活用し、広く町民に対しても紹介している。

活動に当たり心がけていること

〈企画立案や活動の実施に関して〉

- ・ 教職員の意識を高めることが必要と考え、学校経営計画書の中に「地域との連携に関する内容」を位置付け、教職員の意識高揚と取組の充実を図っている。

〈関係者との調整に関して〉

- ・ 定期的にコーディネーターに来校してもらい、教頭・地域連携担当教職員と意見交換をしている。

子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について

諮問

県教育委員会では、心豊かに、たくましく、未来を切り拓くことができる人材を育成するため、これまで様々な学びを通じて、必要な資質や能力を養ってきたが、子どもたちがこうした学びを更に進めようとする意欲をもつためには、学びの原動力である夢や目標を育むことが大切である。夢をもち育みながら、その実現のための道筋や方法について考え、更には夢や目標に向かって挑戦する教育である「夢育」について、学校教育のみならず、就学前から、社会教育、家庭教育など様々な学びの機会を通じて推進していきたい。

ついては、子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について、次の視点を踏まえ、調査審議していただきたい。

視点①

学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。

視点②

その際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会(コミュニティ・スクール)や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。

視点③

子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。

答申

1 3つの視点から見た方策

<p>視点① (有用な取組)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには豊かな体験活動が必要である。 体験格差の是正のため、教育課程内で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことや、放課後や休日などの教育課程外で豊かな体験活動を提供することが望ましい。 大人は、育みたい力を見取るためのポイントを共有した上で、子どもに対し、「伴走者」として適切な支援を行う。 教育課程内で豊かな体験活動を行う取組としては、総合的な学習の時間等で地域の課題等を解決する学習や地域の魅力を発見する学習等が効果的である。また、放課後や休日に、地域社会全体で豊かな体験活動の場をつくっていくことが重要である。
<p>視点② (体制づくり)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学校と地域の連携・協働のため、学校と地域のつなぎ役となるコーディネーターの存在が不可欠であり、どの学校にも一人は担当するコーディネーターがいることが望ましい。 学校運営協議会と地域学校協働活動を効果的に推進するため、地域と学校が目的を共有した上で、取組の実施・評価を行い、次の取組につなげる。 地域住民、企業、NPO等多様な主体を巻き込んだ緩やかなネットワークづくりを進めることが求められる。

<p>視点③ (地域側のメリット)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域と学校が連携・協働することが、地域住民と教職員の信頼関係の構築や地域住民同士の新たなつながりづくりに役立つことが期待できる。 ・ 地域住民による地域づくりへと活動が広がっていくことが期待できる。 ・ 子どもたちの活動に関わったことで大人自身の非認知能力の向上が期待できる。
---------------------------	--

2 具体的な方策の提案

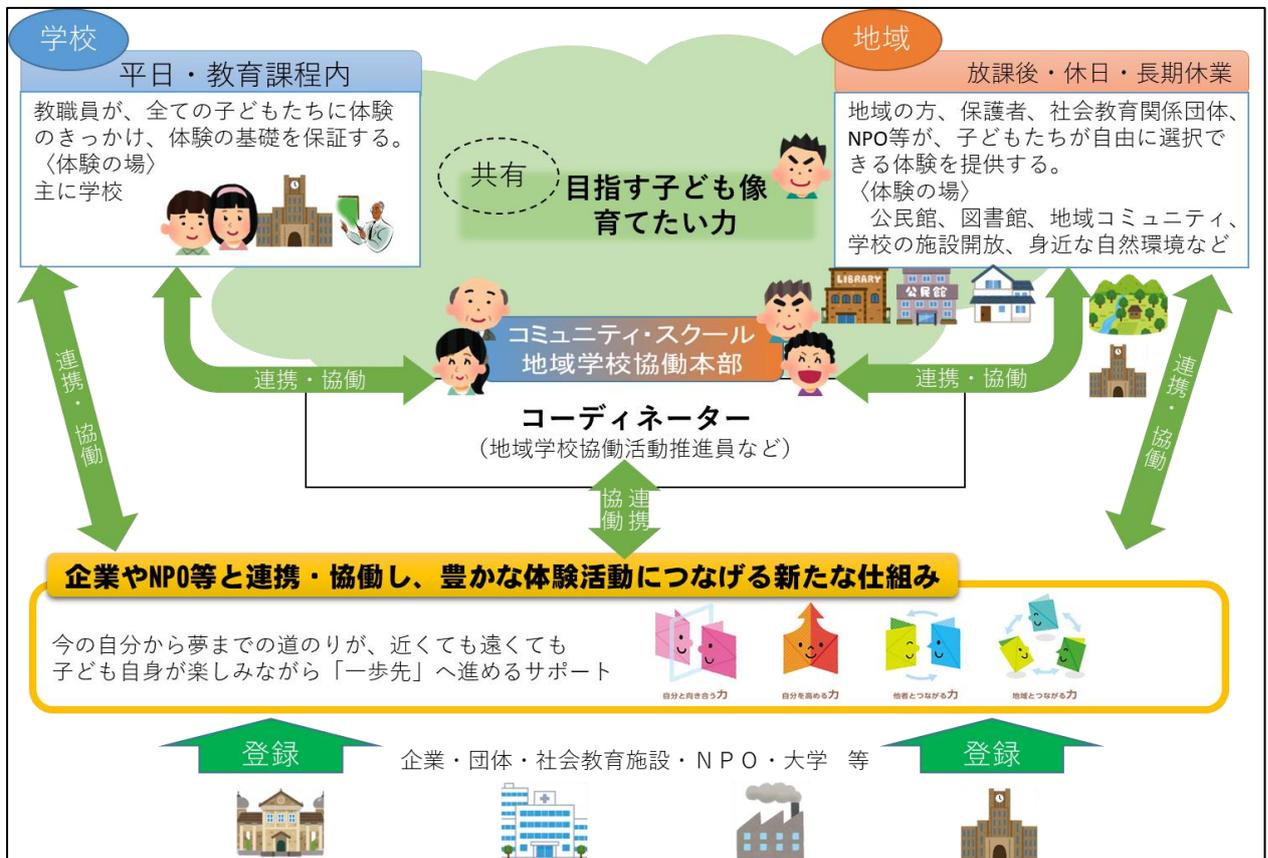
(1) 地域と学校をつなぐ人材の育成

<p>地域学校協働活動推進員等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域と学校のつなぎ役として、各学校に地域学校協働活動推進員等が1名以上在籍することが望ましい。 ・ 養成研修会を行い、新たな人材を確保するとともに非認知能力に関する理解促進を図るなど、スキルアップを促す。 ・ 社会教育主事講習の受講を促す。
<p>市町村における社会教育主事の配置</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各市町村における社会教育主事の配置を働き掛ける。 ・ 社会教育主事のスキルアップを図る。

(2) 管理職等の生涯学習・社会教育への理解の促進

地域と学校の連携・協働や豊かな体験活動の必要性について、校長や市町村教育委員会の長等、組織のリーダーの理解が進むよう働き掛けていく必要がある。

(3) 子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むための企業やNPO等と連携・協働した仕組みづくり





岡山県生涯学習審議会及び
岡山県社会教育委員の会議会長 殿

岡山県教育委員会

子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について（諮問）

生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律（平成2年法律第71号）第10条第2項及び社会教育法（昭和24年法律第207号）第17条第2項の規定に基づき、次のとおり諮問します。

記

1 諮問事項

子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について

2 諮問理由

人口減少、人生100年時代、Society5.0、グローバル化といった社会の変化を見据え、社会や人生、生活をより豊かなものにすることや、複雑化・多様化した社会の課題解決のために、主体的な学びや多様な人々との協働が求められています。

子どもたちが、これからの時代を乗り越え、新たな価値を創造していくためには、意欲を高めることにより、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等の涵養^{かん}といった資質・能力を身に付ける必要があります。

県教育委員会では、「知育」・「徳育」・「体育」をバランスよく促進し、心豊かに、たくましく、未来を切り拓くことができる人材を育成するため、これまで様々な学びを通じて、必要な資質や能力を養ってきました。子どもたちがこうした学びを更に進めようとする意欲をもつためには、学びの原動力である夢や目標を育むことが大切です。

しかしながら、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果によれば、現在、「夢や目標がある」と答えた本県の児童生徒の割合は、小学校6年生で66%、中学校3年生で44%に留まっています。そのため、夢をもち育みながら、その実現のための道筋や方法について考え、更には夢や目標に向かって挑戦する教育である「夢育」について、学校教育のみならず、就学前から、社会教育、家庭教育など様々な学びの機会を通じて推進していきたいと考えています。

ついては、子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について、任期の間、次の視点を踏まえ、調査審議いただきますようお願いいたします。

参考資料

- 学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。
- その際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会(コミュニティ・スクール)や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。
- 子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。

生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律（抜粋）

（都道府県生涯学習審議会）

- 第10条 都道府県に、都道府県生涯学習審議会（以下「都道府県審議会」という。）を置くことができる。
- 2 都道府県審議会は、都道府県の教育委員会又は知事の諮問に応じ、当該都道府県の処理する事務に関し、生涯学習に資するための施策の総合的な推進に関する重要事項を調査審議する。
 - 3 都道府県審議会は、前項に規定する事項に関し必要と認める事項を当該都道府県の教育委員会又は知事に建議することができる。
 - 4 前3項に定めるもののほか、都道府県審議会の組織及び運営に関し必要な事項は、条例で定める。

岡山県生涯学習審議会条例

（設置）

- 第1条 生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律（平成2年法律第71号）第10条第1項の規定により、岡山県生涯学習審議会（以下「審議会」という。）を置く。

（組織）

- 第2条 審議会は、委員25人以内で組織する。

（委員）

- 第3条 委員は、生涯学習に関し識見を有する者のうちから、知事の意見を聴いて、教育委員会が任命する。

- 2 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 委員は、再任されることができる。

（会長及び副会長）

- 第4条 審議会に、会長及び副会長を置き、委員の互選によりこれを定める。

- 2 会長は、審議会を代表し、会務を総理する。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

（専門委員）

- 第5条 審議会に、専門の事項を調査させるため必要があるときは、専門委員を置くことができる。

- 2 専門委員は、当該専門の事項に関し学識経験のある者のうちから、知事の意見を聴いて、教育委員会が任命する。
- 3 専門委員は、会長の命を受け、専門の事項を調査する。
- 4 専門委員は、当該専門の事項に関する調査が終了したときは、解任されるものとする。

（部会）

- 第6条 審議会は、その定めるところにより、部会を置くことができる。

- 2 部会に属すべき委員及び専門委員は、会長が指名する。
- 3 部会に部会長を置き、部会に属する委員の互選によりこれを定める。
- 4 部会長は、部会の事務を掌理する。
- 5 部会長に事故があるときは、部会に属する委員のうちから部会長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（会議）

- 第7条 審議会の会議は、会長が必要に応じて招集し、会長が議長となる。

- 2 審議会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。
- 3 審議会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 4 前3項の規定は、部会に準用する。

（庶務）

- 第8条 審議会の庶務は、教育委員会事務局において行う。

（その他）

- 第9条 この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、審議会が定める。

附則 この条例は、平成13年1月6日から施行する。

社会教育法（抜粋）

（審議会等への諮問）

第13条 国又は地方公共団体が社会教育関係団体に対し補助金を交付しようとする場合には、あらかじめ、国にあつては文部科学大臣が審議会等（国家行政組織法（昭和23年法律第120号）第8条に規定する機関をいう。第51条第3項において同じ。）で政令で定めるものの、地方公共団体にあつては教育委員会が社会教育委員の会議（社会教育委員が置かれていない場合には、条例で定めるところにより社会教育に係る補助金の交付に関する事項を調査審議する審議会その他の合議制の機関）の意見を聴いて行わなければならない。

（社会教育委員の設置）

第15条 都道府県及び市町村に社会教育委員を置くことができる。

2 社会教育委員は、教育委員会が委嘱する。

（社会教育委員の職務）

第17条 社会教育委員は、社会教育に関し教育委員会に助言するため、次の職務を行う。

一 社会教育に関する諸計画を立案すること。

二 定時又は臨時に会議を開き、教育委員会の諮問に応じ、これに対して、意見を述べること。

三 前2号の職務を行うために必要な研究調査を行うこと。

2 社会教育委員は、教育委員会の会議に出席して社会教育に関し意見を述べることができる。

3 市町村の社会教育委員は、当該市町村の教育委員会から委嘱を受けた青少年教育に関する特定の事項について、社会教育関係団体、社会教育指導者その他関係者に対し、助言と指導を与えることができる。

（社会教育委員の委嘱の基準等）

第18条 社会教育委員の委嘱の基準、定数及び任期その他社会教育委員に関し必要な事項は、当該地方公共団体の条例で定める。この場合において、社会教育委員の委嘱の基準については、文部科学省令で定める基準を参酌するものとする。

岡山県社会教育委員の委嘱の基準、定数及び任期に関する条例（抜粋）

（委員の委嘱の基準）

第2条 委員は、学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者並びに学識経験のある者のうちから、岡山県教育委員会が委嘱する。

（委員の定数）

第3条 委員の定数は、15名以内とする。

（委員の任期）

第4条 委員の任期は、2年とし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。ただし、岡山県教育委員会は、特別の事情があると認めるときは、委員の任期中でも解嘱することができる。

附則 この条例は、平成26年4月1日から施行する。

岡山県社会教育委員の会議に関する規則

（趣旨）

第1条 この規則は、岡山県社会教育委員（以下「委員」という。）をもつて構成される岡山県社会教育委員の会議（以下「会議」という。）の運営に関し必要な事項を定めるものとする。

（会議）

第2条 会議に、議長及び副議長各一名を置き、委員の互選により定める。

2 議長及び副議長の任期は、委員としての在任期間とする。

3 議長は、会議を主宰する。議長に事故があるとき、又は欠けたときは、副議長がその職務を代理する。

第3条 会議は、議長が必要に応じて招集する。

2 委員の過半数が出席しなければ会議を開き、議事を決することができない。

3 会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

（専門部会）

第4条 会議に、議長が指名する委員をもつて構成する専門部会（以下「部会」という。）を置くことができる。

2 部会は、会議から付託された事項の調査及び審議を行う。

3 部会に部会長及び副部会長を置き、部会に属する委員のうちから互選により定める。

4 部会長は、部会を招集し、主宰する。

5 部会長に事故のあるとき又は欠けたときは、副部会長がその職務を代理する。

（事務）

第5条 会議に関する事務は、教育庁生涯学習課においてつかさどる。

（その他）

第6条 この規則の施行に関し必要な事項は、議長が別に定める。

附 則

1 この規則は、平成9年4月1日から施行する。

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議 議事運営等に関する申し合わせ事項

1 議事運営について

- (1) 会議は公開とする。ただし、会長が認めたときは非公開とすることができる。
- (2) 審議の経過及び結果の発表が必要な場合は、会長又は会長の指名する者が行う。
- (3) 会長は、必要があると認めるときは、会議に関係者等を招き、意見の開陳又は説明を求めることができる。

2 議事要旨について

- (1) 議事要旨は公開とし、後日県のホームページに掲載する。

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議 会議傍聴要領

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議は、「審議会等の設置及び運営等に関する指針」の趣旨に則り公開いたします。会議傍聴上の留意事項は次のとおりですので、よくお読みください。

1 会議の公開

会議は原則として公開ですが、会長が認めた場合は、非公開となります。

2 傍聴の手続

(1) 傍聴を希望される方は、開議前に傍聴受付簿に氏名、住所を記入しなければなりません。

(2) 会議室の状況により傍聴人数の定員を設定します。傍聴の受付は、先着順で行い、定員になり次第、受付を終了します。

なお、報道関係者で会長が認めた場合は、定められた傍聴人数とは別に傍聴することができます。

3 傍聴できない方

傍聴人は、係員の指示に従い傍聴席に入場してください。ただし、次の各号のいずれかに該当する場合は、傍聴することができません。

(1) 酒気を帯びていると認められる場合

(2) 会議の妨害となると認められるものを携帯している場合

(3) その他会議の公正又は円滑な運営を妨害するおそれがあると会長が認めた場合

4 傍聴される方に守っていただきたいこと

傍聴される方は、次のことをしてはいけません。

(1) みだりに傍聴席を離れること。

(2) 飲食すること。

(3) 私語、談話、拍手等を行うこと。

(4) 議事に批評を加え、又は意見を表明すること。

(5) 許可なく写真を撮影し、録音その他これらに類する行為を行うこと。

(6) 携帯電話用装置その他の無線通話装置を使用しないこと。

(7) その他会議の妨害となるような行為を行うこと。

5 違反に対する措置及び退場

上記に違反したときは、直ちにその行為を中止させますが、その命令に従わないときは、当該傍聴人を退場させます。

上記退場を命じられた場合や、会議を非公開とする議決があったときは、速やかに退場しなければなりません。

6 その他

上記のほか、会議の傍聴に関し、別に指示があったときは、それに従ってください。